



映画に
宛てた
ラブ
レター

2015・総集編

天見谷行人

ご挨拶

みなさま、いつも映画レビューをお読みいただきありがとうございます。過去の映画レビュー集を見ると、1年間に鑑賞した作品のレビュー集に、6,000以上のアクセスがありました。やはり、作品レビューを沢山納めた電子書籍に人気が集中しているようです。そこで2015年に鑑賞した映画のレビュー、全編を網羅する一冊をつくることにしてみました。私、天見谷行人が勝手に選んだ洋画、邦画の年間ベスト5も選出してみました。作品毎に私の独断と偏見に基づく採点付き。映画予告編のリンクもバッチリです。

では、存分にお楽しみくださいませ。

天見谷行人

ANNIE／アニー

2015年2月20日鑑賞

アメリカショービジネスの奥深さ

大成功を収めたブロードウェイミュージカルの映画化ということで、まあ、映画としては当たって「アタリマエ」という作品なんでありませう。

逆に言えば、映画作品として大ヒットしなければ、それは映画としてどこかに欠落があるのだろう、と推察できる訳です。

結論から言えば、僕の感想として本作は「まずまず」といったところ。

気になったのは、監督の演出の荒さが際立ってしまった、というところでしょうか。特に、僕が見ていて気になったのは「編集」でした。

これミュージカルのはずなんだけど、まるでハリウッドのアクション映画でもやってるかのような編集なんですね。

「0, 5秒以下」のカット割りの連続。

大スクリーンがパッパッパッと切り替わる。せせこましいなあ～。

はっきり言って観ている観客は疲れるんですね。

ここは登場人物たちの「絡み」をじっくり見せるシーンだ、と思ってこちらは観ているのに、なぜかそこでもカット割りが実にせわしない。落ち着いて観てられない。舞台でのミュージカルは、映画で言えばワンシーンワンカットの長回しを延々やっている芸術であるはずなんだけど。

舞台と映画の最も大きな違いは、時間と場所なのです。映画の場合、まったく自由に設定できる。屋外でロケをやってもいいし、過去や未来へ行ったり来たりも、編集で自由自在。おまけにカメラワークで観客の視点すら自由に変えることができる。

本作の監督は、このような、舞台では決して出来ないことをやりたい！！と思ったのでしょうか。

本作の後半では、アニーがヘリコプターに乗り込んで、悪い奴の車を追いかける、なんてシーンも有ります。

まあ、舞台ではこんなことできませんわなあ～。

うだうだと御託を述べましたが、決して本作は駄作ではないです。

脚本がしっかりしてる。人物造形もいい。キャスティングもとってもいい。映画として成功する要素は全部備わっているんです。

だから編集が余計に「惜しい～！！」と唸ってしまうわけなんですね。



主人公アニーは両親に捨てられ、民間の養護施設に入っています。

この施設の主が過去の栄光を忘れられない、女優志望のおばさん（失礼）酔っ払って、施設の子供達に遠慮なく当たり散らすし、そのくせ里親希望の「いい男」「金持ち」「独身」が訪問してくれば、もう、なりふりかまわずアピールしまくる。下世話を絵に描いたような女性なんですね。このハニガンという女、なんとキャメロン・ディアスが演じてます。いいですよ、彼女の演技。

ある日、アニーは危うく交通事故に巻き込まれそうになります。そこを助けてくれたのが、ある黒人男性。

その人物こそ、市長候補スタックス（ジェイミー・フォックス）でした。

たまたまその現場に居合わせた市民が、少女を助けた勇敢な男の動画をネットにアップ。

世間ではちょうど市長選挙の真っ最中。

ここで、スタックスの選挙参謀が入れ知恵をするのです。

「アニーはいい宣伝材料ですよ、スタックスさん、この子を前面に押し出せば、好感度アップ間違いなしです！！」

やがて、市長候補スタックスは、アニーを一時的に引き取り、選挙戦に「活用」するのです。

スタックスのマンションに引き取られたアニーとしては、まさにシンデレラストーリー。

今までは一部屋で5、6人のタコ部屋暮らしから、一転、高層ビルの最上階に住む身に成り上がります。ここはスタックスが一人で住んでいる、未来的超豪華マンション。部屋の中には噴水まである。壁に話しかければ大画面のスクリーン映像が現れる。ハイテク装備満載。

こんな部屋に住めるのは、スタックスが携帯電話会社の経営者だから。

スタックスにしても、アニーを使った選挙戦は大好評。スタックスの支持率とともに、アニーの人気も急上昇します。

テレビやマスコミに取り上げられて、彼女は街じゅうの人気者になって行きます。

しかし.....人気者になったアニーに、一つの知らせが入ります。

アニーを捨てた両親が、名乗り出てきたのです。やがてアニーは両親の元へ帰されることになるのですが、そこにはある陰謀が.....。

という訳で。アニー役のクワベンジャネ・ウォレス。若干11歳とは思えない安定した演技力はすごいです。それもそのはず。彼女は「ハッシュパピー バスタブ島の少女」で史上最年少のアカデミー主演女優賞候補にもなっていたんですね。納得の演技でした。



共演のジェイミー・フォックス。以前、劇場鑑賞した「Ray レイ」は忘れられない作品です。キャメロン・ディアスにしても、今回は業突く張りで虚栄心丸出しの、えげつない「オバハン」役をこなしていて、そろそろこういう役を演じる、演技の幅を広げてゆく時期に来ているのだなあ〜と感じます。

主役のアニー役のクワベンジャネ・ウォレス。彼女もきっと凄まじく過酷なオーディションを受け続け、勝ち抜いてきたんでしょうな。

更には、一つの映画で成功を掴んで満足してはダメで、アメリカのショービジネスで成功し続けるには、常に挑戦をし、高みに挑み続けなければならない。本作での、あまりにも完成され、豊かな才能を持った人たちが、スクリーンで演じているところを見ていると、そんな、厳しいアメリカでのショービジネスの裏側に、おもわず想いが膨らんでしまうのでした。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ウィル・グラック

主演 ジェイミー・フォックス、クワベンジャネ・ウォレス

製作 2014年 アメリカ

上映時間 118分

[「ANNIE／アニー」予告編](#)

アメリカン・スナイパー

アメリカン・スナイパー

2015年2月24日鑑賞

心の闇を狙い撃て

観終わった後、ひどく疲労感を感じる作品である。イラク戦場で実際に戦った、兵士たちの疲労、ストレスが尋常じゃないことは、本作からよく伝わってくる。

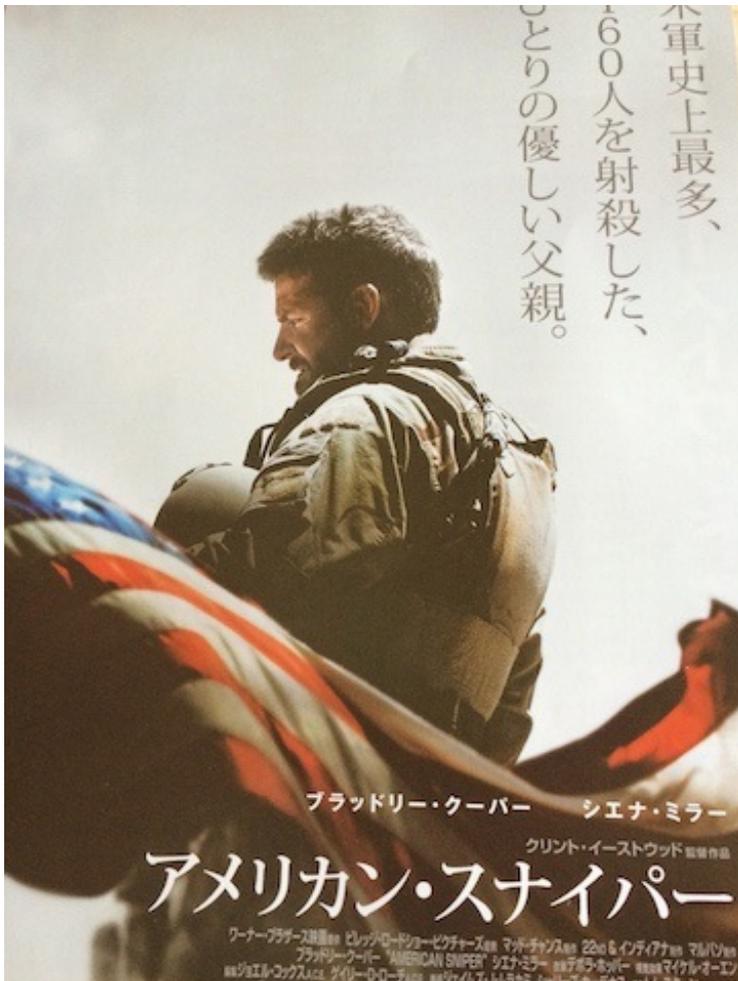
本作の主人公クリス・カイルは実在の人物。当然、本作もドキュメンタリータッチで描かれる。もちろん戦闘シーンでの緊迫感は、実際の戦場さながらだ。

彼はイラクでの戦闘で160人を射殺した伝説の狙撃手である。

彼は現代アメリカ軍で最強とされるSEALsのエリート隊員である。

屈強な肉体をもち、極限の訓練に耐え抜いた人物だ。

やがてイラク戦争が勃発。クリス・カイルも戦地である、イラクに赴く。



アメリカ政府とアメリカ軍は、当初、圧倒的な物量作戦と、先進のハイテク兵器の効果もあって、フセイン政権を比較的たやすく潰すことができた。戦死者も136名とされ、湾岸戦争よりも少なかったようだ。ブッシュ大統領は「戦争は勝った！ 我々はテロに勝利した！」と高らかに宣言した。

しかし、アメリカ政府とアメリカ軍の大きな誤算は戦争の後始末だった。熾烈な泥沼の戦いは、ブッシュ大統領の「戦争終結宣言」の後から始まったのである。それはアメリカ兵士たちにとっ

て悪夢の始まりだった。彼らはイラクの治安維持のために「テロリスト」が潜む街中をしらみつぶしに搜索する羽目になってしまう。

イラクの街や集落。それらをパトロールすることは、まぎれもない「市街戦」の真っ只中に入ることを意味する。

アメリカ軍の優秀な M1 戦車も狭い街中では何の役にも立たない。かといって、第二次大戦や、ベトナム戦のような絨毯爆撃は、「戦争終結宣言」をした後でもあるし、民間人も巻き込む。それは現代戦において、世界中の世論を敵に回すことになる。

結局「戦争は終わった」と宣言された後の、アメリカ軍の戦死者は4,000人を超えるそうである。もちろん、心身に傷を負った兵士はこの数をはるかに上回る。

戦いはいつまでも終わらない。本作の主人公クリス・カイルも、結局イラクの「戦場」へ4回も赴くことになる。

SEALs隊員である彼も、プライベートでは、一人の若者である。

当然恋愛もする。危険で過酷な任務に就かされる事の多いSEALs隊員だが、意外にも皆、恋人をもち、結婚している人も多いのだ。

クリスもやがて結婚し、二人の子供を設ける。

気は優しく力持ち。公園で子供と遊ぶ姿は、どこから見ても温厚で頼り甲斐のある理想的な「パパ」に見える。

しかし、再びイラクの戦場に戻ると、彼は優秀なスナイパーの顔に戻る。彼の仕事はイラクの街中を搜索する、アメリカ軍地上部隊を守ること。クリスは建物の屋上に身を潜め、アメリカ兵士に危害を加えそうな「ターゲット」を探し、照準を定める。

「ターゲット」は敵の「兵士」だけとは限らない。「女性」でも「子供」でさえ、その身に爆弾を隠し持っているかもしれないのだ。

自分にも幼い子供がいる。しかし、照準器で今自分が狙っているのも、子供の姿だ。だが、その小さな体は爆弾を抱えている。また、ロケット砲を担いでアメリカ兵を狙う子供さえいる。

狙撃銃の引き金を引けば、自分は紛れもなく「子供殺し」を行うことになる。

しかし、任務に迷いは禁物だ。

「俺は国を守るんだ」「それが大儀なんだ」

彼は任務を遂行する。

アメリカ軍と敵対する反政府武装勢力側にもスナイパーがいる。これが極めて優秀だ。

この狙撃手は射撃の元オリンピック代表選手との情報が入る。こんな奴に狙われたらおしまいだ。

建物を搜索するアメリカ兵たちは、この凄腕スナイパーに、いともあっけなく「プシュン！」と殺されてしまう。装甲車の上部銃座にいる機関銃手も安心できない。これも「プシュン！」といとも簡単に殺されてしまう。

「目には目をだ！」

主人公クリス・カイルはその凄腕スナイパーを仕留めにかかるのだが……。

巨匠クリント・イーストウッド監督最新作

この男、英雄か— 悪魔か—
伝説的スナイパーの半生を描いた。
衝撃と感動の実話。

アメリカ映画界を代表する巨匠クリント・イーストウッド、2度のアカデミー賞監督賞に輝き、以降も「グラン・トリノ」「ジャージー・ボーイズ」は快活に歩み続けるベテランが、84歳にして戦場という場所に置かれた孤高の男の実話に投入した渾身の力作。

国を愛し、家族を愛し、
戦場を愛した男—。

描かれるのは伝説的スナイパー、クリス・カイルの半生だ。テキサス州に生まれ育ち、少年の頃の夢はカウボーイか軍人。2003年にイラク戦争が始まってから4年に渡り遠征。その最人屠された狙撃の精度は1.5km向こうの標的を確実に射抜くほどだったという。公式記録としては米軍史上最多の160人を射殺。味方からは「伝説的狙撃手」と愛慕される一方、イラクの反政府武装勢力からは「ラマディの悪魔」と称され、その首には2万ドルの懸賞金がかけられた。しかしカイルの意図は、命がけの仕掛けの任務でも仲間を一心に守りたい。そして遠い戦地にいながらも大切な家族に負さず、真実でありたいと願うひとりの男。戦争の狂気に取り憑かれつつ、敵国で待つ家族をこよなく愛する主人公の光と影を生々しく綴り下げる。この複雑な人間関係を、息つく暇もない緊迫感の中で深く手繰るイーストウッドならではの、原作はニューヨーク・タイムズ紙のベストセラー第1位を13週に渡り独占した自伝「ナイビー・シールズ 最強の狙撃手」(原著刊行) 過去に「父親たちの星条旗」「真実からの手紙」など優れた戦争映画を手掛けてきたイーストウッドだが、手に汗握る戦闘シーンなどこれぞ最高傑作であり、全米キャリアの到達点と呼べるものだろう。

主演はブラッドリー・クーパー
本作では自らプロデューサーとしても映画化権を獲得。道徳なトレーニングと食事制限を敢行。戦争により徐々に心を蝕んでいく主人公の心理を繊細にリアルに演じきり、これまで2度のアカデミー賞ノミネートを果たした彼の代表作となる1本。そしてカイルの最後の妻タヤを「GLシユー」のシエナ・ミラーが演じる。

クリス・カイル (1949年 - 2013年)
アメリカ合衆国に実在した誇り高きナイビー・シールズであり、無敵の伝説スナイパー。ブラッドリー・クーパーは伝説スナイパーについて、真実、不慮の事故により亡くなる。享年38歳。その残す妻と娘の死を全家が悼んだ。

本作「ナイビー・シールズ 最強の狙撃手」
原案者 クリス・カイル
スクリプトライター クラウ・クレア・アラス

本年度アカデミー賞®最有力 世界を震わせる。真実のドラマが幕を開ける

www.americansniper.jp

クリント監督の手腕で印象的なのは、イラクに住む民間人を決して敵対的な視点で描かないことである。

ご丁寧にアカデミー賞まで受賞させてしまった「[ハート・ロッカー](#)」という作品がある。

あの作品で僕が最も違和感を感じたのは、全編にわたって主人公の主観の目線、ひいてはアメリカ目線で描かれたことである。

自分の身を守るためには、イラクの街中で携帯電話をかけている民間人でさえ「敵」と見なさなければならない。

なぜなら、携帯電話は自爆テロの起爆装置に転用されるからである。

そのため主人公の視点で描かれる「ハート・ロッカー」ではスクリーンに登場する、頭にターバンを巻いた人物、ひいては「イラク人はすべて悪者」「憎悪の対象」という印象を観客に植え付けかねない。アメリカのプロパガンダ、そのものではないか？ という印象を僕は持った。

その点、昨年公開された「[ローン・サバイバー](#)」では、負傷したSEALs隊員を、タリバンから命がけで守ったアフガニスタンの一部族が描かれている。

このわずか4、5年で、アメリカ映画でのイスラム圏の人々の描き方が変わってきている。この変化はなぜだろうか？

その理由の一つとして、アメリカは今、とても傷つき、疲れているからだ、と僕は感じる。

結局「大量破壊兵器」などなかったし、正義なんてどこにあるのか？ これじゃ、第二のベトナム戦争じゃないか、戦争なんてもうこりごりだ……。

多くのアメリカ市民はそう感じているのではなからうか？

クリント・イーストウッド監督は、21世紀のハイテク戦争「クリーンな戦争」と言われた、戦

争の実態を暴いた。兵士や家族、それに国民自体がどれだけ傷つくのか、それを敏感に感じ取ったのだろう。

いくらハイテクな戦争であろうが、クリーンな戦争であろうが、やはり戦争となれば血の通った人間同士が、殺し、殺される。殺しあう兵士たちはもとより、家族も大きな闇を抱え込む。

のちにクリス・カイルの身に降りかかる、不幸な事件。

それは彼が戦争で心に深い後遺症を負った「仲間」をおもいやる気持ちから起きてしまったものだ。イラク戦争に従軍した兵士たちとその家族。その心の傷との戦いは、今現在も進行中なのだ。

映画鑑賞後の苦い後味が、重くのしかかる作品である。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 クリント・イーストウッド

主演 ブラッドリー・クーパー、シエナ・ミラー

製作 2014年 アメリカ

上映時間 132分

予告編映像はこちら

[「アメリカン・スナイパー」予告編](#)

おみおくりの作法

おみおくりの作法

2015年4月2日鑑賞

あなた、誰に見送られたいですか？

これって、邦画の秀作「おくりびと」の、海外焼き直しバージョンみたいなもんだろ、と、思ってました。しかし、いい意味で、全然違った。あくまでもオリジナルな作品です。

主人公、ジョン・メイを演じるエディ・マーサンの佇まいがいいなあ〜。彼はイギリスで地区の民生委員をやっている。彼の仕事は、孤独死した人の、身寄りを探し、葬儀の手配をし、埋葬まで見届けること。

どこからどう見ても、公務員を絵に描いたような人を好演してます。

ジョン・メイの“おみおくり”を世界が絶賛

ヴェネチア国際映画祭 | アブダビ国際映画祭 | レイキャピタ国際映画祭 | トランシルヴァニア国際映画祭 | トロンハイム国際映画祭 | イタリア・ゴールデングローブ賞
スロヴァキアアート国際映画祭 | エディンバラ国際映画祭 | エレバン国際映画祭 | なら国際映画祭 | ロシア VOICES映画祭 | セルジオ・アムデイ国際映画祭

ラストシーンで
思いがけない感動が
待っている。
—シドニー・モーニング・ヘラルド

観終わった後に
こみあげてくる数々のセリフ
場面の意味
今生きていることの素晴らしさ
小津映画のような、静かな饒舌さ
エディ・マーサンが素晴らしい
—小堺一機さん

ある新聞記事から生まれ、世界が認めた感動作
ガーディアン紙に掲載された孤独死した方の葬儀についての記事。ウベルト・パソリーニ監督はその記事になにか深く、普遍的なものを感じたという。孤独、死、人と人のつながり……。そして、綿密な取材を重ね、几帳面で誠実な地方公務員ジョン・メイの物語、『おみおくりの作法』が誕生した。
このくすつと笑えて、ちょっぴり切ない、心あたまる静謐な物語は、ヴェネチア国際映画祭で監督賞含む4賞を受賞、なら国際映画祭でも観客賞を受賞した。

ジョン・メイ流おしごと

- 亡くなった方の写真を見つけ出す。
- 故人の宗教を探し出す。
- その人にあった弔辞を書く。
- その葬儀にふさわしいBGMを選ぶ。
- 故人の知人を探し、葬儀に招待する。
- 葬儀に列席する。

まじめ、実直、律儀。

夕食も、ナプキンとフォークとナイフをきちんとテーブルにセットしてから摂ります。でも彼、実は料理が苦手。これもご愛嬌です。でも、この人、どこか普通の公務員ではないんですね。カタブツのようで、実は、細やかな配慮ができる人、自分の仕事に気持ちを入れてくる人です。

彼自身は四十代で、アパートに一人住まい。

自宅には彼のひそかなコレクションがあるのです。それはアルバム。そこに貼り付けてあるおびただしい写真たち。それは彼の家族の写真集ではありません。自分が担当した、誰も身寄りが見

つからなかった人たちの写真集です。

時折、彼はそのアルバムを開きます。戦争中でしょうか、古びたシワだらけのセピア色の写真。あるいは、子供の頃に撮ったであろう写真、また、愛する伴侶と撮った、幸せそうな笑顔の写真などなど。だけどこれらの人たち、最後は皆、孤独死。

誰にも見送ってもらえなかった人たち。

ある日、ジョン・メイに一本の電話が入ります。孤独死した男性発見。現場に行ってみると、なんと自分の向かいのアパートでした。

調べて行くと、亡くなったこの男性は、呑んでくれて、暴力ばかりふるい、刑務所に入ったり、一時はホームレス状態だったらしい。

そんな調査をしている最中、彼の上司からある通告が。

「君は仕事に時間をかけすぎる、ここは他の部署と統廃合することになったんだ。君はクビだよ」

突然の解雇通告。

当然、彼は少なからずショックを受けます。だけど、自分も良い歳をした大人です。グッとこらえて、取り乱したりしないところがいいですね。

イギリスの公務員制度はよく知りません。しかし、こんなに簡単に解雇通告できるのですね。日本でもやったらどうでしょう、まずは手始めに国会議員なんぞから……、とそれはさておき。

彼が22年間続けてきた仕事。今やっているのが最後の案件になる。自分の公務員人生に綺麗な幕引き、けじめをつけたい、と思ったのでしょうか。

彼は、この、世の中から厄介者扱いされていた人物の身寄りを、熱心に探し始めるのです。



本作の監督、自分らしい「映画の作法」「映画の文法」というものをもってます。この脚本で、このキャスティングなら、こういう絵を撮りたい。それがよく伝わってきます。

もちろん、全然ドラマチックには描かない。むしろ、主人公をちょっと突き放したような描き方をあえてしています。この監督、人間嫌いなのかな？ あるいはニヒリズムの人なのかな？ などと思ってしまう。

作中での上司の言葉

「人間、死んだら、何もなくなるのサ」

だから、死んだ人物に、時間と公的費用をかけるのは合理的ではないということなのでしょう。そんな憎たらしい上司の車に、終盤、主人公ジョン・メイがこっそり小便を引っ掛けるシーンがあります。これ、遠景のロングショット。

観客がうっかりしていると見過ごしてしまいそうなシーンです。そういう絵の撮り方をする監督ですが、ラストシーン、堰を切ったように情感溢れる、ファンタジーな演出をしました。

「ああ、やっぱり、この監督、人間が好きなんだ」と思いました。

でなければ、そもそも、こういう作品を作ろうとも思わないでしょう。

どうか、ラストシーン、観客皆様でお見送りをしてあげてください。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ウベルト・バズリーニ

主演 エディ・マーサン、ジョアンヌ・フロガット

製作 2013年 イギリス、イタリア合作

上映時間 91分

予告編映像はこちら

[「おみおくりの作法」予告編](#)

イミテーションゲーム

イミテーションゲーム

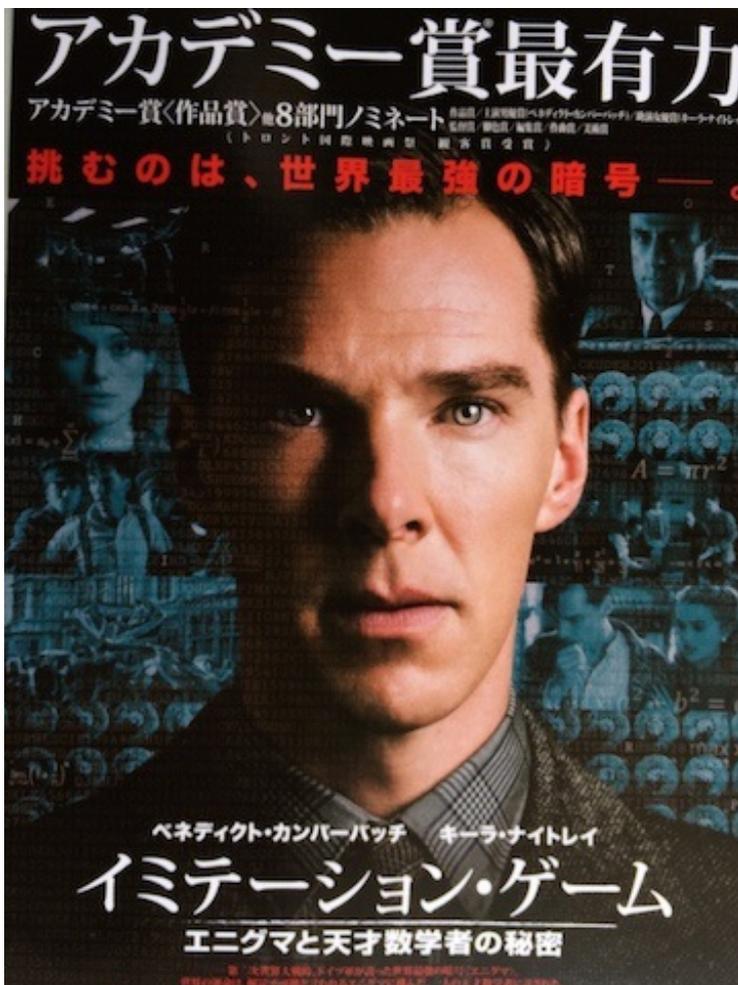
2014年3月16日鑑賞

国家という「なぞなぞ」

「エニグマ」と名付けられたドイツの暗号機。それは古代ギリシャの言葉で「なぞなぞ・パズル」を意味するそうだ。

物語の舞台は第二次大戦初期のイギリス。ドイツ軍が優勢だった頃のお話である。ドイツ軍の優位をひっくり返すには、通信に使われている暗号を解読する必要がある。イギリスの諜報機関は極秘チームを結成する。そこに呼ばれたのが数学者アラン・チューリングを含む6人の天才たち。このチームは、10人の科学者が24時間働いても解読に2000万年かかるといわれた「エニグマ暗号機」の解読に挑んだ。

本作はすべて事実に基づいて描かれる。



アラン・チューリングは人の頭で考え、作業するには時間がかかりすぎる、と考えたようだ。エニグマが暗号化する「機械」であるならば、こちらも「機械」で対抗しよう、と彼は考えた。彼は1930年代で手に入る部品を組み合わせ、小さな部屋ひとつ分もある「からくり時計」にも似た装置を組み上げてゆく。彼の狙っていたもの。それは電気を使って機械に計算させる「電気計算機」だった。

そう、アラン・チューリングは、今から70年以上前に、コンピュータを作って「エニグマ」に対抗しようとしたのである。

チームの華ともいえるクロスワードパズルの天才、ジョーンの助力もあり、彼とそのチームはついにエニグマの解読に成功する。しかし、チームの新たな苦悩はここから始まるのである。

ドイツ軍が次のターゲットとして狙っているのは、どのイギリス船舶なのか？ それはすべて解読できた。

しかしだ。大西洋上、ドイツ軍Uボートに狙われているすべての船舶が今、一斉に回避行動をしたらどうなるか？ ドイツ軍は「エニグマが解読された！」と察するだろう。イギリス諜報部としては「エニグマはまだ解読されていない」と、ドイツ軍に思い込ませなくてはならない。

どの作戦、どの船や航空機が重要なのか？ どの部隊に解読した情報を伝えるべきなのか？ ドイツ軍に攻撃されてもやむ得ない部隊は？ 彼らはまさに命の選別をしなければならなくなるのだ。

結果として彼らの狙いは成功した。ドイツ軍は戦争終結までエニグマが解読されたとは思っていなかったのだ。



数学者アラン・チューリングを演じるベネディクト・カンバーバッチがいいなあ。天才にありがちな、わがままさ、協調性のなさ、奇異な行動、集中すると他のものが目に入らなくなる。そういった特徴をよく演じている。触るとぽきっと折れそうな繊細な神経の持ち主でありながら、自分の研究への熱意と信念は鋼鉄のような力強さがある。そのような極めて人間的にバランスの取れていない、危うい人物像を描き出しているのは本作の大きな魅力だのちに彼の恋人になる女性ジョーンにキーラ・ナイトレイ。

「パイレーツ・オブ・カリビアン」シリーズでの印象がすっかり定着し、おてんば、奔放なイメージがあるが「[プライドと偏見](#)」といった文芸作品では抑制の効いた落ち着いた演技も見せている。本作でも、以前のイメージをガラリと変えて、頭脳明晰な女性を演じている。

このエニグマ暗号機解読についての事実は戦後50年間も英国内で極秘扱いとされていたそうである。

暗号機「エニグマ」に関する映画が、なぜか2000年ごろから増えているのは、そういった事情もあるのだろう。

数学者は真理を追究する人だ。

彼らは「数」に隠された「神の声」を聴こうとしている。

真理を追究すること、学問の世界に埋没できる時間は、自分の中に、ある種の「理想郷」をつくりだす。そこには精神の限りない自由が許されている。恍惚に似た、幸福な時空間だ。

しかし、戦争という状況下では、個人の心の中の「理想郷」さえも取り上げられてしまうのだ。アラン・チューリングの不幸は、彼が天才的な数学の才能を持ち合わせてしまったことにあるのだろう。彼は国家の命運を握る人物として、否応なくそのシステムの部品として組み込まれてしまった。

アラン・チューリングが隠し持っていた「同性愛者」という暗号は国家によって解読され、彼は悲劇的な運命をたどる。

21世紀の僕たちは、アラン・チューリングのアイデアを、手のひらサイズに凝縮し、日常で当たり前前に使っている。今や中学生でさえ持っている「スマホ」。あれはまさに「電気計算機」今の言葉で言えば「コンピュータ」だ。それを使う人間の行動は、電気信号に置き換えられ、巨大なデータの塊「ビッグデータ」として解析される時代になった。

「最大多数の最大幸福」という言葉を聞いたことがある。

国家はそれを目指すための手段であるはずだ。

しかし、戦争が終わり、平和な時期になったとしても、国家にとって、人間の命は「数」や「データ」として扱われてしまうのかもしれない。

本作を見たあとで、まるで国家そのものが巨大な「暗号システム」のように見えてくるのは、僕だけではないはずだ。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 モルテン・ティルドゥム

主演 ベネディクト・カンバーバッチ、キーラ・ナイトレイ

製作 2014年 イギリス、アメリカ合作

上映時間 115分

予告編映像はこちら

[「イミテーションゲーム」予告編](#)

パリよ、永遠に

パリよ永遠に

2015年4月4日鑑賞

パリを生き残らせた男

予告編を見るだけでも分かりますが、本作は、元々、事実に基づく戯曲であったそうです。舞台劇から映画化した作品です。

キャリアを積んだ熟年の俳優二人が繰り広げる室内劇。これはじっくりと味わいたいですね。物語の舞台は、1944年8月。ドイツ軍占領下のパリでのお話。連合軍はノルマンディー上陸作戦に成功しました。パリへも、すぐにでも攻め込んでくる勢いです。そういう状況下で、パリの統治をヒトラー総統から任された、コルティッツ将軍。彼は、ある書類を受け取っています。それは命令書です。

「パリを徹底的に破壊せよ」

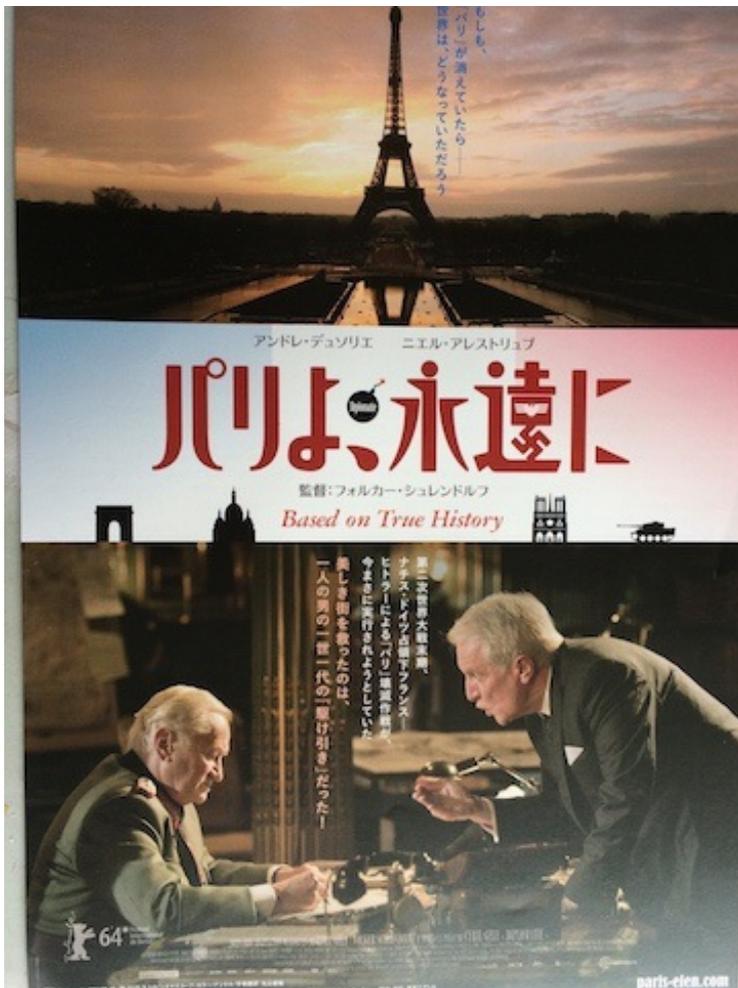
命令書の署名には「総統アドルフ・ヒトラー」の文字が。

街全体が、美術品とも言えるパリの街並み。何世紀にも渡る歴史的な建造物の数々、例えばノートルダム寺院、あるいは凱旋門、さらにはパリのシンボルでもある、エッフェル塔。

これらに爆薬を仕込んで

「こっぴ微塵に吹っ飛ばしてしまえ！！」

それがヒトラー総統の命令なのです。戦争が始まった当初は常勝軍団でもあったドイツ軍、並びに偉大なる総統閣下だったわけですが、1944年頃には、すでにそのカリスマ性も怪しくなりつつありました。ヒトラー暗殺計画が何度も企てられている。早くヒトラーを退け、戦争を終わらせようとしていた、多少なりともリベラルなドイツ軍人もいたわけです。



戦争も終盤になってくると、ヒトラー大統領の命令は、もはや支離滅裂。のちにベルリンの焦土作戦の下地がこの頃からあったわけですね。

ヒトラーにとって、パリという「芸術の都」を占領した時は、さぞや痛快だったことでしょう。美術学校に入ることさえできなかった、貧乏絵描きとして過ごした自分の境遇。そして退廃的とされた現代芸術や、ユダヤ人の描いた絵画など、その存在自体が許せなかったヒトラー。その美の象徴、芸術の都を、ついに支配できた。自分の掌の中で芸術の都を「おもちゃ」として今や「なぶりもの」にできる立場なのです。

「パリ」という美の象徴を「グチャツ」と握りつぶしてしまえば、もう世界は、ヒトラーが美しいと思ったものしか存在できない！ 彼はそんな妄想を抱いたのではないのでしょうか？ この思考パターンは、あの三島由紀夫の小説「金閣寺」にも通じるものがあると思います。

主人公の若き修行僧は、自分の前に立ちはだかる「美の象徴」「権威の象徴」としての金閣寺を焼いてしまいます。

主人公はラストシーンで、燃え盛る金閣寺を眺めます。

そして「自分は生きて行こう」と決意します。

しかし、主人公の思いと裏腹に作家、三島由紀夫氏は、自ら「生きることの破綻」を「自決」という形で実行してしまいました。三島氏とヒトラーの想い、その破滅願望については、どこか通底している部分があるのでは？と僕には思えるのですが.....。

まあ、ずいぶん脱線しました。

さて、本作は、パリ中心部にある、高級ホテルの室内が舞台です。

パリ壊滅を実行しようとするコルティッツ将軍。それをなんとかやめさせようと、説得工作に当

たる、スウェーデン総領事のノルドリンク。

コルティッツ將軍には、このパリ破壊命令に逆らえない訳がありました。ヒトラー大統領の命令書には、但し書きがあったのです。

「この命令に従わないものは、身分にかかわらず、連座責任とする」

たとえ「將軍」コルティッツであろうとも、パリ破壊を中止すれば、その責任は妻や子供達にも及ぶのです。その証拠にコルティッツ將軍の前任者は、すでに処刑されているのです。スウェーデン総領事のノルドリンクは、將軍の心の揺れ動きを読み取ります。

「ご家族の安全は、私が保障しましょう、脱出ルートは確保してあるんです」

時間の猶予はありません。連合軍は明日にもパリに入城しかねない。

二人の室内劇はどのような展開を見せるのでしょうか……



エッフェル塔も、オペラ座も。ヒトラーはすべてを燃やし尽くしたかった。しかし、パリは守られた。そこには何があったのか。

第二次世界大戦末期、ナチス・ドイツ占領下のフランス、この日、エッフェル塔、オペラ座も、ノートルダム大聖堂も…パリの象徴でもあり、世界に誇る美しき街物はすべて、爆破される運命にあった。アドルフ・ヒトラーによる「パリ破壊戦」が今まさに実行されようとしていたのである。かつてパリを訪れたヒトラー一瞬にしてこの街の美しさの虜となった。戦時下のベルリンが廃墟と化したパリの美しさが許せない。ドイツの敗北は時間の問題だったが、ヒトラーは断

パリの破壊を命じられた男V.S.パリを守りたい男 運命の一夜のスリリングな「駆け引き」に一時も目が離せない。

ヒトラーにパリ破壊作戦を命じられたドイツ軍パリ防衛司令官コルティッツと、パリで生まれ育った中立国スウェーデン総領事ノルドリンク。物語は、ノルドリンクがコルティッツを思いとどませようと、ドイツ軍が駐留するホテル・オムニスの一室を訪れるところから始まる。正攻法では説得は成功しない。手の懐を探りながら押したり引いたり…ひとつの仕草さえも「駆け引き」だ。二人には誠心誠意の愛情を込めた「パリへのラブレター」が、ノルドリンクの外交術こそ、こ

本作は83分という上映時間。その中に「パリ」という街が、今の姿であり続ける事が出来た、その歴史的瞬間が描かれて行きます。

僕が注目したのは、スウェーデン総領事ノルドリンクという人物の誠実さ、そして、大戦中も中立の立場を貫いたスウェーデンという国の姿勢であり、勇気でした。

まともに戦って勝ち目がない相手なら、あくまで外交で勝負する。

土俵際に追い込まれても、二枚腰、三枚腰で乗り切ってゆく。

そのハードネゴシエーターとして、総領事ノルドリンクは活躍します。

さらには、あっさりドイツ軍に降伏した、フランスという国と、パリの人々。国家としては、死んだふりをしておいて、実は時を稼いでいた。その忍耐力と、時流を見極める、フランス人、大局観をもった国家としてのしたたかさ。映画作品を通して、そのお国柄をうかがい知ることがで

きる。それもまた洋画の楽しみ方の一つだと思います。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 フォルカー・シュレンドルフ

主演 アンドレ・デュソリエ、ニエル・アレストリュブ

製作 2014年 フランス、ドイツ合作

上映時間 83分

予告編映像はこちら

[「パリよ、永遠に」予告編](#)

バードマン

バードマン あるいは（無知がもたらす予期せぬ奇跡）

2015年4月13日鑑賞

生きる悲哀、生きる可笑しみ

上映が始まって、最初の3分、もう映画に引き込まれた。

カメラは最初から長廻しを続けている。

5分経った。

「えっ、まだ廻してるよ!？」

10分経った。

「マジで!!」

「これ、どうやって撮ってるの?」

むしろ、この延々と続く長廻しの「妙」もあって、ストーリーそっちのけで、いったいいつまで、この長廻しの限界に挑戦し続けるのか？ そちらに注意がいてしまうのである。

20分経ってもまだ続く長廻しに、ようやくこちらも「驚き」から解放され、物語の中に入っていけるようになった。

「こうなりゃ、映画の最後までやっちゃってくれ!!」というのが僕の本音だった。



主人公は、かつて「バードマン」という映画で、スーパーヒーローを演じた舞台俳優マイケル

・キートンである。

彼にはこだわりがある。

舞台が好きなのだ。

舞台作品の持つ芸術性、ライブの緊張感、それらを観客に伝えたい。

はっきりいって、映画で着ぐるみを着て、スーパーヒーローを演じたのは、金のため、生活のため、自分の地位を確保するための、まあ、いわば「方便」にしか過ぎない、と自分自身では思っている。

しかし、演劇に情熱を注げば注ぐほど、彼の熱意は空回り。おまけにプロデューサーや、役者仲間たちと衝突を繰り返す。

なにより、彼にとって一番「ムカつく」のは、したり顔で、舞台芸術のレビューを新聞に書く「演劇評論家」たちだ。

あいつらに言わせると、自分はもう過去の栄光にすがっているだけの、落ちぶれた俳優のカテゴリーに入るらしい。

そんな厳しい批評ばかりが彼の耳に入ってくる。

彼はイライラする。

かつて結婚もし、一人娘もいるが、奥さんとは別れてしまった。年頃の娘は、そんな父親をハスに構えてみている。彼女はマリファナなんかを吸ったりして、ちょっとヤサグレている。

マイケルは、もうじき次の舞台公演がある。今はそのリハーサル中だ。

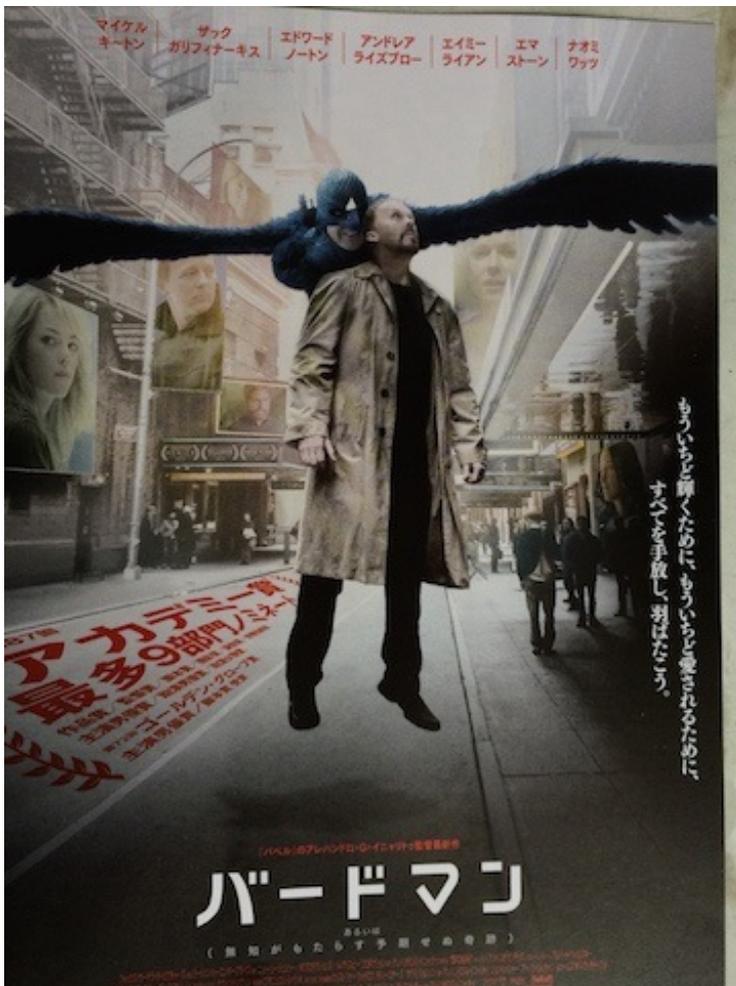
演目はレイモンド・カーバーの「愛について語るときに我々の語る事」

この作品はマイケル自身が脚色、演出し、登場人物を演じている。

この作品の解釈をめぐって、新しくメンバーに入った役者と彼は対立する。

この作品はどう演じるべきなのか？ 彼は悩みだす。本当にこれで正解と言えるのか？ 自分にもわからなくなってくる。

そんなとき、彼には、ある声が聞こえてくるのだ。それはかつて自分が演じた、もう一人の自分。そう、「バードマン」の声だ。



「ダメなら、またバードマン・スーツを着て、羽ばたいて見せればいいのさ」

「映画の客はアホなアクションが大好きだぞ」

「ミサイルを撃ち落とせ！ ヘリコプターをぶちのめせ！」

「お前はバードマンだ！ さあ、飛んで見せろ！」

彼はこの、もう一人の自分の声に頭を抱え、悶え苦しむのである……。

本作は冒頭触れたように、長廻しのショットが印象的だ。まさに、上質の演劇を鑑賞しているかのようなのである。

俳優たちの動きに連動して、カメラは動くが、決して「手ブレ」をしない。ここら辺りが、監督のうまいところなのだ。

今時の風潮だが、アホな監督は、すぐブレブレの「手持ちカメラ」とか、中途半端なワンシーン・ワンカットの長廻しを使う。なぜ、それを使う必然性があるのか？ と観客の一人である僕はいつも疑問に思う。

僕は専門家ではないが、おそらく本作での撮影機材は、ただの「ハンディ・カメラ」ではなく「ステディカム」を使っているはずだ。

「ステディカム」はカメラマンの体に固定され、手持ちカメラのように自由自在に動ける。しかし、その安定した機構によって、手ブレが起きないように制御されている。

また、本作でバックに流れている音楽。特にジャズ・ドラムの演奏がいい。スクリーンに映る映像に、絶妙の緊張感とライブ感を与えていて「次は何が起きるんだ？」と観客を映画に引き込ませてしまう。

本作の主人公は、紛れもなく舞台を愛している人だ。

自分が輝ける場所はいったいどこなのか？ 自分は何者なのか？

難しい言葉で言えば「アイデンティティ」というやつである。

彼はそれを必死で掴もうとしている。まさに雲をつかむように、彼は必死に自分を探している。その必死さが、第三者である僕たち観客から見れば、「ユーモラス」に、そしてある種「滑稽」にさえ見えてしまうのである。

ところで僕は落語という芸術が好きだ。

かつて桂枝雀師匠は「笑い」とは「緊張と緩和」が生み出すものだ、と言った。また、立川談志師匠は「落語とは人間の”業”の肯定である」と言った。まさに名言だ。

本作「バードマン」には、この二つの名言がピッタリ当てはまるのである。

本作の主人公マイケルは、演劇、舞台という「ナマモノ」そういう緊張感の中で日々を暮らす。そして「緊張」が極限に達すると、それを「緩和」するために、時折、暴走したり、感情を爆発させたりする。

その生き様がなぜか、第三者である僕たち観客には、生きている事自体の「可笑しみ」と「悲哀」を感じさせる。

彼は、どんなにもがこうとも、演劇の呪縛から逃れられない。また、それは自分が望んだことでもある。まさに”業”としか言いようのないものを背負ってしまった人物だ。

どんなジャンルでもそうだが「芸術」に真摯に取り組もうとする人たちは、なにか”業”と言えるものを背負わざるを得ないのである。

その覚悟がなければ、「芸術」をやる資格はないと僕は思う。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ

主演 マイケル・キートン、ザック・ガリフィアナキス

製作 2014年 アメリカ

上映時間 120分

予告編映像はこちら

[「バードマン」予告編](#)

セッション

セッション

2015年4月25日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

107分前のあなた、107分後の人生

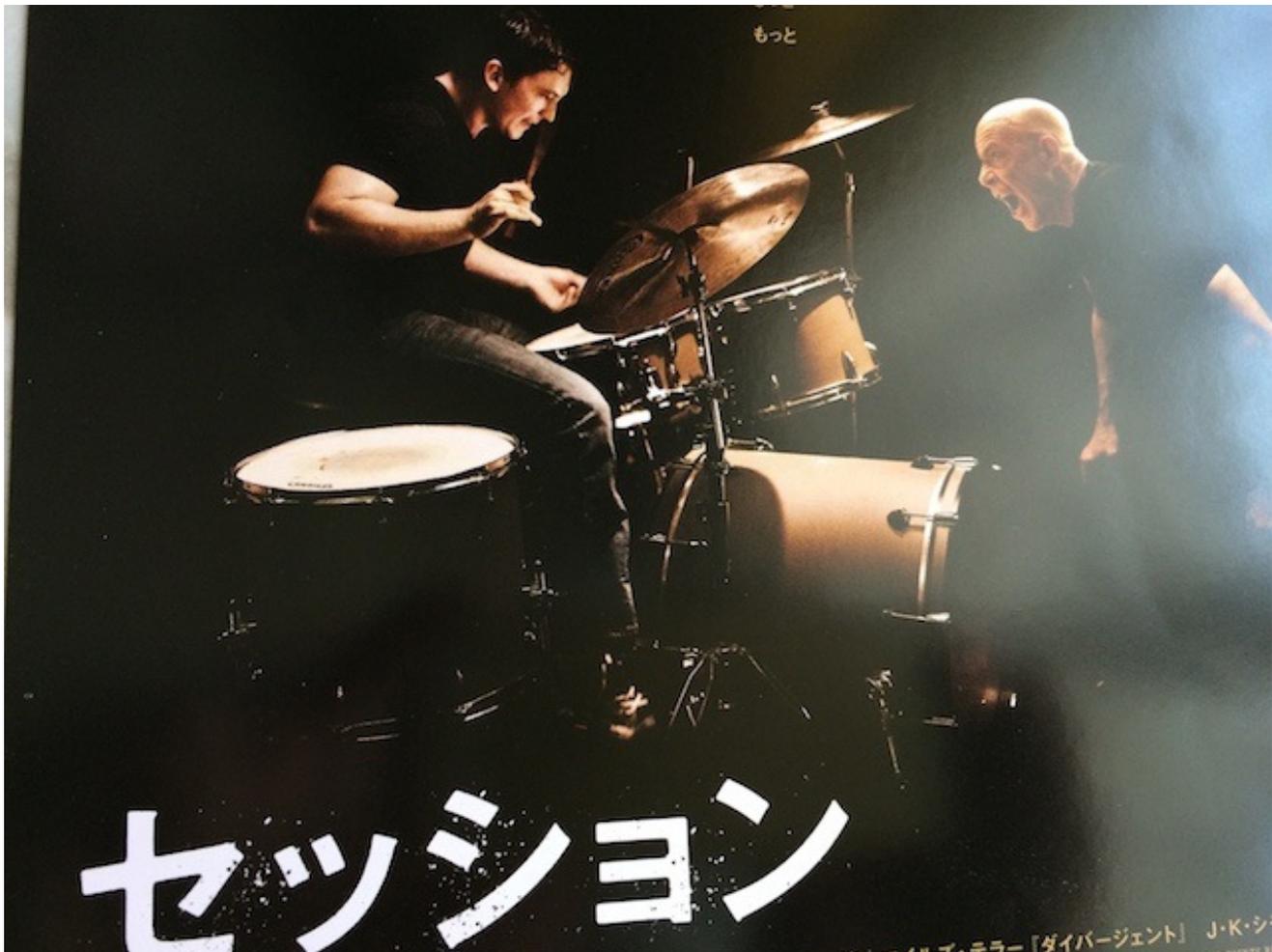
あなたは本作を観る。観る前のあなた、観た後のあなた。もう、あなたは別人になっているかもしれない。

だって、107分前の自分は「セッション」という映画の持つインパクトを知らずに生きてきたからだ。

107分の上映時間ののち、あなたは戦慄と、感動と、狂気と、熱情のシャワーを全身に浴びて、映画館を後にすることになる。

この映画は、大げさに言えば「人の人生狂わせる」ほどのインパクトを持っている。

本作は19歳の、若い、才能あふれるジャズドラマー「アンドリュー」が、アメリカ最高のジャズ音楽学校の教師、「フレッチャー教授」に徹底的にしごかれ抜く、師弟関係のお話である。



アンドリューは、ジャズの最高峰を目指す者たちが集まる音楽院に進学できた。どんなすごい連中が集まっているんだろう、どんな授業を受けられるんだろう、若い彼は胸いっぱい思いを抱いて、入学してくる。

ある実技授業を受けていると、そこに突然、頭はツルツル、引き締まった肉体、黒シャツに黒ズ

ボン。まるで独裁者のような威厳に満ちた人物が現れる。彼こそが、この音楽院での名物教授、フレッチャー教授だ。

彼は次々に演奏者に音を出させてみる。それもワンフレーズだけだ。わずか数秒。

「よし、もういい!」「次!」「もういい!」「次!」

こんな調子で、あっという間にアンドリューの番になる。彼は無心でドラムを叩く。

「よろしい。オマエ、明日、朝6時に練習室に來い。以上だ」

あっという間に來て、あっという間にオーディションは終わり、フレッチャー教授は、部屋から出て行く。

彼はこの音楽院、最高のメンバーを集めて、ジャズコンテストに出場するのだ。アンドリューは、このフレッチャー教授に選ばれ、コンテストに向け、ジャズとドラム演奏にのめり込んでゆく。

ジャズの本場はもちろんアメリカ、それもニューヨークであることは、なんとなく知っていたけれど、まさか、こんなに本格的なジャズ専門の音楽学校があつて、しかもそこで「ジャズ・エリート」を育てている、というのは知らなかった。

例えばスポーツ。テニスの世界では、今、話題の錦織圭選手を育てたのはアメリカのスポーツエリート養成機関であつたことは有名だ。特別な才能を持った若者を、世界で通用するように、さらに鍛える。

もちろんアメリカのことだから、そのエリート養成機関が、トップのプレイヤーを数多く輩出すればするほど、知名度も上がり、入学者、スポンサーが増え、それによって「マネー」が転がり込んでくる。そういう図式なのだろう。

それにしても、フレッチャー教授の教え方は凄まじい。

その昔、日本では「巨人の星」という熱血根性野球漫画があつた。主人公の星飛雄馬をスパルタ、熱血で野球エリートに育て上げる父親。その名も「星一徹」

本作のフレッチャー教授は、まさに「星一徹」のジャズバージョンだ。

教授がもし「巨人の星」というアニメを見ていたら、「ジャズドラマー養成ギブス」を作りかねない。そんな男だ。

本作で描かれるのは、どうやって、プロフェッショナルのジャズマンを養成してゆくのかである。フレッチャー教授はまさに「体育会系」の「シゴキ」を行う。



ここでひとつ、注目して欲しいのは、彼がほとんど、一つの音、一つのフレーズ、一つのリズム、で良し悪しを即座に判断していることである。

実際クラシック音楽では、そういう鍛錬をする。

大ヒットした「のだめカンタービレ」という映画がある。

若き才能あふれる指揮者「千秋真一」がヨーロッパの指揮者コンクールで、受ける審査。そのなかに、オーケストラの音の間違い探しがある。

オーケストラには、あらかじめ、いろんな楽器に、一つだけ間違った音をあえて仕込んだ楽譜が渡されている。コンテストを受ける指揮者は、その間違いの箇所を指摘する。いろんな楽器の音の洪水のなか、そんなことできるのか？ と思う方もいるかもしれないが、実際若き頃の小澤征爾氏は、国際コンクールで間違い探しをやって、正解し、ちゃんと優勝している。

そういった難関を突破した、とんでもない才能を持った若者たちが、さらに芸術の高みを目指す。本作においても、アンドリューは、ジャズの「頂点」「最高峰」を目指そうとする。そのためには、付き合い始めたばかりの彼女も遠ざけ、周囲との協調性もなくし、あえて孤立を深めてゆく。そうすることで音楽漬け、ジャズ漬け、ドラム漬け、の日々を送る。

ジャズ、音楽、そして芸術は、過酷で残酷だ。

その高みを目指そうとする者に、ここまでの試練を強いるのか？ と思わせる。生きることのすべてを捧げ、時にはそれが人間を廃人同然にしてしまう場合さえある。いわゆる「燃え尽きて」しまうのである。

そうまでして、人間はなぜ、芸術を求めるのだろうか？

アンドリューはなぜ、そこまでして、ジャズを極めたいのだろうか？

そして、ぼくはなぜ、この「セッション」という映画の”痛いほど”の「体験」を文章にしているの
だろう？

ラストシーンでの演奏。まさにこの瞬間にしか存在し得ない緊張感あふれるドラミング。

アンドリューは、重圧と、緊張と、諦めと、苦悩の先に、ようやく、音楽の持つ「楽しさ」を感じ
取ったのかもしれない。

映画が終わり、劇場を後にしても、僕の体にはアンドリューのドラムの響きがまだ残っている。

上映時間107分後の自分は、まさに107分前の自分とは変わっていた。

本作は、その力を持った作品である。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 デイミアン・チャゼル

主演 マイルズ・テラー、J・K・シモンズ

製作 2014年 アメリカ

上映時間 107分

予告編映像はこちら

[「セッション」予告編](#)

パレードへようこそ

パレードへようこそ

2015年5月25日 [シネリーブル神戸](#) にて鑑賞

ゲイと一緒に闘えますか？

実を言うと、イメルダ・スタウトンが出演している、というだけで、観に行った作品です。この何の変哲もないおばさん（失礼）が主演した「[ヴェラ・ドレイク](#)」（監督マイク・リー）予告編

という作品を見て、僕はノックアウトされたのです。人懐っこくて世話焼き、親切を絵に描いたような近所のおばちゃん。その人が、こっそりと望まれない命の処分をやっていたとは……。

ちなみにこの作品、2004年のヴェネチア国際映画祭、金獅子賞に輝いております。

そのイメルダ・スタウトンが出演する本作。意外にも彼女の出番は少なかったですね。ちょっとがっかり。

物語の舞台はサッチャー政権下、1984年のイギリス。この「鉄の女」と呼ばれた首相がどのような政策を行ったのかについて、やや予習の必要ありと感じました。

ロンドンのゲイやレズが集まる団体が、炭鉱町である、ウェールズ地方の労働組合と団結し、偏見や差別、そしてサッチャー政権と闘うというストーリーです。



そもそも、なぜ、ゲイやレズの団体が炭鉱町と共闘しようと思いついたのか？

その辺りが案外あっさり描かれておりまして、もう少し、強烈な動機の提示が欲しかった気がします。これは事実に基づいたお話なのだけれど、意外に説得力に乏しい気がしますね。やはり、労働運動はなるべく多くの人を巻き込む方が効果的。だけど、その支援を申し出てくれたのが、まさか「同性愛者の団体」であったとは？ これには労組側も頭を抱えるわけです。果たして、支援を受け入れていいものやら？ こうした支援される側、炭鉱町労組の人たちの戸惑い、混乱ぶりはよく描けていたように思います。

ところで、イギリスの映画を観るときに気をつけておいた方がいいのが、みなさんご承知のとおり「お郷」の問題。これはイングランドのお話なのか？ それともスコットランドなのか？ はたまたウェールズ地方なのか？ 僕たち日本人は「イギリス映画」と一括りにしますが、イギリスとは、それぞれのお郷が集まった「連合王国」なわけですね。本作の舞台でもあるウェールズ地方の人たちの発音をよく聞くと、おもいきり「訛っている」ことに気付かされます。そういう違いを見つけながら鑑賞するのも、洋画の楽しみ方の一つかと思えます。

第72回 ゴールデン・グローブ賞作品賞(ミュージカル・コメディ部門)ノミネート!



1本の映画が世界を変えられる、
と思わずにいられない。
ローリング・ストーン誌(アメリカ)

「リトル・ダンサー」「プラス!」を思わせ、
抑えきれない高揚感!
何度も笑って何度も泣いた。
ザ・ガーディアン紙(イギリス)

カンヌから始まった熱狂が、ヨーロッパからアメリカへ——世界各国で今最高に愛されている友情物語

2014年カンヌ国際映画祭で大絶賛され、映画サイトロッテン・トマトでも94%の高い満足度を獲得すると、ゴールデン・グローブ賞作品賞にも見事ノミネート。片田舎の炭坑労働者たちと、ハデなファッションのゲイたち一両極端な境遇の二つのグループが、誤解や衝突を乗り越え、手を取り合って未来を切り開く姿を描く。人と人のリアルな繋がりが希薄になり、誰もが孤独を抱えて生きている今の時代でも、他人を思いやる誠実なアイデアと、ほんの少しの勇気があれば、素晴らしい人生を見つけられるという希望を私たちに与えてくれる——世界中を虜にする優しさに満ちた感動作がついに日本公開。



さて、同性愛者への偏見を持たないで付き合えるか？ 色メガネで見ない、と断言できるか？と自分に問えば、僕もやっぱり100%偏見がないわけじゃない。ちょっと、身構えちゃうわけですね。ましてや、親の立場から見れば、手塩にかけて育てた自分の息子が、“実はゲイだった”となれば、ご近所や世間に対して一家の面目丸つぶれになりかねない。本作で同性愛者団体の一番若いメンバー、ジョー（ジョージ・マッケイ）がまさにその典型。優等生ですくすく育ち、思春期にも、親に反抗らしいことをしたことはありません。その彼が、まさか“ゲイ”の団体で活動していたなんて。ジョーにしてみれば、まさにこの“ゲイ”への偏見と闘うことこそ、大人への階段をひとつ上る行動だったのでしょう。しかし、その未来には「普通の」「ストレート」の人が上るより、は

るかに厳しい階段が用意されていることでしょう。本作は主にこの若いジョーの成長に寄り添うような視点が多用されており、イメルダ・スタウトンという、あまりのビッグネームに当初は目を誤魔化されてしまいそうですが、若いジョーの成長と自立という面から、本作を鑑賞すると、また違った評価ができそうです。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 マシュー・ウォーカス

主演 ビル・ナイ、イメルダ・スタウトン

製作 2014年 イギリス

上映時間 121分

予告編映像はこちら

[「パレードへようこそ」予告編](#)

シンデレラ

シンデレラ

2015年6月2日 [イオンシネマ明石](#) にて鑑賞

さあ、かぼちゃの馬車で参りましょう。

～ワンスポンナタイム、ロングロングアゴ～、

昔々、あるところに小さな王国がありました。王さまは、ご高齢で、病を抱えております。王様には一人の若い王子がおられます。王子はある日、鹿狩りに出かけました。その時、森で偶然出会った娘に一目惚れをしてしまいます。しかし、娘は名前も名乗らず、王子のもとを立ち去ってしまいます。この娘「エラ」は貿易商の父と母の元、幸せに暮らしておりました。しかし、母親の死後、父親は、とある未亡人と再婚。この夫人にはすでに娘が二人おりました。父はこの再婚相手の夫人と、二人の新たな娘を家に迎え入れます。エラに不幸が続きます。父が旅先で病死。一家の主となった継母とその二人の娘は、エラにつらくあたります。家事の全てを彼女に押し付け、部屋も寒い寒い、屋根裏部屋をあてがいます。エラはたまらず暖炉の残り火のそばで眠るほどです。寝起き顔のほっぺに煤をつけたエラを見て、継母や義理の姉妹たちは「灰かぶりのエラ」（シンデレラ）と”あだな”をつけてこき使うのでした。

さて、王子は、あの森で出会った娘が忘れられません。国王は自分の命がもう永くないことを悟っています。早く王子に、どこかの国の王女と結婚させたい。そこで王子の結婚相手を探すため、各国の王女を招いて、大舞踏会を催すことになりました。その折に、王子は一計を案じます。国中の未婚女性を、この大舞踏会に招待する、と宣言したのです。王子はこの舞踏会で、あの森で出会った娘を見つけようとするのです……。



本作は言うまでもなく「シンデレラストーリー」という言葉の源になった、誰もが知っているお話。それをいまさら、どのツラ下げて映画化しようというのでしょうか？ もし自分が映画監督なら逃げ出すでしょう。

よほど、映画づくりへの自信と勇氣、心臓に剛毛を生やしたような人物でないと、監督および役者さんは務まらないでしょう。ちなみに監督は、シェークスピア劇など、歴史物への造詣が深いケネス・ブラナー氏。キャストिंगも的確ですね。

シンデレラ役のお嬢さん。リリー・ジェームズ、よかったなあ～。探せばこういう女優さん、いるんですね。けっしてグラマーではなく、目、鼻、口のつくりも馬鹿でかくない。いわゆるアメリカ式の美人ではない感じ。調べると、彼女イギリス国籍なのですね。本作の主役として気品もあり、申し分ないと思います。しかし。欲を言えばですよ。ああ、もし神様が魔法を使うことをお許しになるのなら、この「シンデレラ」こそ、あの伝説の大女優、オードリー・ヘップバーン王女様が演じるべきでありましょう。

無い物ねだりはさておき、本作で特筆すべきはケイト・ブランシェットさんでしょう。

エリザベス女王の役さえ演じたことのある、アカデミー賞を受賞した大女優さんですね。

業突く張りでわがまま勝手、意地悪な継母役を、それはそれは、実に楽しそうに、大仰なマイムで怪演しておりまして「ああ、やっぱり、役者さんって、悪役演じるのは楽しいのね」と納得してしまうのであります。

シンデレラといえば、数々の必須アイテムがありますね。本作でも、あの「かぼちゃの馬車」が出てきます。魔法使いのおばあさん（ヘレナ・ボナム＝カーター）が、かぼちゃを馬車に仕立ててくれるんですが、それはもちろんCG。だけど、そのあと馬車が舞踏会をめざして王宮に向かう

ところや、到着してシンデレラが馬車から降りるシーン。これをみると、この豪華絢爛たる馬車は実物かしらん？と思わず見入ってしまいました。それぐらいリアルです。まあ、ディズニー映画なんで、制作費はふんだんに使うでしょうから「リアルかぼちゃ馬車」をつくっちゃっても不思議ではないです。

西洋にしる、日本にしる、映画で昔話、時代劇を観ることの楽しさ、醍醐味はなんといっても、衣装やお城などに代表される舞台装置、美術ですね。

王子様がお暮らしになっている王宮。舞踏会が催される大広間。クリスタルガラスがキラッキラに煌めく巨大シャンデリア。音楽好きな方ならご存知でしょう。ウィーンフィル・ニューイヤーコンサートが開かれる楽友協会大ホール。あのシャンデリアにそっくり。

シンデレラは子供の頃から動物たちとお話ができます。家で飼っている小さなネズミや、トカゲ、アヒルたちとも仲良し。魔法使いのおばあさんは、彼らをかぼちゃの馬車の従者に変身させて、一緒に宮殿に向かわせます。

ここで、あの有名なお約束。

「魔法の効き目は12時までだよ。それまでに戻ってくるんだよ」

素敵な時間が過ぎるのは夢のように早いものです。

深夜12時の鐘が鳴る。魔法の効き目はもう、終わろうとしています。早く帰らなければ。宮殿の大階段を慌てて駆け下りるシンデレラ。その時おもわず残していったのが、あの「ガラスの靴」。

世界中の人たちが知っている、この一連のストーリー展開。お話の先はもう見えている、結末さえ分かっているけど、なぜか物語の世界に引き込まれる。それこそ、本作が優れた脚本と演出手法であることの証明でもあります。



映画の中で、「我が国は小さな国です。国の安寧のためにも、王子に大国の王女をお妃に」と、側近が王様に上申するシーンがあります。

う〜む、国の安全保障の問題ですな。日本の戦国時代、や江戸時代はもとより、ヨーロッパの各国は、まさに国の安全保障のため、政略結婚を繰り返してきた、そういう歴史の積み重ねなのですね。陸続きで、列強に挟まれた小国の運命のはかなさ。王族の政略結婚に、国の未来を託さざるを得ない事情。海に囲まれた島国の日本とは、そのあたりの皮膚感覚が違うのでしょうか。こういうところをさりげなく描くところなど、本作が大人の鑑賞に十分耐えうる要素を持っているところだと思います。

以前、池波正太郎さんの映画のエッセイで「ハリウッドの大作は、それだけで一見の価値はある」という一文を目にしたことがあります。

このところ、シリアスで、世の中が嫌になるような、ちまちました映画作品ばかり観ていたような気がします。

しかし、本作を見て、救われる思いがしました。

映画は、ほんのひと時でも、現実を忘れさせてくれます。映画は夢の世界を歩いてもいいのです。映画は無限の想像力を働かせていいのです。

美しいものをより美しく映画として撮る。そんな当たり前のことを、僕はしばらく忘れていたようです。本作を見ながら、その美しさに、なぜか思わず涙ぐんでしまった、純情可憐な、お腹突き出た55歳のオヤジなのでした。

では参りましょうか「かぼちゃの馬車」で夢の世界へ。

(なお、本作上映の前に短編「アナと雪の女王／エルサのサプライズ」がご覧になれます。僕は吹き替え版で見たので、神田沙也加のアナ王女、松たか子のエルサ女王に再びスクリーンで出会えました。これはちょっと得した気分ですね。お客さんを映画館に引っ張ってくる手段として、過去に大ヒットした作品のキャラクターを使って新作短編をつくり、それこそ女性向けファッション雑誌の「オマケ」「付録」のように、封切り映画とワンセットで公開する。これは、映画界活性化のためにも、大いに有りだとおもいました)

天見谷行人の独断と偏見による評価 (各項目☆5点満点です)

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ケネス・ブラナー

主演 リリー・ジェームズ、ケイト・ブランシェット

製作 2015年 アメリカ

上映時間 105分

予告編映像はこちら

[「シンデレラ」予告編](#)

グローリー／明日への行進

グローリー／明日への行進

2015年6月28日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

「暴力装置」に服従はしない

「I Have a Dream!」の演説で有名なキング牧師のお話であります。

物語は、キング牧師がノーベル平和賞を受賞した直後から始まります。一人の牧師の活動として、また、一人の人間の人生において、最も輝ける山の頂上に達した、とばかり僕は思っていたんですが、この映画を見ると、そうではなかったんですね。

時系列で並べるとこうなります。

- 1963年5月 アラバマ州バーミンガム運動
- 1963年8月 リンカーン記念堂前での演説
- 1964年7月 ジョンソン大統領公民権法にサイン
- 1964年10月 キング牧師ノーベル平和賞受賞決定 12月授賞式
- 1965年3月7日 アラバマ州セルマにてデモ行進。

本作では公民権法成立をかなり後半に持ってきておりまして、このレビューを書くために後から調べると、この辺りの経緯がちょっと分かりづらい感じがしました。

公民権制定後もアメリカ国内、特に南部では「厳しい」なんて生易しい言葉では済まされない、とんでもない状況であったことがわかります。

キング牧師自身も一人の夫であり、奥さんも、子供達もいる。



一家団らんの夜、牧師の家に電話がかかる。

「お前の子供が吊されるのが楽しみだぜ！」

脅迫電話です。

ノーベル平和賞受賞者の家族が、なぜ、これほどの脅しと侮辱と威圧を受けねばならないのか？

人として、賞賛と敬意を表するならわかるんですが、実際はこんな目に遭っていたんですね。さらにはFBIによる、組織的なキング牧師宅の盗聴と脅迫。

「ホンマかいな」と疑いたくなるでしょうが、これが、たった50年前に実際にアメリカで起こっていた事実であり、現実であったのです。

もっともひどい黒人差別が行われていた、南部アラバマ州。キング牧師たちはアラバマ州セルマから、州都モンゴメリーまでのデモ行進を計画します。

彼の元には、やがて白人からも多くの協力者が現れます。

「私達もデモに参加させてください」

デモの当日。キング牧師たちはデモ隊の先頭に立って、互いに腕を組み、静かに歩き始めます。目の前に立ちはだかるのは、銃と、こん棒で武装した州警察。その後ろには軍隊まで。それに向かって彼らは、静かに、しかし、着実に一步を進めてゆくのです。

キング牧師については「非暴力」を貫いたことでよく知られています。

彼はガンジーの「非暴力・不服従」運動に大いに共感していたんですね。

当時のアメリカに住む黒人たちには「選挙に参加する」という「権利そのもの」がありませんでした。

投票箱がありますね。投票用紙に立候補者の名前を書く。そして投票箱に入れる。これで一市民

が自分の意思を表明できる。国の政治に参加できたわけですね。

この「投票用紙」という紙切れを「投票箱」に入れる「権利」。

僕自身、二十代、三十代の頃は投票を、よくサボってました。今更ながら反省するものですが、ようやく五十代になってから、選挙に欠かさず行くようになりました。

いま、選挙に行っていない皆様。ぜひ本作をご覧になってくださいませ。

1960年代、この「投票用紙」を「投票箱に入れる権利」

その権利を勝ち取るために、どれだけ多くの黒人たちの命が奪われたのか。

僕たちはもういちど、襟を正して「投票」という行為、国の政治に参加する、その重さを噛み締めてみるべきだと思います。



本作では、黒人たちのデモ行進に参加した、白人が襲われるシーンがあります。善意でボストンから、わざわざ駆けつけたこの白人男性。しかし.....

「黒人に協力するヤツらは、白人であろうと容赦しない」

差別主義者たちの返答は「暴力」によって彼の命を奪うことでした。

いま、この日本の国でも、政治が多くの関心を集めております。連日、国会議事堂の前には、抗議のデモが行われております。

ところで「国家とはなんぞや？」という大命題があります。ちょっとしらべてみましたら、びっくりする答えがありました。

マックス・ウェーバー曰く「最大の暴力装置を持つものが国家である」

「暴力」という側面から考察してゆくと、比較的、国家というものが定義しやすいらしいのです。

国家は裁判で人をさばき、最終的には自国の国民を「殺す権利」さえあります。

「暴力は使わない、でも悪政に対して服従はしない」

これは最も崇高な人間らしい、信念ではないでしょうか？

ぼくはガンジーさんが大好きです。

「佳いことは、カタツムリのように進むのです」という彼の言葉が大好きです。

猛スピードで、法律を作ろうとする人たちがいます。

なぜそんなに急がねばならないんだろう？

世界で最も大きな暴力装置、そのシムテムのなかに、このクニはいま、歯車の一つとして組み込まれようとしている。

その現実に対して、ぼくは静かに抵抗し、服従したくはないのです。

なお、本作は女性監督の手によって制作されました。アメリカが、自ら暴力の渦のなかへ突き進んだ結果、招いてしまった現在の混迷。そのなかで「非暴力、不服従」の精神の象徴でもある、キング牧師の映画を作ろうとしたこと。エバ・デュバーネイ監督をはじめとする、スタッフ、キャストの皆さん、その気高い精神に、敬意を表したいと思います。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 エバ・デュバーネイ

主演 デビッド・オイエロウォ、トム・ウィルキンソン

製作 2014年 イギリス、アメリカ合作

上映時間 128分

予告編映像はこちら

[「グローリー／明日への行進」予告編](#)

チャップリンからの贈りもの

チャップリンからの贈りもの

2015年7月18日鑑賞

チャップリンさん、今の日本をどう思いますか？

チャップリンの棺桶を盗んだ二人の男のお話であります。これ実話です。

物語の舞台はスイス。

刑務所から出てきたばかりのエディ。この男、ちょっと盗みぐせがあるんですね。出所した彼をひきとったのが親友のオスマン。

物語はこの二人を軸に進みます。

オスマンは、アルジェリアからスイスへ渡ってきた移民です。

奥さんは仕事で体を壊し入院中。愛娘サミラの面倒も見なければ、それに学校にもちゃんと行かせてやりたい。奥さんの入院費もかかる。

移民であるオスマンには健康保険もない。おまけに口クな仕事もない。肉体労働で安い賃金しかもらえない。

ああ、全く、どうしたらいいんだ、とため息ばかりです。

対照的に、刑務所から出所したエディは、根っから陽気で楽天的。人懐っこくて、どこか憎めないヤツなんです。仕事が無かろうが、明日はやってくるさ、と、その日暮らしを楽しんでいます。まるでチャップリン演じる、あのお気楽なトランプ（tramp）放浪紳士チャーリーの生き方そっくり。もちろん、この人物像、監督、俳優とも狙って作りこんでます。

ある日、エディがその「得意技」を生かして、どこからか中古のテレビをちょろまかしてきました。自分を引き取ってくれたお礼にと、オスマンにプレゼント。オスマンは怪しげなテレビを見てちょっと複雑な顔をします。

それを見たエディが放ったセリフ。

「ほら、ナショナル・パナソニック製だぜ！！」

愛娘のサミラは無邪気にはしゃいでいます。

ある日、そのテレビからニュースが流れます。

スイスに住む世界の喜劇王、あのチャップリンが亡くなったのです。

そのニュースを知ったエディ。

ポジティブ志向のエディに、いいアイデアが浮かびました。

「こりゃ、ぜったいうまくいくぞ！　なあ、オスマン手伝ってくれ」



エディは、親友オスマンの暮らしを、少しでもよくしてやりたい。

刑務所から出てきた自分を、嫌な顔もせずに取り取ってくれた、大親友オスマン。それに可愛い、娘っ子のサミラを、このままにしておけない。

サミラには未来があるんだ。この娘をいい学校にも入れてやらなくっちゃ。

それにはやっぱり先立つもの、まとまった「金」が要る。

無謀にも思える計画を聞いたオスマンは躊躇します。

エディはオスマンに諭すようにいいます。

「チャップリンは俺たちと同じ、移民だ。映画のチャーリーは、浮浪者で、おまけに俺たちと同じ、貧乏人、その日暮らしだ。彼なら分かってくれるさ！」

そして

「何も誘拐して殺そうというんじゃない。なにせチャップリンは、もう死んでるんだから」

亡骸が入った棺を、ちょっとの間だけ、俺たちが預らせてもらうだけさ！

とエディはどこまでも楽天的です。オスマンも生活苦には、これ以上耐えられない。これも病気の妻と、娘のためだ。しょうがないと、腹をくくり、この「闇の仕事」をやろうと決意するのですが……

本作は、紛れもなく犯罪者の物語なんですが、決してダークな作品ではないのです。

とはいえ、観光都市スイスの別の一面も描かれます。そこに住む移民の暮らしにくさ。異国の地で、一つの家族と、その親友の放浪者、トランプが生きてゆくこと。現実はやっぱり厳しいわけです。

つつい悲観的になる。でもそれを笑いで乗り切ろう、という作風なんですね。

ちなみに、亡骸を盗まれた当の御本人、チャップリンも、生前こんな風に語っています。

「私は悲劇を愛する。悲劇には何がしかの真実が含まれているから」

「喜劇の王様」とさえ呼ばれたチャップリン。その上質な喜劇が生み出された、母なる創造の源泉、エネルギー源。それは彼が子供の頃、生身の体で味わった、感じた、極限の貧しさ、現実生活の悲劇そのものにあっただけですね。

本作の登場人物は、生きてること、それ自体が、ある種の滑稽さをもって描かれております。まさにチャーリーの作風を継承しているわけです。全編にわたってチャップリンの人情悲劇を彷彿とさせる、コミカルタッチで描かれるんですね。

だから観終わった後の後味がいい。

本作を制作するにあたり、チャップリンと（それ自体が一つのジャンルですね）そのご遺族に対して、きちんと配慮がなされているようです。そしてチャップリン作品への敬愛の念が随所に見られます。

あっ、このシーンはチャップリンの「サーカス」だな、あのシーンは「ライムライト」へのオマージュだな、といった具合です。

犯罪を犯した二人の男。だけど、どこか憎めない、ダメダメで、それでいて愛おしい、この男たち、そして家族の生き様。

事件が収束し、改めて埋葬されたチャップリンの墓前で「ごめんね」をするシーン、なんとも救われる気が致しました。

上映された映画館では、これを機会にチャップリンに関する貴重な写真資料などが展示されておりました。



日本が大好きだったチャップリン。秘書も日本人の高野さんが永きに渡って、公私ともに佳きパートナーとして付き添っておられたのは有名な話ですね。

チャップリン最初の日本訪問は船旅でした。チャップリンは僕の住む街、神戸に記念すべき、来日第一歩を記したのでした。

日本のてんぷらの美味しさに舌鼓を打ち、歌舞伎の高い芸術性を見抜き、「茶の湯」における、日本の美と精神性の高さに、心の安らぎを覚えたチャップリン。本当にニッポンが大好きだったんですね。



本作上映をきっかけに、チャップリン作品の再上映が決定した映画館もあります。
チャップリンという人物は、人類史上に残る偉人であることは言うまでもありません。
コメディアン、パントマイム、舞台俳優、映画監督であり脚本家、作曲家、プロデューサー、何より最高の映画作家でありました。
そして忘れてならないのは、彼が「権力」や「支配」というものに対して、敢然と「映画という芸術」で立ち向かった、という一面です。
ヒトラー政権の絶頂期、この独裁者を徹底的に、おちょくり、笑い者にした作品を、命の危険も顧みず、巨額な自費を投入して作ったということ。



いま、きな臭い雰囲気漂う、この国。

チャップリンが愛した、この日本の国で、今一度、チャップリン作品を鑑賞するというのは大変意義あることだと思います。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 グザビエ・ボーボア

主演 ブノア・ポールブルド、ロシュディ・ゼム

製作 2014年 フランス

上映時間 115分

予告編映像はこちら

[「チャップリンからの贈りもの」予告編](#)

Mommy / マミー

2015年7月24日 [元町映画館](#) にて鑑賞

僕を愛して！ 広い世界で！

映画界で大注目のグザヴィエ・ドラン監督の「Mommy マミー」ようやく観てきました。若干26歳にして、すでに五本の作品を制作監督し、うち二本が、ヴェネツィア、カンヌの映画祭で受賞歴を持つなんて、どう考えたって、これはとんでもない才能だなあ～。

映画関連のサイトや、地元神戸の映画館でも「うちはグザヴィエ・ドラン”推し”ですよ」と公言して憚らない。みんなが「イイ！！」と言っている。

おまけにグザヴィエ・ドラン、そのルックス。

カッコイイです。日本に来たら、きっと空港なんかで、女の子がキャーキャー言うんだらうな、なあ～んて想像をしてしまいます。

僕はひねくれ者の中年おじさんなんで、

「誰がそんなイケメン、天才映画作家の作品なんか観るもんか！」と意地を張ってました。なんで、こう人間って不公平に作られているんだらう？

ああ、神様はなんで、お腹突き出た中年オヤジに、愛の手をさしのべてくれないのだらう？ なんで神様は、若干26歳のカナダの若者に、美貌だけでなく、映画作家としての、飛び抜けた才能まで与え賜うたのだらう？

でも、その代わりに、グザヴィエ監督の作品を観れば、彼が才能に恵まれたその代償として、実はいかに大きな心の葛藤を抱え込んでいるのか、その一端がわかるような気がするのです。



本作「Mommy マミー」は第5作目。

舞台は「カナダ」という架空の街に設定してあります。そこには、これも架空の法律が設定されております。

「発達障害の子供を持つ親が、経済的な理由などから、もう育てられない、と判断した時は『法的手続きを経ずに』養育を放棄し、施設に入院させる権利を持つ」というもの。

主人公は発達障害、ADHD（多動性障害）を抱える15歳の少年、スティーブ。普段からやたらとハイテンション。それがmaxになり、やがてレッドゾーンにまで入ってしまうと、興奮状態で自分を抑えられない。暴力を振るいます。そのため彼は施設に入れられていました。

母親ダイアンはシングルマザー。彼女はスティーブを施設から出してやり、自分の元で面倒を見ようとしています。新しいアパートメントも見つかった。ここで、なんとか息子と二人、新しい生活をスタートさせよう。

でも、息子の扱いはやはり難しい。目が離せない。仕事も探さなくちゃいけない。一人悩んでいたダイアンは、向かいの家に住む、女性教師カイラと知り合いになります。

カイラにはひどい吃音症がある。どうも仕事上のストレスからこうなってしまったようで、今は学校も休職して自宅療養をしています。

やがて、ダイアンとスティーブ、カイラは、家族ぐるみの付き合いを始めて行きます。生活苦と障害を持つ息子を抱えた一家、そしてカイラにも、心の安らぎ、すこしばかりの光が差し込むように思えたのですが……

上映中、コミカルなシーンもいくつかありました。映画館ではクスッと笑っている人たちもいました。

僕はといえば、お恥ずかしながら……ずっと涙が溢れていました。

「すごい作品だ……」

グザヴィエ・ドラン監督の評判は嘘ではなかった。

とてつもない才能を、僕は自分の目で目撃してしまったのです。

僕が注目したのは、この監督さん「音に敏感」であることです。

母親ダイアンは大雑把な性格。お役所の人から書類にサインを求められるシーンがあります。ダイアンはキーホルダーについての自分のペンでサインする。

ところが、このキーホルダー、とにかく両手で持ちきれないほどの鍵の束や、アクセサリなんかウジャウジャついている。

ダイアンは机の上で書類に自分の名前をサインする。一文字書くたびに机の上で「ジャラ、ガサガサ、ジャラッ」という音がする。

このシーン。音楽はつきません。当然です。

グザヴィエ監督は、この「ジャラジャラ」の音を入れるシーンを撮りたかったんですね。それだけで母親ダイアンが、どういうパーソナリティーなのか、端的に表現しています。

それに本作で最も話題となった、画面のサイズ。

縦横の比率が1対1なんですね。

「ああ～、こういう撮り方があったんだ」とびっくり。

映画館のスクリーンは横に細長いですね。その中央に四角く映し出される映像。さらにはグザヴィエ監督、人物を撮るときに、真正面から撮るんです。

これ、とっても重要です。彼、明らかに「小津映画」を意識してると思いました。

四角の画面に映る、正面から撮影された人物像。

まるで額縁に飾られた「ポートレート」に見えるんですよ、これが。

かつて黒澤監督は映画の事を「シャシン」と呼んでいました。

本作は、まさに人物を写した写真。しかもそれが小津映画のモノマネではなく「動く」「アクションがある」ということ。

グザヴィエ監督は「小津映画」の良さを、自身の中でちゃんと消化した上で、自分なりのオリジナルな「様式美」を生み出しているのです。

しかも、これを若干26歳の監督がやってのけるとは！！

いったい、何という才能なんだろう。

得てして、こういう映画作家は自己主張が強すぎて、観客のことを考えない場合がありますね。

ところが、グザヴィエ監督はちがいます。

映画の背骨とも言っている「脚本」が、これまたいいんです。だから、ストーリーのなかに観客は吸い込まれてゆくのです。グザヴィエ監督の世界観のなかに、いともやすやすと入り込めるのです。

もちろん、本作においては、映像の美しさ、絵の切り取り方、鮮やかなカット割り、天才の名をほしいままにする、グザヴィエ監督の、みずみずしい感性が、随所にあふれています。

主人公スティーブが、スケートボードに載って道路のど真ん中を滑ってゆきます。どこまでも続

く道を気持ち良さそうに。

空には一点の雲もありません。

抜けるような「青」。どこまでも続く「空、ソラ、そら」

空を見上げ、両手を広げるスティーブ。

自由なんだ、自分は自由なんだ.....

大空と一体になるかのような開放感溢れるシーン。

このとき、あの窮屈な1対1の画面サイズが、ついに変わるんですよ。

上映中、真っ暗だったスクリーンの両脇。徐々に左右に広がって行く画面サイズ。その開放感。

これは素晴らしい効果を生み出しました。



1対1の比率の画面は、もちろん窮屈ですね。息が詰まりそうですね。

でも、これが母と息子が生きてゆく、限られた世界の象徴、暗喩ですね。

しかし、少しの間だけですが、画面サイズがパァ〜っとひろがってゆく。まるで観ている観客も、世界が晴れたようにかんじますね。

でもそれは一瞬の事、また画面は窮屈なサイズに縮まってゆきます。親子はまた縮こまったサイズの、現実の世界に戻されてしまうんですね。なんとも心憎い演出です。

ああ、もう、グザヴィエ・ドランに皆が夢中になるわけが分かりましたよ。

本作は決してハッピーな映画ではありません。

どちらかというテーマも重く、暗く、観ていてつらくなる映画でもあります。でも、この作品に流れている、深あ〜い水脈、とでも申しましょうか。

それが母の愛であり、息子がMommyに求める愛なのですね。

純文学の作品などでは「陰々滅々」たる表現を好んで使う作家がいます。読んでるこっちまで落ち込んでしまいそうです。本作も、もし違う監督が撮ったなら、もう観てられないほど辛い作品になったでしょう。しかし、本作はちゃんと「面白い！」のです。

映画にとって面白さは重要な要素です。過去の名作、傑作と呼ばれる作品はやはり「面白い」のです。本作「Mommy / マミー」は、傑作と呼ばれるにふさわしい、必要にして十分な要素は、すでに備えていると言っていいでしょう。

なお、一つ注意していただきたいことがあります。

障害者を描いた映画では、特にデリケートな問題を扱うので大切なことです。

どうか「障害者」と「ひとくくり」にしないでいただきたい、ということです。

実は僕も障害者です。それも外見はなんともない。

外からは見えない障害、「うつ病」です。「精神障害者3級」という障害者手帳を持っている、「障害者」のカテゴリーに入ってしまう人間です。

僕は精神科に通っています。

本作では精神障害者の暴力シーンもある事から、あえて申し上げますが、僕の担当の精神科医に聞いたところ、ADHDの人すべてが本作で描かれるように、暴力性を持っている訳ではないということ。

もっといえば、知的障害児などでは、僕の経験から言えば、彼らに攻撃性はありません。彼らは本当に平和主義者なのです。

うつ病のような「気分障害」と本作のような「ADHD多動性障害」「統合失調症」それに「知的障害」「ダウン症」などは本来『障害』と、ひとくくり論じる事自体、全くのナンセンスです。それぞれ発祥の原因や症状が違います。

本作を見て、各個人のもつ「障害」と「障害者」への偏見が助長される事はありませんように、と切に願います。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 グザヴィエ・ドラン

主演 アンヌ・ドルバル、アントワン＝オリビエ・ピロン

製作 2014年 カナダ

上映時間 134分

予告編映像はこちら

[「Mommy / マミー」予告編](#)

マイケルは母親の旅行先、そのひと時のアバンチュールで生まれてしまった、望まれることのない子供でした。

その母は、マイケルの目の前で自殺。横たわる母親、たったひとりの愛おしい息子、マイケルを前に、彼女が残した最後の言葉は「三度、音を外した……」でした。彼女は息子よりも、オペラのことを気がかりだったのでしょくか？ 当のマイケルは、横たわる母の前で「象の数え歌」を歌っていました。この一件以来マイケルは精神病棟に収容されたのです。

マイケルの父親は一度、彼をアフリカに連れて行ってくれました。

父親はハンターです。獲物を求めてサバンナをジープで駆け巡ります。幼いマイケルは、父親が猟銃で、象を撃ち殺すところを目撃します。

象の眉間に撃ち込まれた二発の銃弾。流れる血。ズサッと横たわる巨大な体。しかし象はまだ生きていました。

マイケルは死にゆく象の瞳を見つめます。まばたきする象の目。何を訴えたいのだろう？ 象の瞳の奥に、深い、広い世界が広がっているかのようです。

父親は、倒れた象に「トドメを刺す」ため、もう一度、銃口を象に向けるのです。

その時マイケルは叫びます。

「NO!!!」

無情にも引き金が引かれます。

サバンナに響く、一発の乾いた銃声、その音はいつまでもマイケルの耳に残ります。

この一連のシーンは、マイケルの回想シーンとして語られます。

彼は院長、そして観客である我々にも、さまざまな「なぞかけ」をかけてきます。

マイケルの発言の中に「無用の長物」という言葉が出てきます。

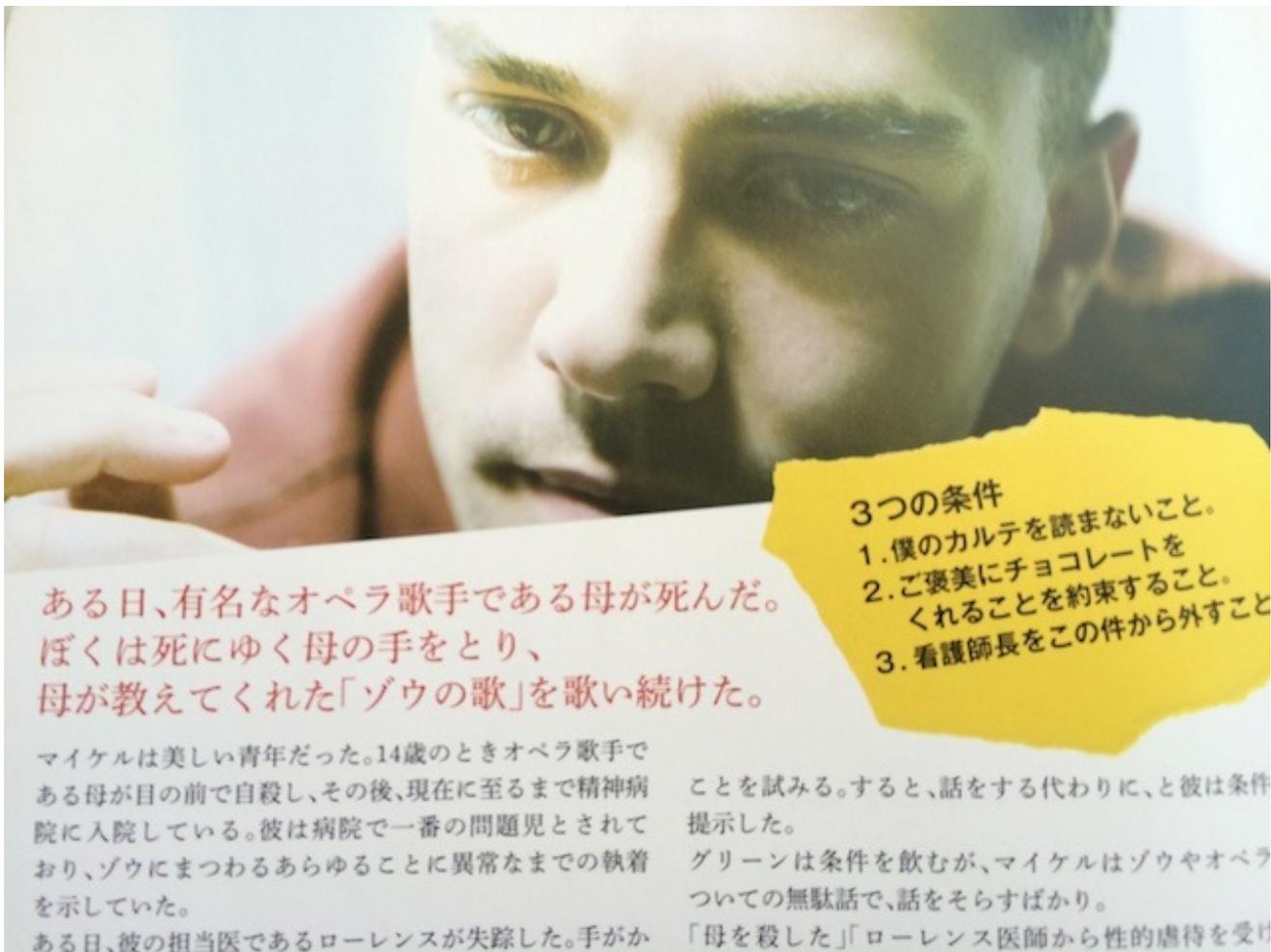
その時、字幕の中に「エレファント」というルビが振られているのを目にしました。辞典で調べてみると、正確には「White elephant」白い象！？

それがなんで「無用の長物」と呼ばれるのか？

ちなみにYahoo知恵袋で検索しますと、「その昔、タイの王様が見た目の悪い白い象を敵側に送った故事に由来する」とのこと。

友好の印に送られたはずの白い象は、世話をするにも大変な手間がかかり、送られた側は、維持費がかさんで、とうとうギブアップしてしまった、という逸話があるのだそうです。

これは、本作において重要なキーワードでしょう。



ある日、有名なオペラ歌手である母が死んだ。
ぼくは死にゆく母の手をとり、
母が教えてくれた「ゾウの歌」を歌い続けた。

マイケルは美しい青年だった。14歳のときオペラ歌手である母が目の前で自殺し、その後、現在に至るまで精神病院に入院している。彼は病院で一番の問題児とされており、ゾウにまつわるあらゆることに異常なまでの執着を示していた。
ある日、彼の担当医であるローレンスが失踪した。手がか

ことを試みる。すると、話をする代わりに、と彼は条件提示した。
グリーンは条件を飲むが、マイケルはゾウやオペラについての無駄話で、話をそらすばかり。
「母を殺した」「ローレンス医師から性的虐待を受け

3つの条件

1. 僕のカルテを読まないこと。
2. ご褒美にチョコレートを与えることを約束すること。
3. 看護師長をこの件から外すこと

つまりは、マイケル自身が精神病院に送られた、望まれない「白い象」ホワイトエレファントな訳ですね。

精神病院側はもう、彼の処遇に困るわけですね。ついには病院を破綻させかねない。その心配は現実のものとなります。

だから、彼の発する言葉の「象徴」するものであったり「暗喩」「隠喩」などに注意を払わねばなりません。院長との二人芝居は、緊迫した心理戦でもあります。しかしマイケルはいつもどこか、ふざけた態度をとります。まともに答えようとしない。グリーン院長の心をもてあそぶように、彼は言い放ちます。

「僕と取引したいのかい？ だったら僕が出す条件は三つだ」

その一つが、なんと「チョコレート」をくれること、なのです。

実はこの、他愛もないチョコレートの要求が、後にとんでもない事態を引き起こすことになるとは。

複雑怪奇なマイケルの精神世界、そこはまるで底なし沼なのか？ あるいは巨大迷路なのか。僕には彼自身が「虚無」な「無の坩堝」とでもいうべき存在に思えてなりませんでした。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 シャルル・ビナメ

主演 グザビエ・ドラン、ブルース・グリーンウッド

製作 2014年 カナダ

上映時間 100分

予告編映像はこちら

[「エレファント・ソング」予告編](#)

ジュラシック・ワールド

ジュラシック・ワールド

2015年8月24日 [イオンシネマ明石](#) にて鑑賞

当テーマパークに年齢制限はございません

え〜毎度、おなじみの「ジュラシック・パーク」シリーズ、恐竜アトラクションムービーでございまして。もう、ほとんど説明の必要もございません。

- ①子供達、恐竜テーマパークへいく。
- ②恐竜、脱走する。
- ③子供達、怖い目に遭う。
- ④脇役、恐竜に食べられる。
- ⑤子供達、ヒーローに助けられる。
- ⑥メデタシめでたし。

という一連の流れ、これはもう、完璧な「お約束」「予定調和」ムービーでございます。

最初っから結末はわかっているのに、何故か、観客はお金を払って観に行くわけでございますね。

要はどのように、我々観客を怖がらせてくれるか？ そのオバケ屋敷的演出を楽しみに、みなさんご覧になるわけでして。そういう意味では期待を裏切らないですね。

恐竜のテーマパーク「ジュラシック・ワールド」の作り込み、恐竜たちのリアルさ。僕は2Dで鑑賞しましたが、これはやっぱり3Dのほうがより楽しめるだろうな、と思いました。



こういうジャンルの作品に、人物描写うんぬんを語るのは、野暮ってえもんなんですけど、あえて申しますと.....

主人公の兄弟、ザックとグレイ、映画は主に、この二人の目線で描かれて行きます。このあたり、製作総指揮、スピルバーグ氏の子供目線尊重の姿勢は引き継がれておりますね。

兄のザックはハイティーンで、恐竜よりも、女の子の方に関心あり。メカには強く、クルマをいじったりするのが好き。でもまだクルマの免許は持ってません。弟のグレイは完全な恐竜オタク。今回のテーマパーク行きを楽しみにしていました。

彼らの両親は実は離婚寸前。この辺りの設定も、現代アメリカ社会の典型的な一例なのでしょう。観客が「ああ、うちもそうよね」という共感を得られやすい設定になっております。

母親の妹クレアは、恐竜テーマパーク「ジュラシック・ワールド」の運営責任者の要職を務めています。兄弟にとっては叔母さんにあたります。このクレア叔母さん、いわゆる一昔前のバリバリのキャリアウーマン像でして、そこそこの年齢なんですけど未だにシングルです。

本作でのヒーロー役、として登場するのが、彼女の下で働く軍事のプロフェッショナル、オーウェン。

いま、恐竜の一種、ラプトルを飼育し、手なづけるプロジェクトで実験中。プライベートでは、パーク内の寂れた所にボロ屋を手作りし、住んでいます。休みの日は、油まみれになって、レトロなバイクを修理したりするのが楽しくてしょうがない。

ちなみに日本語版の吹き替えは、玉木宏氏が演じております。もちろん、彼、いい声の持ち主なんですけど、いかんせん、逆に存在感がありすぎる。すぐに玉木宏と分かってしまい、そうすると、僕なんかはどうしてもあの「のだめカンタービレ」の千秋真一を思い出すのです。まあ、これ

はこれで面白い想像かもしれない。

のための千秋先輩が恐竜を手なづけて、タクトをもって「指揮」するようなものです。

さてテーマパークは、観客へ常に新鮮な楽しみを提供しなければ、飽きられてしまいます。運営責任者であるクレアは、経営陣として、以前から新種の恐竜づくりを重要な課題と位置づけてきました。いまやDNAをハサミとノリでつぎはぎできる時代です。

一度やり始めたら、もうやめられない、止まらない。もっと刺激の強い、もっと凶暴な恐竜を！
！ 経営陣とお抱え科学者たちは、史上最強の「ハイブリッド恐竜」を生み出します。これをお披露目したら、みんな度肝を抜く！ 話題沸騰、来場者アップは間違い無し！ と期待していたら、予期せぬ出来事が。

この最強のハイブリッド恐竜が、柵を越えてパーク内に逃げ出したのです。

この日の来場客は2万人を超えていました。

この人たちをどうやって安全に退避させるか？

クレア叔母さんは、ふと気になって、園内フリーパスを渡していた二人の甥っ子たちに連絡を取ってみます。多くの人たちが避難する中、兄弟たちは、危機が迫っていることも知りませんでした。ガラスボールの様な乗り物（ジャイロスフィアと言うらしい）で園内を散策中。おまけに普段から立ち入り禁止の区域にまで入り込んでいる。管理センターのモニター画面では、逃げ出した恐竜の方へ兄弟はどんどん近づいています。このままでは二人が危ない。クレア叔母さんとオーウェンは、彼らを救助に向かうのですが.....。



本作はいうまでもなく、「アトラクション映画で何が悪い」と開き直った作品でもあります。それをいまさら、ちまちまと、なんらかの文明批判めいたものを、作品の随所に「スパイス」とし

て持ち込んでいるのが、かえって「ウザい」と感じる部分もあります。

本作での製作総指揮スピルバーグ氏が監督した、あの名作「E・T」では、ストーリーとメッセージ性が実によく調和しておりました。

子供が宇宙人と出会うことよっての、人間としての成長、そして大人たちへの不信と反発。住む星が違っていても、「友情」や「愛」は普遍なのではないか？ といったメッセージが込められておりました。

本作では、科学者たちが、生命倫理のタガを外し、「ハイブリッド恐竜」を生み出してしまいます。人間の勝手によって、都合よく「操作された命」であっても、やはり彼ら恐竜も動物であり、一つの命に変わりはありません。

命に対して、人間の立ち位置とはどうあるべきでしょうか？

大風呂敷を広げるなら、西洋文明とは人間が自然を征服し、屈服させることの歴史でもありました。しかしながら、東洋的な文明、思想では、自然との調和や畏怖の念、というものが、大切にされてきました。ハリウッドのヒットメーカーに多大な影響を与えた宮崎駿氏「となりのトトロ」や「千と千尋の神隠し」といった作品は、その精神が根底に流れております。絶対的な悪役は存在せず、善悪は相対的なものと位置づけられています。人間というものは、広い世界の中で、一人ぼっちでは、なんともか弱く、頼りない存在として捉えられています。

また、この二つの作品では、勧善懲悪的なヒーローが存在しません。トトロは子供達のヒーローかもしれませんが、それでも彼らは、あくまで「オバケ」であります。その不思議な力で、庭に植えた種を芽吹かせたり、ネコバスを走らせたりします。

また、「千と千尋」の舞台においては、八百万の神様の湯治場、という、およそ一神教の価値観では理解できない様な設定です。

大風呂敷を広げすぎましたが、本作「ジュラシック・ワールド」では恐竜対人間、自然対人間、の西洋的な二項対立の図式が少なからず感じられました。

製作スタッフはコンピュータを駆使して、恐竜を、より怖く見せようとし、より凶暴なアクションシーンを演出しようとし、

その精神の根底に流れるのは、恐竜たちの立場を尊重するのではなく、あくまで「見世物」として、人間が恐竜を支配しようとしているように思えるのです。

本作のスタッフたちは、「コンピュータグラフィック」「3Dモデル」を自由自在に操ること、その造形を支配することへの快感に酔っていないのでしょうか？

本作終盤での、恐竜対恐竜の対決シーン、および捕食シーン、それは僕の目には正直かなり”過激だ”と感じました。いまのコンピュータゲームに慣れた世代には、こう言った「殺し合い」シーンは、何の違和感もないのでしょうか？

いま、話題のR15+指定の「テッド2」が公開中ですが、あれを年齢制限しているのなら、本作の「残虐」な恐竜の殺し合いシーンのある本作は、年齢制限しなくてもよろしいのでしょうか？

幼い子供達に見せても良いのでしょうか？ と僕などは思ってしまふのです。

まあ、それぐらいリアルで、迫力ある演出であることは間違いなく、そういう意味でアトラクションムービーとしての出来は、極めて優れているということでしょう。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 コリン・トレボロウ

主演 クリス・プラット、ブライス・ダラス・ハワード

製作 2015年 アメリカ

上映時間 125分

予告編映像はこちら

[「ジュラシック・ワールド」予告編](#)

テッド2

テッド2

2015年8月31日 [ミント神戸](#) にて鑑賞

テッドは「考える葦である」のかなあ〜？

「全米が震撼！！」 ズンズンッ!!! (←ジョーズ系の効果音)

「R15+指定！！」 ドスンッ !!! (←ジュラシック・パーク系の効果音)

「日本中をトリコにした！！」 (←スターウォーズ系のファンファーレ)

あの世界一ダメな、もふもふテディベアが、帰って来ました！！

テッドは職場の同僚でもある、あのタミ・リンちゃんとともに結婚。ちなみに一作目の出会いのシーンでは、テッドが結構、ダーティーでワイルドにアタックしてましたね。(ちなみにタミ・リンちゃん、ナニのアレはNGらしいです、すいません、大人の下世話な話で.....)

映画は冒頭、ふたりの幸せな結婚式シーンから始まります。神父役は、あのB級ヒーロー、我らがフラッシュ・ゴードン(サム・J・ジョーンズ)が務めます。引き続きオープニングクレジットへ突入。ここはブロードウェイのレビュー仕立て。今回のテッドはとってもゴージャスなんです。テッドと男女のダンサーたちが、見事なダンスを披露してくれます。テッドは蝶ネクタイにタキシード。彼、いろんな服がよく似合うんですね。本作ではテッドがいろんな格好で現れるので(スキューバダイビングとか)衣装にも注目ですよ。



さて、結婚から1年も経つと、テッドとタミ・リンは夫婦ゲンカの毎日。どうしたら二人、仲良く暮らせるのか？

職場仲間のアドバイスは「子供を持てばいいのよ」と簡単明瞭。

そうだよ、それだ！！ タミ・リン、おれたち子供を持とうよ！

ということで、テッドとタミ・リン、二人に夢と目標ができました。

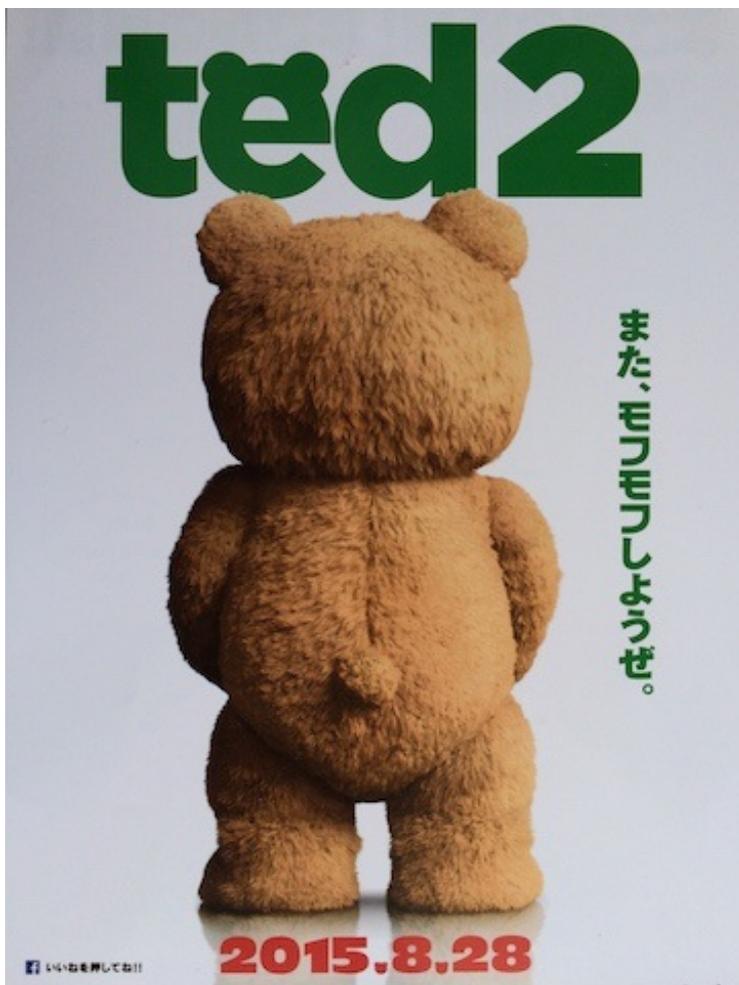
ところが、そんな二人に州政府から一通の通知が。

「テッドは人間とは認められない、ゆえに二人の結婚も成立しない、更にはテッドが子供を持つことも許されない」というのです。

テッドは長年連れ添った雷兄弟（サンダーバディ）の親友ジョン（マーク・ウォールバーグ）に相談。

「困った時は弁護士さ」とジョンとテッドたちは弁護士事務所へ向かいます。そこで彼らの担当になったのが、若干26歳のおねーちゃん弁護士、サマンサ（アマンダ・セイフライド）

法廷で「アナ雪」の「レット・イット・ゴー」なんか歌わないでね、とテッドに釘を刺されながら、頼りない新人弁護士サマンサとテッドたちは「命ある、クマのぬいぐるみ、テッドに人権を！」と法廷に乗り込んでゆくのです。



今回の「テッド2」では、ガッツリ、法廷シーンが描かれるんですね。

観ている途中から、あれ、これって、以外に、とんでもなくシリアスな命題を観客に吹っ掛けて来てるんじゃないの？とおもいました。

テッドは僕たち観客に問いかけてくるのです。

「オレってモノなの？ それとも人間？」

本作はセス・マクファーレン監督が仕掛けた、ある意味、大変、哲学的な、思考実験映画なのかもしれませんよ。

テッドはクリスマスの夜、神様から奇跡の命を与えられました。彼は人間と会話ができます。もちろん喜怒哀楽だってある。何より、人を愛することができるのです。しかしそのルックスは... ..モッコモコの、綿を詰められた、クマのぬいぐるみです。しかも、元はと言えば、工場で「生産された」ぬいぐるみでした。

さて、この場合「テッド」には、人間のような「基本的人権」は認められるのでしょうか？ ということです。

例えば、日本ではペットを傷つけると「器物損壊罪」として罰せられます。

飼い主の愛情を注いだ、家族以上の存在であるペット。彼らは日本では「モノ」として扱われてしまうのです。彼らペットや動物たちには、自然発生的な「生きる権利」や生き物としての「尊厳」は存在しないのでしょうか？

さて、本作「テッド2」では、アメリカ合衆国における「黒人奴隷」の問題が引用されています。

かつて彼らが、故郷であるアフリカ大陸から船で「輸入」されたとき、人間としては扱われな

ったのです。

黒人奴隷は「モノ」として扱われたことが、法廷の記録として厳然として残っていることを、本作では示しています。

黒人、および有色人種は、凄惨で、血塗られた歴史を乗り越えて「公民権」を獲得します。

そういった、合衆国の歴史や背景を下敷きにして、本作は描かれております。

これら法廷シーンでは、おバカ映画の体裁であるにもかかわらず、笑いの要素は極力省かれた演出になっています。

とてもじゃないが、茶化して笑いを取る場面ではないんですね。

さあ、法廷で、テッドは人間であると証明できるんでしょうか？

そして命を宿した、奇跡のテディベアに、基本的人権は認められるんでしょうか？ 本作の大きな見どころですね。

そのための配役が素晴らしい。

なんと、本作「テッド2」には、超大物俳優、モーガン・フリーマン氏が弁護士役で出演。テッドと夢の共演となりました。

また、リアム・ニースン氏が、苦みばしったハードボイルドな演技で、カメオ出演しているのも必見。彼は、別のアクション映画の世界からやってきた、主人公そのまんまのノリで、この「テッド2」の世界に乱入してきます。

切羽詰まった、ヒリヒリするような表情がよけい笑えます。

エンドロールの最後で、もう一回登場しますんで、見逃しちゃいけませんよ。

なお、本作はR15+指定なので、良い子の皆さんは、もうちょっと、ガマンしましょうね。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 セス・マクファーレン

主演 マーク・ウォールバーグ、アマンダ・セイフライド

製作 2015年 アメリカ

上映時間 116分

予告編映像はこちら

[「テッド2」予告編](#)

サイの季節

サイの季節

2015年9月2日 [元町映画館](#) にて鑑賞

命の輪郭を映しとる

これは久々に手強い作品と出会ったものだと、観終わって、改めてちょっと身構えてしまいました。

本作は実話ベースです。しかし、ドキュメンタリータッチでは描かれておりません。現代アートのような映像表現も含みながらの、ストーリー展開、人物描写、さらにはイランでのイスラム革命の予備知識がないと、僕のようなボンクラな理解力じゃあ、とてもじゃないが付いていきません。自分の頭とハートで納得できるようになるには、何回も観直す必要のある作品だとも思いました。

主人公のクルド系イラン人の詩人、サヘル（ベヘルーズ・ヴォスギー）は、革命政府から「神を冒瀆する、くだらん詩を書いた」として検挙され、投獄されてしまいます。彼の妻ミナ（モニカ・ベルッチ）も投獄され、二人は離ればなれとなってしまいます。

本作でのキーパーソンとなるのが、アクバル（ユルマズ・エルドガン）という男。彼は詩人の妻、ミナのことを密かに慕い続けておりました。

革命前、ミナは王制下、軍司令官の娘として裕福な家で育ちました。アクバルはその司令官邸宅の運転手であり、下っ端の使用人だったのです。しかし、革命によって、まさに天地がひっくり返りました。

昨日まで、偉い人たちに平身低頭していたアクバル。それが、革命がおこった今では、支配する側に立場が逆転。今は権力を手に入れ、ついには自分の長年の想いを果たそうとします。実は、詩人サヘルと妻ミナを引き裂いたのは、アクバルの仕業でありました。サヘルを既に死んだものとして「処理」し、ミナを監獄の中で自分の思うまま凌辱してしまいます。ミナは獄中で望まない妊娠をし、二人の子供を出産します。

さて、永い、長い、獄中生活30年を経て、詩人サヘルはついに釈放。彼は、なによりもまず、最愛の妻、ミナの行方を捜します。あらゆるツテを頼りに、彼がたどり着いた先は、トルコのイスタンブール。

ここはヨーロッパへ渡る難民たちの中継地となっています。サヘルはここで二人の若い女性と出会います。彼女たちも難民らしい。ヨーロッパへ向かう旅費を稼ぐため、止むを得ず、女である自分の身体を売る、いわゆる「街の女」になっております。もとより、自暴自棄になっていたサヘルは、この女に誘われるまま、体を寄り添わせるのですが、実は彼女こそ、自分の妻ミナの……。



「サイの季節」とは、かつてサヘルが書いた詩の言葉です。彼の書いた詩は、本作中で、幾度か朗読されます。それはどこか、日本の詩吟、または浄瑠璃の悲恋物語を思わせる、体の奥底からこみ上げてくる詠嘆として詠われています。

「サイは土を食み、遠くへ吐き出す」

生まれた故郷を追われ、国を捨て、放浪する人々。詩人サヘルも、その群衆の中の一人であることはまぎれもないのです。彼らは自分の体と魂をつくった故郷の土を、一体どの土地で吐き出すことになるのでしょうか？

本作では、重要なキーパーソンであるところの、アクバルの人物像について、あまり多くの説明をしておりませんので、作品の流れの中で短時間で理解するにはやや無理があると感じました。映像に関しては、アート感覚あふれるアプローチがなされており、

映画ならではの広大な風景、ロケーション。それを絵の額縁のように利用しながら、画面の半分、クローズアップした人物を配置。これを一つの様式のように多用します。そこに演技は必要ありません。ただ、ただ、一人の俳優の存在感、質感、肉感、そういうモノをカメラに捉えようとします。それはベヘルズ・ヴォスギーというイラン人俳優（ちなみに彼も革命後亡命）その人の存在感に監督が惚れ込んでいるからなのでしょう。

この絵作りを見ながら、ノーベル賞作家、ヘミングウェイの晩年の肖像写真を思い出しました。顔の一つ一つのシワ、ザラついた肌の質感。口元から顎をふちどる白い髭。その一本一本がもつ存在感。まるで小説「老人と海」の主人公、ちっぽけな小舟で、巨大なカジキを釣りあげる、あの老人を彷彿とさせるヘミングウェイ。その写真の手法を本作で持ち込んだかのようです。

他にも、監獄の柱に縛り付けられたサヘルのシーン。そこに降り注ぐ大粒の雨。と思ったら、そ

れはなんと小さな亀。亀が雨のように降ってくる。このシーンは何を意味するのだろうか？

地面にひっくり返った亀が映ります。でも、その亀は必死で起き上がろうとする。カメラはその亀の姿を地面すれすれの目線で捉えます。

また、本作の序盤で登場する、横たわる巨木のシーン。まるで、樹齢千年を超える屋久杉のような巨木が横たわっている。それだけで圧倒的な存在感があります。

そういうロケーションを大切に描く、絵として切り取る感覚は、ギリシャの故アングロブロス監督作品に通底するようなどころも感じられます。

本作を観て、ふとジュルジュ・ルオーの「避難する人たち」という絵画を思い出しました。

人々はいつも、なんらかの理由で、避難を強いられている。それは決して革命や戦争といったことだけではないでしょう。

弱い人たちは、いつでも避難を強えられる。

その象徴的な例がニッポンの原発事故。それによって否応無く「故郷」を追われた人々。

更には、最近問題になっている貧困の連鎖。それによる子供達の漂流。先進国と呼ばれる日本国内で、実はいま、静かに、世の底辺で「難民」にさせられている人たちがいる。

あの、深夜の商店街を、あてもなくさまよい、その後失われた二人の子供たちの命。

あの監視カメラに映った「ぼやけた子供達の姿」こそが、象徴的な「ニッポンの避難」そして「ニッポンの命の軽さ」そして「命の輪郭がぼやけている」という「風景」ではなかったでしょうか？

ルオーはご承知の通り、20世紀最高の宗教画家と呼ばれています。その骨太の輪郭が形作る、人物像。そこには人間の尊厳を見つめるような、画家の視点があります。僕はそのルオーの筆使いそのものに、どこか「聖なるもの」を感じ、心が静かになるような気がするのです。

豪華コラボレーションが放つ、衝撃の実話

提供 マーティン・スコセッシ × 監督 バフマン・ゴバディ × 主演 モニカ・ベルッチ

「ヒューゴの不思議な発明」 「ベルシャ猫を誰も知らない」 「マレーナ」



マーティン・スコセッシを心酔させた、網膜になだれこむ圧倒的ダイナミズムの映像世界
名匠バフマン・ゴバディが実話を基に仕掛ける、混沌の時代を彷徨う男女のスリリングな人間ドラマ

第37回トロント国際映画祭
SPECIAL PRESENTATIONS部門
第60回サン・セバスティアン国際映画祭
国際映画祭撮影賞受賞
第48回シカゴ国際映画祭
「ラブ/ゴールド/ヒューゴ/ヒート」
第13回東京フィルメックス
特別招待クロージング作品

全世界が待望した、イラン人監督バフマン・ゴバディの最新長編作「サイの季節」は、実在するクルド系イラン人の詩人サデック・キヤマンガールの実体験を基に描かれた衝撃的なドラマである。第37回トロント国際映画祭でプレミア上映され、第60回サン・セバスティアン国際映画祭では最優秀撮影賞を受賞、その後、第17回釜山国際映画祭、第13回東京フィルメックス等数々の国際映画祭での上映と受賞を重ね、あのマーティン・スコセッシがネームクレジットで称賛の意を表した映画史に残る至高の1作である。

国際映画祭カメラ・ドールを受賞し、その映像美に定評のあるゴバディだが、本作はこれまでの自身のどの作品とも一線を画す、まさに真骨頂と云って過言ではない。その大胆な構成力と魅惑的な審美眼が作り出す混沌と陶酔の映像世界は、観る者を現実と幻想の魔法的な交錯に引き込む。そこに、イランの伝説的俳優ベヘーズ・ヴォスギー、イタリアの至宝モニカ・ベルッチら名優たちの力強い存在感がたしかにリアリティをもたらしている。

「偽りの死」で存在を消された男、愛する人と引き裂かれた女、権威に

本作「サイの季節」をネットで調べると、監督であるバフマン・ゴバディ氏自身も、生まれ故郷イランを去り、現在も国外亡命中であるとのこと。

また、婚約者がイラン政府からスパイ容疑で逮捕され、8年間拘束されていたという情報もあります。

そのような監督自身の境遇を踏まえ、本作の方向性として、イランでの革命の際、実際に起こった、不幸な人間ドラマとして描くのか？ それとも現代アートの表現技法へ軸足を置くのか、はたまた、民衆を決して幸せにしない国家や宗教への痛烈な批判を描くのか？

もちろん、監督自身はこれらを全て融合させ、作品として仕上げようとしていることは疑いようもありません。ただ、そのブレンドのさじ加減については、好き嫌いの分かれるところでしょう。

監督自身が、難民であり、故郷に戻れない境遇で描かれた本作。

バフマン・ゴバディ監督については、抜きん出た映像感覚の持ち主であることはまちがいになく、アート系の映画がお好きな方にはいいかもです。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

- 物語 ☆☆☆
- 配役 ☆☆☆☆
- 演出 ☆☆☆
- 美術 ☆☆☆☆
- 音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 バフマン・ゴバディ

主演 ベヘルーズ・ヴォスギー、モニカ・ベルッチ

製作 2012年 イラク、トルコ合作

上映時間 93分

予告編映像はこちら

[「サイの季節」予告編](#)

ふたつの名前を持つ少年

ふたつの名前を持つ少年

2015年9月7日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

都合の悪い過去を生き延びろ！

ポーランドのユダヤ人少年が、ナチスの迫害から逃れ、たったひとりで戦禍を生き抜いた、という実話を基にしたお話です。

少年の名はスリック。お父さんは街のパン屋さんでした。しかし、平和な暮らしも、ナチスドイツがポーランドに侵攻してきたことによって一変します。ナチはユダヤ人狩りをすすめてゆきます。住み慣れた家を追われ、ナチから逃げる一家。どうしても息子だけは生き残らせたいお父さんは、スリックに、教え諭します。

「今日から名前を変えろ、何がいい？」

スリックは、強い、いじめっ子の名前を言いました。それが「ユレク」でした。

「そうだ、お前は今日からユレクだ、いいな」

そしてお父さんはユレク少年に語り諭します。

「いいか？ 父さんの名前も、母さんの名前も忘れていい。だけど、これだけは忘れるな、ユダヤ人であることは絶対に忘れるんじゃないぞ！」

この言葉はユレク少年が聞いた、お父さんの最後の言葉となります。

8歳の少年はたったひとり、森へ逃げ込みます。

もうすぐ冬がやってくる。幼い少年の命は、厳しい自然の中で耐えていけるのか？ 食べ物もない、やがて吹雪が襲ってくる。寒さの中、彼は一軒の農家にたどり着きます。少年を救ってくれたのは、その家にひとりで住むヤンチック夫人。彼女は暖かいスープと寝床を与えてくれました。それだけではなく、彼女は8歳のユレクが、これからひとりで生きていけるよう、さまざまな知恵を授けてくれました。

やがてユレクは、ヤンチック夫人のもとを離れ、少しずつ森の中で生活する術を、体で覚えてゆきます。

時には近所の農家の前で「物乞い」をし、あるいはその農家で働いて食事をもらいます。

ユレク少年が学んだことは「一つの農家で長居をするな」ということでした。一つ所で暮らすよりも、放浪し続けることの方が、ユダヤ人だとバレない、ナチに見つかりにくい、のです。こういったことをわずか8歳の少年が体得してゆく、徐々に成長して行く姿を淡々と監督は描いてゆきます。



ユレク少年は、生き延びるためには嘘もつく、機転を効かせる、危険を察知する、そして働く。どんどんたくましく、賢くなって行くユレク少年。

彼はやがて、大きな地主の家で、農作業の手伝いとして、住み込みで働き始めます。しかし、ある日、牛をつないだ歯車に手を挟まれる大怪我を負います。

街の病院へ担ぎ込まれるユレク。しかし、担当の外科医は、少年をユダヤ人だと見破ってしまいました。

「ユダヤ人に手術はしない」と外科医は冷たく言い放ちます。少年は治療も受けられぬまま、病院の廊下に放置されてしまうのですが.....

本作で強く印象に残ったのは、ユレクとお父さんの別れ際のシーンでした。

お父さんがユレク少年に求めたことがあります。それはユダヤ人であること、ユダヤ教徒である「誇りと尊厳」をわすれないことです。

それほどまでに、ユダヤ人であることのアイデンティティは、強烈なものなのだ、と思い知らされるのです。

我々日本人は、よく無神論者であると言われる。ハロウィンやクリスマスは大騒ぎして楽しむかと思えば、大安吉日、友引、仏滅を意識します。また、占星術やタロットカードなど、あらゆる種類の占いは、もはやファッションの一部であり、人が亡くなると、お葬式には数珠を持ち、僧侶が読経を唱えます。

まるで都合の良い時に、都合の良い宗教行事をとっかえひっかえ利用している、実に無節操極まりない民族のようですが.....

本作においては、（すくなくとも舞台となるポーランドにおいては）人間と神との関係を、改め

て認識し直す必要があると感じさせられます。

人間などは、神の前では、実には取るに足らない存在であり、神は絶対的、全宇宙的なスケールでこの世を支配している。

だからユレク少年は、見ず知らずの農家で、物乞いをする時に「神を祝福する」言葉を唱えます。

物乞いをされた家の家主としても「神様を祝福する少年」を邪険に扱うわけにはいかなくなるのですね。

この辺り、自分の「ちっぽけな命」を生き延びさせるために、ユレク少年が神様を実にうまく「方便」として使う、そのしたたかさ。少年がひとりで生きてゆく、生き延びることの過酷さと「リアル」を感じます。



戦後70年、アウシュビッツ収容所解放70周年の夏に贈る

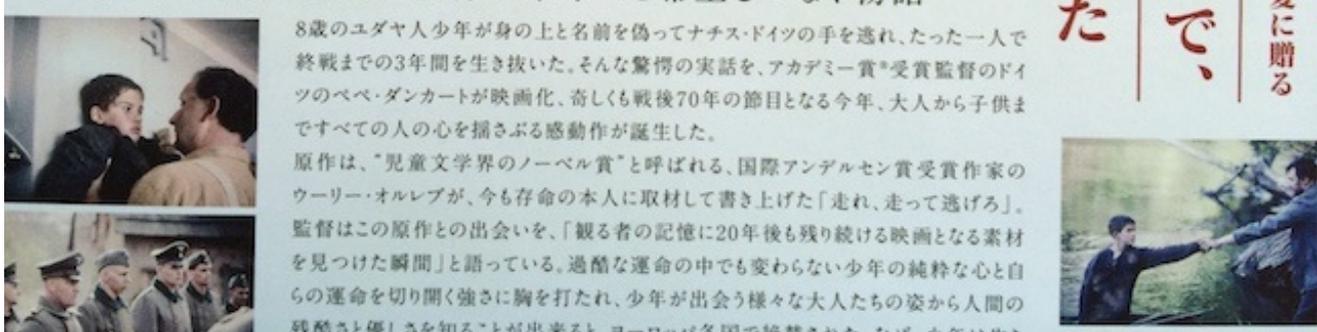
壮絶な運命をたった一人で、
強く前向きに生き抜いた

少年の感動の実話！

ポーランドの美しい四季を背景に未来へと希望をつなぐ物語

8歳のユダヤ人少年が身の上と名前を偽ってナチスドイツの手を逃れ、たった一人で終戦までの3年間を生き抜いた。そんな驚愕の実話を、アカデミー賞®受賞監督のドイツのペペ・ダンカートが映画化、奇しくも戦後70年の節目となる今年、大人から子供まですべての人の心を揺さぶる感動作が誕生した。

原作は、「児童文学界のノーベル賞」と呼ばれる、国際アンデルセン賞受賞作家のウーリー・オルレブが、今も存命の本人に取材して書き上げた「走れ、走って逃げろ」。監督はこの原作との出会いを、「観る者の記憶に20年後も残り続ける映画となる素材を見つけた瞬間」と語っている。過酷な運命の中でも変わらない少年の純粋な心と自らの運命を切り開く強さに胸を打たれ、少年が出会う様々な大人たちの姿から人間の残酷さと優しさを知る事が出来る。ヨーロッパ各国で絶賛された。今年はこの



さて、このユレク少年。映画のHPを見ると、驚くべきことに、ペペ・ダンカート監督は、双子の子役を使って「ひとりの」ユレクという少年像を描きあげております。

オーディションには一年以上かけ、候補者700人から選び抜いた、という逸材の二人です。

また、ユレク少年の運命を左右するドイツ親衛隊（SS）将校。どこかでみたなあ～、と思っていたら、ブラッド・ピット主演の「イングリリアス・バスターズ」やスピルバーグ監督の「戦火の馬」にも出演していた、ライナー・ボックというドイツ人俳優さんでした。

日本では戦後70年の節目、とされますが、ヨーロッパ、特にドイツやユダヤ民族にとっては、アウシュビッツに代表される「絶滅収容所解放70周年」の記念イヤーに当たるわけです。そういう年にこの作品が、日本でも公開されたことは、意義深いことだと思います。

本作はドイツ・フランスの合作映画。ドイツは徹底してナチズムの「忌まわしい過去」と向き合

い続ける姿勢をとります。

日本では過去の戦争に関して「将来に渡って謝罪し続けること」を避けようという空気があります。一つ間違えばそれは、美しいとされる未来のために、臭い過去には蓋をしておこう、さらには、都合の悪い醜い過去は、いっそのこと書き換えてしまおう、という姿勢につながってゆくかもしれません。

ナチスによって都合の良いスケープゴートにされてしまったユダヤ民族。

本作は、そのなかで、奇跡的に生き延びた小さな命の記録です。

わずか8歳の少年が、戦争という極限状況のなか、機転を利かせながら、たくましく、したたかに生き延びた、というのは、神様がユレク少年に、歴史の語り部という役割を背負わせた、のかもしれない。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ペペ・ダンカート

主演 アンジェイ&カミル・トカチ、エリザベス・デューダ
ライナー・ボック

製作 2013年 ドイツ、フランス合作

上映時間 107分

予告編映像はこちら

[「ふたつの名前を持つ少年」予告編](#)

ヴィンセントが教えてくれたこと

ヴィンセントが教えてくれたこと

2015年9月7日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

結局「いい人」で片付けるのか？

この映画を見ながら、武田鉄矢氏のお母さん、武田イクさんのエピソードを思い出していた。武田鉄矢氏曰く「うちの母ちゃんは、骨がきしむほど働いてた」という。貧しい生活を笑い飛ばしながら、たくましく生きた、昭和の母の姿がそこにはあった。「母に捧げるバラード」のモデルとなった、母イクさんには、講演会の依頼が次々と舞い込んだ。当初は著名な教育評論家の前座だった。しかし、その型破りな教育論は話題を呼び、あまりの人気ぶりに、後には評論家の方が前座を務めることになったそうだ。イクさんはいう。

「善悪はわからんとです。その時は悪い行いかもしれんけど、後で良いことになる時があるとですよ」

更には、我が家には教育方針がない、とまで言い切る。武田鉄矢氏の父親は相当な大酒飲みであったそうだ。酒が入ると、当然気が大きくなる。給料日ぐらいは「ええカッコ」もしてみたい。給料全部を友人たちに大盤振る舞いしてしまう。酔っ払って家に帰り着き、カラの給料袋を前に、イク母ちゃんは激怒する。武田家では激しい夫婦喧嘩が日常茶飯事であったという。そういう親の姿を、我が子たちに、ナマで晒して見せたイク母さん。

「親が間違った生き方をしてみせたら、子供はそれを見て、ああ、親の真似をしなければ良いんだとわかる。親が生きた教科書ですばい」

前置きが長くなったが、本作「ヴィンセントが教えてくれたこと」はまさに、不良親父のヴィンセント自身が生きた教科書そのものだ。



ある日、ヴィンセントの隣に母子家庭が引っ越してくる。子供は12歳の少年オリバーだ。この子は新たに地域の小学校に転入することになる。ちびっこで新入りの転校生オリバーは、格好のイジメ対象だ。だが、後にオリバーには心強いボディガードが付くことになる。隣に住む独居老人ヴィンセントだ。

ヴィンセントは、酒と女とギャンブル漬けの毎日。ある日、銀行の窓口で宣言される。「残高はマイナスです」

口座を解約するにも、銀行に金を返さねばならない。隣に越してきたシングルマザーのマギーは病院の技師。毎日のように帰りは遅い。12歳のオリバーを一人にしてはおけない。

マギーの提案もあり、ヴィンセントはオリバーの世話を「ビジネス」として請け負うことになった。

まあ、そこは不良じじいである。いじめられっ子オリバーに、喧嘩の仕方を教えたり、競馬で大穴を当てたり、子供相手に世の中をたくましく生きる術を体で教え込んで行く、というのが本作の内容である。

予告編で見ると、かなりぶっ飛んだオヤジの話かな、と思っていたら、これが想像以上にマイルドな仕上がり。正直、やや拍子抜けした。

ワルでダーティーといえ、ちょうど公開中の「テッド2」の方が「ワル度」や「ダーティさ」のアルコール度数は、はるかに高い。放送禁止用語や「F CK」言葉も連発する。

さて、頑固じじいが、少年に世渡りのたくましさを教え込んで行く、というストーリーなら、格好の秀作がある。クリント・イーストウッド監督の「[グラン・トリノ](#)」である。

本作は残念ながら「グラン・トリノ」の味わい深さには追いついていない。

本作において、拍子抜けするのは、ヴィンセントがワルぶるのには、原因があり、しかもそれが明快でありすぎる。根は善人なのだ、というところに落ち着いてしまうのである。

なあ〜んだ、人間って案外単純なのね、という「あっさり感」にがっかりしてしまうのである。ヴィンセントがベトナム戦争に従軍したこと。認知症の奥さんを、できる限り良い施設に入れて、余生を送らせようとしたこと。

これらはラストシーン、オリバーの学校での学習発表会「僕の聖人」というテーマで披露される。

なんと、ヴィンセントは聖人に祭り上げられるのだ。

もちろんこの映画には、それゆえの爽やかさと、後味の良さがある。



ただ、僕の主観では、ヴィンセントという人物像は、まだまだ、さらなる深みや、人物の陰影を描き出せたのではないかと考えた。本作には人物像の謎がなさすぎるのである。

例えば、ジャン・レノ主演の「[LEON](#)」という格好の例がある。

いたいけな少女の願いを聞き入れた殺し屋レオン。

彼の人物像は謎だらけだ。彼がなぜ殺し屋になったのか、監督はあえて情報を観客に提示していない。そのためより謎が増している。冷酷で有能な殺し屋でありながら、毎日ミルクを二本買い求め、観葉植物をこよなく愛する、物静かな独り者。その人物像をジャン・レノという俳優は、多面体でできた鏡のように、様々な角度から人物を映し出して見せてくれる。

ビル・マーレイという、いろんな演技の「引き出し」を持った、キャリアのある俳優を使うのであれば、更なる人物像の深掘りをやっても良かったのでは……、と、ちょっと残念に思うのである。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 セオドア・メルフィ

主演 ビル・マーレイ、マリッサ・マッカーシー

製作 2014年 アメリカ

上映時間 102分

予告編映像はこちら

[「ヴィンセントが教えてくれたこと」予告編](#)

黒衣の刺客

黒衣の刺客

2015年10月2日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

たまには敷居の高い映画もいかがですか？

ごめんなさい、この作品、ストーリーについてはサッパリ分からなかったです。えっ、これでカンヌ映画祭監督賞なの？ 一般ピープルな僕では、あまりに敷居が高い作品だったかしらん？

まあ、でも頑張って感想書いてみますね。

際立ってたのは、映像の美しさ、そして監督のセンスの良さ、なんですね。

アート系の映画を見慣れてる人にとってはいいかもしれないです。

いにしえの中国、その国土の美しい風景。そして時代劇としての最大の魅力である、舞台装置と衣装の華麗さはさすがです。日本や中国など、永い歴史を持つ国は、やはりその文化の奥深さを感じさせてくれますね。

カメラの前に覆われた、薄いヴェール、絹織物のような質感、それを通して人物と舞台セットが映されます。

人物の隣には燭台があり、ろうそくの火が絹織物のヴェールを通して、

「ゆらっ、ゆらっ」

とするとところなど、なんとも雰囲気がいいんですね。

だから、僕としては、この作品、意外なほど、不満はなかったんです。

上映中は結構、楽しませてもらいました。

ストーリー分かんなくても「まあ、そんなことはイイや」って思わせてくれるだけの美しい絵作り、監督の絵心に説得力があるんですよ。

この映画のいいところはそこなんですよ。

「さすが」って感心してました。

そんで、映画館から自宅へ帰って、改めて、本作のオフィシャルサイトを見てみました。

ここで、ようやく、「ああ、そういうストーリーだったのね」と納得。

物語は現在の中国の唐時代が舞台になってます。

隠娘（インニャンと読むらしい。演じるのは女優のスー・チーさん）は、13年間、親元を離れて、道士に預けられていました。

この道士というのは、日本で言えば、まあ、お坊さまということですかね。辞書で調べると、道教の修行を納めた専門家らしいです。道教の儀式なんかも執り行います。

さて、隠娘は13年預けられていた間に、剣術や武術を叩き込まれ、なんと親が望みもしない、暗殺者、女刺客として育てられるのです。

さて、時代背景なんですけど、もともと朝廷の家来だった軍事組織が、やがてその武力にモノを言わせて、勝手にある地域を治め出すんですな。日本で言えば、平安時代に起こった武士勢力の台

頭ですね。どこの国もやっぱり、人間、やることは同じなんですね。

やはり地位や権力、金と名声という「欲」が人間を突き動かすのです。

で、物語の舞台となる地域一帯を治める人物。これが暴君と言われる田季安（ティエン・ジアン／演じるのはチェン・チェン）

女刺客、隠娘のターゲットはこの田季安です。ところが、もともと隠娘の許婚はなんと田季安だったのです。田季安を仕留めにかかる隠娘なんですけど、どうしても、もと許婚の相手にトドメを刺すことができない。

刺客として育てられ、「殺す相手に情けは要らない」と体に染み込ませてきたはずなのに。なぜか自分の存在そのものに、疑問を抱き始める隠娘。

そんなとき彼女は日本からの遣唐使で、鏡磨きを仕事とする青年（妻夫木聡）と出会うのです……。

この作品、オープニングシーンでの、白樺林の中に佇む隠娘を映し出したときから、アート系に振った映画だよな、っと直感しましたが。まさか、ここまで凝った絵を作ってくるとは思いませんでした。特に、険しくそびえ立つ中国の山の頂。そこに立つ隠娘と武術の女性師匠のシーン

。息を呑みましたよ。

カメラは遠くから二人を狙います。足元から霧が立ち込めてくる。そしてセリフ。その直後、圧倒的な量の霧が二人を山ごと飲み込んでしまうのです。

まるで、これは黒澤映画。

「あの雲、邪魔だ」で、撮影現場は天気待ち。

「あの家、邪魔だなあ」で、映画に関係のない人が住んでる家を、本当に取り壊しちゃう。住人には映画のために引越してもらおう。そんな数々の黒澤伝説がありますが、 Hou・シャオシェン監督も、やっぱり、こだわってますねえ～。

きっとこのワンシーンを撮るために、どれだけのスタッフが、どれだけ「霧待ち」をしたのか？

あるいは山の麓にフタッフを待機させ、低く”たゆたう”霧を巨大なファンで山の頂上へ、送り込んだのでしょうか？

だったら、その巨大ファンは、いったい何個用意したんだろうか？ といろんな想像ができてしまうのです。

まあ、本作は見る人を選ぶのは確かです。鑑賞するにはかなりハードル高い作品なんですけど、映画マニア、Hou・シャオシェン監督ファンの方なら、楽しめるんじゃないでしょうか。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

- 物語 ☆
- 配役 ☆☆☆☆
- 演出 ☆☆☆☆
- 美術 ☆☆☆☆
- 音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ホウ・シャオシェン

主演 スー・チー、チャン・チェン、妻夫木聡

製作 2015年 台湾、中国、香港、フランス合作

上映時間 108分

予告編映像はこちら

[「黒衣の刺客」予告編](#)

夏をゆく人々

2015年10月8日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

100%混じりっ気なし、ピュアなジェルソミーナ

カンヌ映画祭グランプリという言葉につられて鑑賞。正直、う～ん、ビミョーですな～、これは。

普通、映画祭で賞を取る作品というのは、二種類あると思います。

①作品に圧倒的な力があること。

②いままで、誰も思いつかなかった、トンがったアート作品。

①に関して言えば、多くの観客が納得、感動できる作品であり、多くの人が理解できる、最大公約数でもあり、かつまた、観る人の魂の、深あ～い部分にまで作品のメッセージが届く。そういうあらゆる要素を兼ね備えた作品を、僕たちは平べったく「傑作」と呼ぶのですね。

②に関して言えば、まあ、ハッキリ言って「わかる奴だけ付いてこい」という監督の意思表示が極めて強い作品が多いですね。

もう、ここまでくると、ほとんど前衛芸術。われわれはスクリーンで何を見せられてるのか？ さっぱり分かん？！ というケースが多いです。

だけど、そういう作品の持つ圧倒的な美的センス、強烈な個性、アクの強さ。それがツボにハマった人には、もう最強な作品になりますね。その最たる例が、ルキノ・ヴィスコンティ監督の「ヴェニスに死す」などのアート系映画。

さて、本作はこれら①と②どっちに振った映画なんでしょう？

あくまで僕個人の印象としては「どっちつかず」なんですね。

まあ、ストーリーはちゃんとしてますしね。



主人公ジェルソミーナの一家はイタリア、トスカーナ地方の田舎で、養蜂業を営んでいます。お父さんは性格も天然なら、作る蜂蜜も天然。混じりっ気なしの蜂蜜にこだわっている、ちょっと頑固な人です。商売っ気があまりなく、近所に住む、商売上手な畜産業の親父さんとは好対照です。

ある日、この村に、テレビ番組のロケーション・クルーがやってきます。

番組はイタリアの地方を巡って、いろんな特産品を紹介し、一回ごとにその土地のチャンピオンを決めようというもの。もちろん賞金もあります。

ちょうど、ジェルソミーナの家には、行政の方から、蜂蜜の製造施設を衛生面に考慮してリフォームするように、という勧告が来ておりました。リフォームには、かなりのお金がかかる。そこでジェルソミーナは、父親には内緒で、こっそり、このバラエティ番組への申し込みをしてしまうのですが.....。

お話としては難解ではなく、ずいぶん分かりやすい。ならば、圧倒的な感動や、あるいは、とてつもない才能を感じさせてくれる映像美、はたまた、新たなる表現の地平線を切り開く、なあって、大げさですが、そういうところが、あるか？ といえば、これがイマイチなんですね。ただ、本作のオフィシャルサイトを見てみると、監督は、まだ本作が二作目。新進気鋭の女性監督さんなんですね。

う〜ん、俄然応援したくなったぞ。

ええ加減なもんですな、観客というのは。

でもね。まだ若い監督さんが、これから、いろんな映画を作れる、そういうチャンスや、自由な創作活動を絶対に応援してあげるべきだと思います。

本作では、イタリア、トスカーナ州、その海辺の風景をバックに、古代の遺跡跡で収録が行われるテレビ番組のシーンがあります。

番組のヒロイン、司会進行役がモニカ・ベルッチさん。

先日観た「サイの季節」では、リアルタッチで、シリアス。政治色も強く反映され、かなり衝撃のシーンの連続でした。

その女優さんが、本作では、低俗極まりないというか、サイケデリックというか、アホみたいなゴテゴテ、キラッキラの被り物付き衣装で登場するというのは、なんとも面白い趣向です。そんな役をOKしたのは、経験豊富なモニカ・ベルッチという女優が、この若い監督さんを盛り立てよう、としているからでしょう。それは父親役の俳優さんもそうでしょうし。

そして、本作のとおきのヒロイン。ジェルソミーナ役の MARIA・アレクサンドラ・ルング。撮影当時、若干11歳。



AND PRIX
VAL DE CANNES

イタリアの若き才能、ロルヴァケル監督
カンヌ映画祭グランプリ受賞

4年の第67回カンヌ国際映画祭で見事グランプリを受賞。以降、世界中の映画祭に招待され、大きな注目を浴びた彼女がいよいよ日本公開される。1981年生まれの弱冠33歳、イタリアの女性監督アリーチェ・ロルヴァケルの長編デビュー作によって、彼女はそのみずみずしく卓越した才能が高く評価され、一躍世界の新世代を代表する存在となった。

緑あふれるイタリア中部・トスカーナ州周辺の人里離れた土地で、昔ながらの方法で養蜂を営む一家の物語。ジェルソミーナは自然との共存をめざす父ヴォルフガングの独自の教育と寵愛を受け、今や父よりもミツバチに精通している。家族は自然のリズムで生きてきたが、夏、村にテレビ番組「ふしぎの国」のクルーが訪れ、一家がひとりの少年を預かった頃から、日にさまざまな出来事

と緑あふれる大地のもと、ある家族の心模様をこまやかに描いた、まったく新しい、しかしどこかノスタルジックで豊饒な作

本作でいきなり女優デビュー、しかも主役、という大抜擢。

この少女の持つ、カリスマ性。顔立ちをみてください。この人、古代ローマ帝国の彫刻が、そのまま21世紀の現代によみがえったかのような雰囲気を持っており、実に神秘的な雰囲気を持った少女です。

カンヌでグランプリをとった作品の主演女優ですよ！！

これから先、彼女は どうするんだろう？ えらいことになってきましたね。

僕としては、[「クジラの島の少女」](#) で主役を演じたケイシャ・キャッスル・ヒューズさんみたいになったらいいなあ〜。日本で言えば、子役から大人になっても活躍している、多部未華子さん、はたまた宮崎あおいさんのような……。

子役さんで成功しても、そのあと成長するにつれ、徐々に人気落ちてくる俳優さんが多いのですが、そうならないように、本人、周りとも、ぜひ見守ってあげてほしいものです。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 アリーチェ・ロールバケル

主演 マリア・アレクサンドラ・ルング、サム・ルーウィック

製作 2014年 イタリア、スイス、ドイツ合作

上映時間 111分

予告編映像はこちら

[「夏をゆく人々」予告編](#)

マイ・インターン

マイ・インターン

2015年10月30日 [ミント神戸](#) にて鑑賞

マイヤーズブランド、あなたも一着いかがですか？

ナンシー・マイヤーズ監督作品であります。もうこの人、一つのブランドを確立してますね。ヒューマンドラマ、家族、そして何よりも「恋愛もの」を描かせたら、極上の作品を生み出します。僕、個人としては「[ホリディ](#)」が大のお気に入り。

泣き虫な男性にはオススメの逸品です。

さて、本作の主人公、ジュールズ（アン・ハサウェイ）

ファッション業界で注目を浴びる、今が旬の女性社長。彼女には、仕事を理解してくれている住き夫がいて、愛する娘もいます。

最初は彼女ひとりが、自宅のキッチンで始めたネット通販。

しかし彼女には、特別な才能がありました。

これからヒットするであろう、オシャレな服を見極め、適切な批評をし、コーディネートする、という彼女オリジナルの能力です。

彼女が運営するサイトは口コミで広がり、女性たちの心をわしづかみ！

あれよあれよと言う間に、ジュールズが始めた会社は、200人以上の従業員を抱える巨大企業に成長。

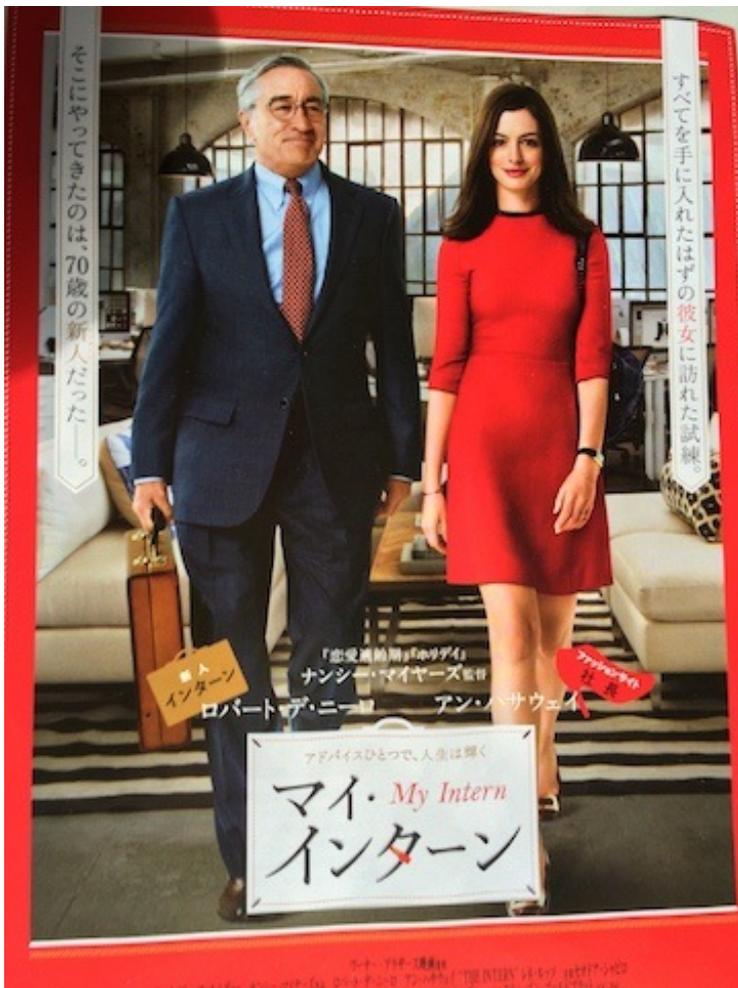
新しいことにトライし続ける企業風土もあって、この度「インターン制度」を導入しました。そこで採用した”新人”インターンは、なんと御歳70歳の男性。彼と、ファッションリーダーである、若き女性社長との、ちょっとギクシャクしたやり取りを、ユーモア溢れるタッチで描いてゆきます。

いつも思うんですが、本作に限らず、ナンシー・マイヤーズ監督のタッチは「品がよろしい」の一言に尽きると思います。

映画作品の中に、不必要で過剰な「エロ」とか「グロ」を、持ち込まないのです。本作のストーリーの流れでも、実はもっと「刺激的」な表現にできるシーンがいくつもあるんです。でも、あえて、そういう過剰演出は一切やらないんですね。

本作では、女性社長を演じる、アン・ハサウェイのファッションに注目です。カジュアルだけど、上質さを感じる素材の良さとデザイン。更に、彼女の「着こなし」をより引き立たせるのが、高齢者インターン、ベン（ロバート・デ・ニーロ）の「大人のおしゃれ」なんですね。

まさに、寸分の間もありません。



ビシッとキメた、ネクタイとスーツのコーディネート。トラッドで申し分なし。こうなると、映画の中に出てくる小物たちも気になる。ベンが持っているアタッシュケースや、手帳、筆記具の類に至るまで、かなりこだわり抜いたものを使っています。しかも、それらにあえて執着を見せないそぶりを見せるのが、ベンの「オ・ト・ナ」の所作なんですね。

いい感じに年齢とキャリアを重ねてきた、ステキな高齢者の見本のような人物。これはやはり、ロバート・デ・ニーロを起用した、キャストिंगの勝利でしょうね。

そんな、“新人”のベンは、数十歳年下の“ボス”であるジュールズに、実に献身的に仕えます。

その姿は、どこか中世の騎士道のような雰囲気さえあります。

日本には、そのむかし「滅私奉公」という言葉がありました。

ベンは自分の立場を、むしろ楽しんでる雰囲気さえあるのです。

さて、ジュールズが作った会社は急成長しました。

急成長した会社にありがちなこと。経営体制が整わないのです。

そこで、外部からCEOを招いて、経営を健全化させよう、という動きになります。その時、CEO候補と社長であるジュールズが面談をする運びになるのです。

ベンが社長付きの運転手を任されています。

社長ジュールズは面接のため、ビルが運転する車から降り立ちます。

目の前には、見上げるようにそびえ立つ巨大ビル。

この巨大ビルの一室にCEO候補者のオフィスがある。

もしかすると、今日の相手は、海千山千のやり手経営者で、いくつも会社を買っては売り抜けて、大儲けをしているかもしれない。まあ、アメリカの企業社会ではよくある話。（プリティ・ウ

ーマンのリチャード・ギアが演じた青年実業家がまさにこのタイプでしたね)

ー「プリティウーマン」予告編ー

そんな相手と今から面談です。彼女はジャケットの襟をただし、気合を入れて巨大ビルに立ち向かいます。

ーカットー

次のシーンは巨大ビルのエントランスから出てくるジュールズ。

ほとんど虚脱状態。倒れこむように、お抱え運転手ベンが待つ車の中へ。

彼女が放つ一言。

「あんな奴ダメ」

これで、この話はボツ。

あの巨大ビルの一室でいかなる会話がなされたのか？ それには一切触れない。ジュールズのリアクションだけで、どんな人物と会ったのか？ どんな会話があったのか？を観客に想像させる

。

このシーン、金と欲にまみれたCEO狙いの男どもを「エグい」感じで描くこともできる訳です。しかし、そういう風には描かないんです。まあ、ここらあたりが、ナンシー・マイヤーズブランドのストーリー展開なんですか。物語の中に、圧倒的な悪役というものが、ほぼ出てこないんですね。

多忙を極める中、会社経営と家庭を両立させようと、懸命に働く一人の女性、ジュールズの姿。それをアン・ハサウェイという魅力的な女優が演じることによって、本作は多くの女性たちの共感を得るだろうと思います。

『プラダを着た悪魔』の続編が最高の形で実現したとも言いたくなる作品。——FRaU 8月号



すべての女性を応援する、感動のデトックスムービー
あの『プラダを着た悪魔』のアン・ハサウェイが、
ニューヨークのファッションサイトの社長に!

蛇足ながら、定年でリタイアした人物を、日本の世の中や、企業、社会は、なぜもっと活用しないのでしょうか？

本作でのベンは、リタイアしたあと、生活に困らないほどの資産を持ち、悠々自適の生活を送っていました。ただ、毎日の太極拳トレーニングや、その他の文化教室、そして、年中行事のようにある「お葬式」への参列。

「ああ、また、仲間が先に逝ったか……」

そんなつぶやきを漏らす毎日。ベンにはそれが嫌だったのです。

自分もまだ何か、世の中の役に立てるかもしれない。

「Facebook」とか「USB接続」なんてハイテク関連の単語はさっぱりわからない。でもまだ、誰かのために役立てるかもしれない。なにより、世の中から、まだ自分は必要とされていたい……

日本でも、もちろんこういった高齢者は、それこそゴマンといることでしょう。

実は高齢者というのは、様々な体験、危機をくぐり抜け、人生の経験値の高いスペシャリストであることも多いのです。

本作でベンは、社長の運転手役になりますが、彼はもともと営業畑の出身。

実は敏腕営業マンを見分ける一つのポイントがあります。

「道に詳しい」ということです。

僕もかつて20年以上営業畑を歩んできました。

ひとときわ抜きん出た営業マンに共通する、ある特徴を発見しました。

それは、彼らは車を運転していて、決して「道に迷わない」のです。

ナンシー・マイヤーズ監督が、この「道に迷わない」ベンを描いたのを見て、僕は一人膝を打って納得しておりました。

「やっぱりちゃんと調べてあるんだ」

マイヤーズ監督ぐらいになれば、敏腕営業マンの特徴を見逃すわけではないのです。

当初は高齢者であるベンと、どう付き合っているか、戸惑っていたジュールズですが、やがて彼女にとって、そして会社にとって、ベンはかけがえのない人になってゆきます。

人と企業、会社組織というものの関係。

本作は、ほとんど理想的すぎて、おとぎ話のように思われるかもしれませんが、しかし、映画を仕立てるための「布地」が「厳しい現実」という名の「素材」であったとしても、それをもとに「着心地の良い作品」をつくる自由があっていいはずです。ナンシー・マイヤーズ、ブランド映画は、どれも女性にとって着心地、抜群の逸品でしょうね。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ナンシー・マイヤーズ

主演 ロバート・デ・ニーロ、アン・ハサウェイ

製作 2015年 アメリカ

上映時間 121分

予告編映像はこちら

[「マイ・インターン」予告編](#)

ヒトラー暗殺、13分の誤算

ヒトラー暗殺、13分の誤算

2015年11月4日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

書き換えられない**13分**の「歴史」

ヒトラー暗殺をひとりで企てた、ある若き職人のお話です。

本作を手がけたオリバー・ヒルシュピーゲル監督には「[ヒトラー～最後の12日間～](#)」という秀作があります。

映画監督にとって「ヒトラー」という人類史上、類を見ない、最も有名な独裁者とその周辺は、誰しものが描いてみたい題材でしょう。

なによりヒルシュピーゲル監督にとっては、母国ドイツの「暗黒時代」「タブー」を描くわけです。

このあたり、歴史を冷静な目で淡々と見つめ、しかし、誰よりも情熱を持って「タブーである時代」を映画にする、その姿勢は評価されるべきです。

本作の舞台は戦前のドイツ。1920年代から第二次大戦末期までを描くものです。

主人公ゲオルク・エルザー（クリスティアン・フリーデル）は田舎町の出身。手に仕事をつけようと街に出て、時計職人の見習いになります。手先が器用な彼は、すぐに時計及び家具の職人として腕を上げて行きます。そんなとき、郷里から手紙が。酔っ払いの父親が、もう、手に負えなくなっただけです。そこで彼は職人道具を携えて里に戻ります。故郷に戻った彼は、人妻であるエルザと恋に落ちてしまいます。



時代はヒトラー率いるナチスが勢いをつけてきた頃。

ゲオルクの友人たちのなかに共産党員がいました。かれらはゲオルクの目の前でナチスに引きずり廻され、収容所送りになります。

ゲオルクは共産党員ではありませんでしたが、ヒトラーの強引すぎる政治に大きな危機感を抱えていました。

「このままではこの国はおかしくなる」

そんな折、1939年11月、ミュンヘンでヒトラーの演説会が開かれることを彼は知ります。会場に赴き、下見してみるゲオルク。

ヒトラーがそこに立つであろう演壇がすでにしつらえてあります。その後ろには柱があり、ナチスのシンボル、鉤十字の垂れ幕がかかっている。

ゲオルクはその柱を叩いてみました。どうやら空洞がある。

「これなら、いけるかもしれない」

彼は手に持った巻尺で、こっそり柱の寸法や奥行きを図り、メモしてゆきます。

やがて彼は、その器用な手先と時計職人のノウハウを生かして、一つの時限爆弾を作り上げました。

「あの男さえ吹き飛ばしてしまえば、この国は……。」

運命の11月8日、爆弾はゲオルクが仕掛けた時刻通りに爆発。

8人が死亡します。しかし、そのなかに、なぜかヒトラーだけはいなかったのです……。

本作は「ヒトラー～最後の12日間～」に比べ、正直、一般受けはどうか？ という内容です。

というのも、ドイツが無謀な戦争に踏み込む、その直前の時期。まさに時代のエアポケットとい
いましょうか、戦争前夜の予備知識が必要だからです。

ひとりの平凡な職人を通してみた、ドイツの「歴史のスキマ」を、本作では丁寧に描いています
。

1932年から1939年という7年間、ドイツにとっては、まさに大きな渦に飲み込まれるかのような
時代でした。

僕は以前からヒトラーとその時代に興味があり、少しばかりの予備知識がありました。

本作で描かれるワイマール共和国末期、片田舎の日常風景。

それが僕にはもう、”ビンビン”響きました。これぞ、僕が見たかった戦争直前のドイツの姿。

ゲオルクが暮らす田舎の集落には、自動車も乗り合いバスもありません。さらには集落には車を持
っている人が一人もいません。

ここが重要なんです。

実は、戦前のドイツ（1932年のデータ）で車を持っている人は、国民あたり約100人に1人程
度でした。同じ時期、アメリカでは5人に1人は車を持っていました。

ドイツという国は、当時から工業技術は優れていたものの、車の普及という点では、大変な後進
国でした。これ、意外に知られていない事実なのです。

また、世界恐慌の影響もあり、誰もが貧しかったのです。ヒトラーはそこに巧みにつけ込みま
した。

ヒトラーとナチス党が催したイベントでは、軽食が出され、ビールが飲み放題！さらには党主
催の旅行企画や、音楽会、ダンス、映画の上映会など、娯楽でいっぱい。その上さらにヒトラ
ーは、一般大衆の目の前に「美味しいニンジン」をぶら下げました。

「全ての家庭にラジオを！！」と安価なラジオを販売。

ラジオで全ての国民が、ナチスの息のかかった放送を身近に聞けるようになる。それはナチスの
プロパガンダのため、とても重要なことでした。

そして、これでもか！とヒトラーが目玉商品（政策?!）としてブチ上げたのが、あの有名な国
民車「フォルクスワーゲン」だったのです。

「労働者諸君！！自分の車を運転したければ週に5マルク貯金せよ！」

ヒトラーの掛け声に、大衆はまさに熱狂しました。

働けば、暮らしが豊かになり、ラジオが持てて、その上、夢にまで見た「マイカー」が手に
入る！！

こうして33万人の国民が、フォルクスワーゲンを買うために貯金を始めます。

ヒトラーが首相に就任した1933年以降、ドイツは目を見張るような復興を遂げて行きます。これ
は「ヒトラーの奇跡」とも呼ばれているようです。

さて、本作では湖畔で、ゲオルクを含む若者たち男女が、ギターを片手に歌を唄うシーンがあり
ます。

その曲はあきらかにアメリカから入ってきた「ジャズ」なんですね。

何気ないようですが、これも実は極めて重要な視点なんです。

さすがヒルシュペーゲル監督、と僕は思いました。

ヒトラーとナチスは、「ドイツ文化」が「汚される」ことに極めて敏感でした。音楽においてもそうです。元々のルーツを黒人音楽にもつ「ジャズ」などは「退廃的である」と軽蔑していたのです。

それでも若者たちは、いわゆる「流行り物」「カッコイイ」音楽である、「ジャズ」に夢中になります。のちに彼らは「ジャズ青年」というレッテルを貼られ、ナチスの標的になります。好きな音楽を演奏したら収容所送り！！ いかにも異常な時代であったかがうかがい知れます。



さて、ヒトラーという人物に対しては、何度も暗殺計画があったことが知られています。実に不思議なことに、ヒトラー本人はなぜか「神懸かり」とでも言える嗅覚、直感をもって、この「危機一髪」を本能的に逃れています。

極度の緊張を強いられる、国家元首であり、独裁者、そして世界を相手に戦争を始めてしまったバイエルンの伝令兵、ヒトラー。

その研ぎ澄まされた感覚から、一種の靈感、第六感、のようなものを身につけていたのかもしれませんが。

本作の主人公、ゲオルクの精緻極まる時限爆弾は、正確に時を刻みます。しかし、なぜかこの時もヒトラーは、13分早く演説を切り上げたのです。間一髪この独裁者は難を逃れます。

ゲオルクの作り上げた時限爆弾は、彼のセットした時刻通りに爆発しました。それは歯車の集まりであり、機械式のカラクリでありました。

歴史に「たられば」はありえませんが、それでもゲオルクの作った機械仕掛けは、紛れもなく歴史を変えた可能性のある歯車だったのです。

なお、参考、引用させていただいた文献は以下の通りです。

「魅惑する帝国―政治の美学化とナチズム」 田野大輔 著 名古屋大学出版会

「ナチズムとドイツ自動車工業」 西牟田 祐二 著 有斐閣

「ヒトラー権力の本質」 イアン カーショール 著 白水社

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 オリバー・ヒルシュピーゲル

主演 クリスティアン・フリーデル、カタリーナ・シュトラール

製作 2015年 ドイツ

上映時間 114分

予告編映像はこちら

[「ヒトラー暗殺、13分の誤算」予告編](#)

エール！

エール！

2015年11月16日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

ポーラの家族にエール！

映画を見終わった後、爽やかな余韻が残る作品です。

エンディングで披露される、主人公ポーラの歌声は圧巻。

彼女はフランスの田舎町の高校生です。

合唱の授業を受け持った音楽教師から、天性の歌声の素晴らしさを見出されたポーラ。

「君をパリの音楽学校へ推薦したい」

ど田舎の集落しか知らない高校生にとっては夢のような話です。

音楽学校入試のための特訓が始まります。

しかし、ポーラは今ひとつ練習に身が入りません。彼女には、一つの悩みがありました。

彼女の家族は、パパ、ママ、弟、みんな耳が聞こえず、話ができない、聾啞者なのです。健常者はポーラただ一人。

本作の冒頭、よく注目してください。一家の食卓の風景が映し出されます。

ママは料理をしている。テーブルにお皿の用意をする。

ここ、バックに音楽を入れてないんです。

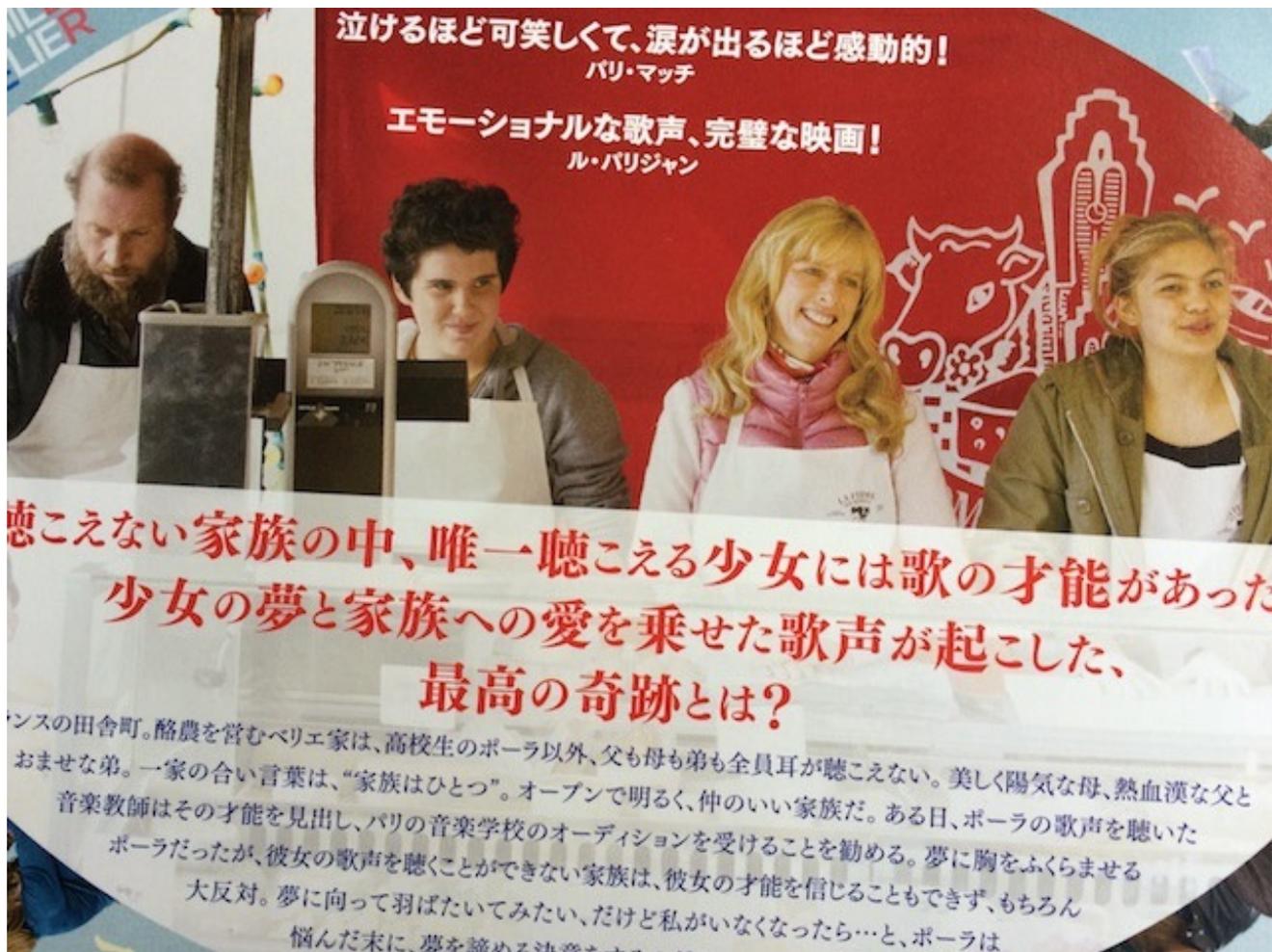
そしてママは料理をする時に、鍋を必要以上にガチャガチャ言わせる。お皿とお皿がガチャガチャぶつかる。

これらの音がわざと強調されて観客に提示されます。

ポーラは「うるさいなあ〜」とうんざりした顔をしているのですが、パパもママも全然気にしていない感じなのです。

だって、パパもママも、これらのうるさい「生活音」は、「聞こえていない」のですから。

ポーラの家族は一家総出で酪農を営んでいます。自家製チーズを作り、市場で販売する。お客さんとのやりとりは、いままでポーラの担当でした。



でも、もしポーラがパリの音楽学校へ行ってしまったら、残された家族はどうするのか？
聾啞者の家族が、健常者相手にまともに商売ができるのでしょうか？

本作は、一人の才能あふれる女子高生と、彼女を愛情たっぷりに育て上げた聾啞の家族のお話です。

障害者というモチーフを作品に持ち込んでいますが、全然暗さや湿っぽさを感じさせない。むしろ、終始コミカルなタッチで描かれています。

この辺りが監督の手腕ですね。

たくましさあふれるパパ、人一倍ポジティブで、楽道家なママ。

ちょっと根暗だけど、愛おしい弟。

みんな聾啞というハンディキャップはあるけれど、ポーラにとっては何物にも代えがたい家族です。

時にはちょっと厄介でめんどくさいけれど、何があっても家族全員で問題に立ち向かう。それがポーラの家族の特徴なんですね。

折しも、村長選挙が間近に迫ってきました。立候補者は、この集落に大企業を誘致するんだ！と威勢のいいことをアピールして廻ります。

企業誘致？！ そんなことされたら、ポーラ一家の農場だって買収されてしまうかもしれない。そこでポーラのパパはなんと村長選挙に立候補。

集落の農業、酪農を守るんだ！！ とパパはやる気満々。

ちょっと暴走気味の姿は、まるでドン・キホーテのようでもあります。

そんなパパをポーラたちも家族ぐるみで応援。

これら一連のエピソードがうまく編集され、この家族の暮らしそのものが、いとおいしいほどの「可笑しみ」の表現につながっているんですね。



また、パパ、ママ、ポーラたちは「手話」で話をします。その間、観客は字幕と俳優たちのマイムで会話の内容を知るわけですね。

この部分、要するに「無声映画」なのです。

かつてのチャップリンやキートンが活躍した時代は無声映画でした。

映画俳優は言葉を喋らなかったのです。

本作はその無声映画の時代へ、あえて先祖帰りした感じがあります。

そういえば同じくフランス映画で、第84回アカデミー賞作品賞を受賞した[「アーティスト」](#)（2011年製作）という素晴らしい無声映画がありました。

セリフが一切なくても、マイムだけで十分に映画芸術は成り立つのだ、ということ、21世紀の現代で証明した作品でありました。

本作もその流れを巧みに取り入れているのです。

なお、僕が本作で改めて確認させられたのは、フランスは農業大国なのだ、ということです。

日本であれば、家族単位の農業というと「零細」のイメージが当たり前です。

ところが、ポーラの家族農場、その規模の大きいこと。お父さんの乗るトラクターのタイヤは人の背丈より大きいのです。この大きなトラクターで広大な農場の干し草を刈り取り、牛の餌にしています。

そして、ポーラの住む家の雰囲気もまたいいですね。年代を経たであろうと思わせる石積みでつくられた、郷愁を感じさせる家なんですね。

たとえ、家族が聾啞という障害を抱えようとも、ポーラをど〜んと受け止めてくれる、暖かな家庭。その象徴のような石造りの家。

この家族だからこそ、ローラは未来へ向けて一歩を踏み出せたのでしょうか。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 エリック・ラルティゴ

主演 ルアンヌ・エメラ、カリン・ビアール、フランソワ・ダミアン

製作 2014年 フランス

上映時間 105分

予告編映像はこちら

[「エール！」予告編](#)

シャーリー&ヒンダ ウォール街を出禁になった二人

シャーリー&ヒンダ ウォール街を出禁になった2人

2015年11月27日 [元町映画館](#) にて鑑賞

お金じゃないのよ、人生は！

予告編を見たときから、このドキュメンタリー映画は、とっても楽しみにしていた。

電動車椅子に乗るおばあちゃん二人が「経済成長って必要なの？」と大学教授や、ウォール街のセレブたちに果敢に挑む、という内容である。

このおばあちゃん二人は、シャーリーが92歳、ヒンダが86歳。

いわゆる「アラナイ」アROUND 90歳という高齢だ。

アメリカ、シアトルの田舎町に住んでいる。

普段は歩くのも支障があるので、外出は電動車椅子。トコトコと踏切を渡り、スーパーマーケットに向かう。

その途中に、ホームレスの人たちが多くいる。

ニュースや新聞では、年金だけでは家賃も払えなくて、家を追い出された、とか、今は不景気だ、という。それを解決するのが「経済成長だ」と偉い人たちが言っている。

スーパーで買い物をしながら、二人は

「もっと無駄使いしろってことなの？ いらないモノをたくさん買って、それで世の中良くなるのかしら？」

と素朴な疑問を持つ。

売り場では、陳列された洋服ハンガーにぶつかったり、物を落っことしたりと、何事も若い人たちのようにスムーズに動けない。

そんな二人が「アラナイ」にして、ついに経済問題に目覚めるのである。



なお、本作では明らかに演出が入っていることは確かである。

それを「ヤラセ」と見るかどうかは、観る人それぞれの主観に任せていいと僕は思う。

以前観た[「世界の果ての通学路」](#)というドキュメンタリー映画。

世界各国の僻地の子供達が、学校に行くために、どのような困難を強いられているか、を描いた作品である。

この作品でもやはり、あきらかな「演出」があった。

しかし、それは観客に対して、意図的に事実の歪曲を狙ったものではなかったと僕は解釈している。

さて、シャーリーとヒンダは、「とりあえず、やってみることよ」と、大学に経済学の授業を聴講したい、と申し込んだ。

幸いにも聴講は許される。

教室の中。電動車椅子に乗った二人のおばあちゃん。若い学生たち。なんとも場違いで、ちょっと気まずい雰囲気の中、授業が始まる。

訊きたいことを質問するため手を挙げる、二人の年老いた聴講生。

しかし教授の対応は冷たかった。

「授業中の質問は、一切受け付けない、いやなら退室しなさい」とのこと。

電動車椅子でゆっくり教室を出て行く二人。

でも、いやな先生ばかりではない。

二人はツテを頼って、年老いた物理の教授から話を聞くことができた。

その老大家は言う。

「世の中の人たちは”指数関数”について、何も分かっていませんね」

老大家は、アメーバのたとえ話を二人に披露した。

瓶の中にアメーバを飼う。

アメーバは1分で二つに増えてゆく、とする。

さて、11時に瓶の中にアメーバをたった一つだけ入れてみる。

しかし12時、アメーバはみるみる増殖し、瓶の中から溢れて出してしまった……と仮定する。

ここで教授から質問。

「さて、瓶の中が半分になったのは何時何分でしょうか？」

シャーリーとヒンダは、ふう～むと考え込む。

やがて、

「そうねえ、たぶん11時59分でしょ」

ご名答！！

素晴らしい！！ファンタスティック！！

先生はにっこり。

「だって1分で倍になるんですもの。12時の1分前は、瓶の中は半分だったってことよ！」

続いて質問。

「じゃあ、アメーバが、このままだと瓶から溢れる！！と気がつくのは、何時何分でしょうね？」

老教授はニヤリとする。

そう、瓶に半分の時でも、まだ、誰もが気づかないのだ。残された時間は、あと、たった1分しかないのに……

これがまさに今、地球と人類が抱える問題なのだ。

先生は優しく解説してくれる。

「経済を5% “成長させ続ける”ということは、このアメーバの理屈と全く同じです。全世界の人達が、アメリカの一般市民と同じ暮らしを『維持する』には、地球があと4個か5個、必要なですよ」

そして首をすくめる。

「もっとも最近宇宙では、地球のような”いい物件”はまだ出回ってませんがね」

環境経済学の先生の話も興味深い。

先生は優しくシャーリーとヒンダに説明する。

「資源を使ったら、その資源が自然によって再生されるまでは、次の資源を使わないことです」

このシーンは数分である。その中で観客である僕が理解するには、ちょっと解説が複雑だった。

要するにこれを一言で言い表すのが「サスティナブル」という用語なのだろう。

—持続可能—

右肩上がりの成長が全てを解決するのだ、という偉い人たちがいる。勝ち組の論理は、富める者たちが、現状の富をさらに増やし続けるための、都合のいい論理だ。

この人たちはきっと、自分たちが地球をショートケーキのように切り分けて食べ続けていることを自覚していない。

こういう一握りの「特権階級」を自認している人たちが集まる、ディナーパーティーが開かれる。

このパーティーにシャーリーとヒンダ、二人のおばあちゃんが挑む。

「質問したいの！」

「成長は必要なの？」

「私たちに、分かるように教えて欲しいの！」

あまりにも素朴すぎる質問。会場に居合わせたセレブ達は失笑する。しかし、二人は真剣だ。

やがて屈強なボディーガードが現れ、二人はパーティー会場からつまみだされてしまう。

しかも脅迫めいた言葉と共にだ。

こうして二人はウォール街を「出禁」になってしまう……

というのは、実は日本語版スタッフが作ったキャッチコピーである。

2人合わせて178歳のウォール街への快進撃、はじまる!

本作は92歳のシャーリーと86歳のヒンダが自分たちだけの力で「経済成長」についての答えを探す姿を描いたドキュメンタリー作品。2人は大金持ちでも、ビジネスマンでもない、ただのシアトルに住むおばあちゃん。当初は「買い物に行くくらいしか思いつかない」とっていた2人は、大学生、大学教授、経済アナリストへ質問を繰り返すうちにどんどん成長。時にバカにされ、門前払いをくらい、脅されても「知りたい」という2人の情熱は止められない。遂には、世界経済の中心NYのウォール街へ飛び出していく。カメラは無邪気に「わからない」事を知りたいという欲求を満たしていくやんちゃな2人の姿を映す一方で、世界のどこの新聞にも書かれている、ごくありふれた話題を、私たちは深く考えることもなく、知っているつもりで見過ごしている事を気づかせてくれる。そして、好奇心旺盛で、色々な事に興味を持ち続けられるのは、人生をより豊かにしてくれるのだと教えてくれる。

監督のホルバト・ブストネスはノルウェーのアカデミー賞「アマンダアワード」で劇場ドキュメンタリー賞受賞の経験もある実力派。経済の知識がなかったって、シャーリー&ヒンダを見れば、世界の見え方がちよっと変わってくるはず。

監督:ホルバト・ブストネス 出演:シャーリー・モリソン、ヒンダ・キブニス
2013年/ノルウェー・デンマーク・イタリア/英語/カラー/DCP/82分/
原題:TWO RAGING GRANNIES/日本語字幕:田中武人/配給:S・D・P

NO ENTRY
TWO PEOPLE WHO ARE BANNED FROM WALL STREET

SHIRLEY MORRISON
シャーリー・モリソン

- 活動団体のメンバー「RAGING GRANNIES」
- 逮捕歴あり

HINDA KIPNIS
ヒンダ・キブニス

- 両親はロシア革命中アメリカに移住
- ダンサー

shirley-hinda.com

さて、二人にはよく分かっている。

もうじきお迎えがやってくる。

今の自分たちが欲しいのは、「お金」や「モノ」でもなく、憐みでもない。

彼女たちが最も欲しいのは、時間なのだ。

彼女たちは「経済成長は人を幸せにするのか？」という巨大なテーマに出会ってしまった。

それに気がついたのは残念ながら、シャーリーが92歳、ヒンダが86歳になってからのことだったのだ。

この大きな命題を解く鍵が欲しい。それにはもちろん勉強したり、人を訪ねて行ったり、何かと時間がかかる。

彼女たちはある意味、幸せな老人たちなのかもしれない。

自分達の残された時間で、取り組むべき課題を見つけている人だからだ。

その命題が解けるまで、とてもじゃないが「死んでたまるもんですか！」

と二人は奮闘する。

この二人の「怖いもの知らず」の行動に、観客は爽やかさを感じる。

なぜだろう。

おそらくそれは、彼女達が「無私」であるからだ。

彼女達は自分たちの残り時間が少ないことを知っている。

こういう人たちが、何か人のために、と覚悟を決めた時、もう、この世に怖いものなど存在しないのだ。

自分がこの世を去った時、子どもや孫達が、よりよい世界で暮らしてほしい。

よりよい世界を残したい。

そんな「無私の心」が僕たち観客の胸を打つのだ。

ちなみに本作の上映時間は90分にも満たない。82分だ。

しかし、このチャーミングな、おばあちゃん達のエネルギーと、生き続ける勇気に、十分すぎるほどの満足感をもらえる82分なのである。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ホバルト・ブストネス

主演 シャーリー・モリソン、ヒンダ・キプニス

製作 2013年 ノルウェー、デンマーク、イタリア

上映時間 82分

予告編映像はこちら

[「シャーリー&ヒンダ ウォール街を出禁になった2人」予告編](#)

顔のないヒトラーたち

顔のないヒトラー達

2015年12月3日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

「悪」は常に平凡な者を狙う。

罪を犯した個人が、自分を客観的に見つめることは、それだけで勇気がいる。

ましてや、国家ぐるみの戦争犯罪を、国家が率直に認めることは、なおさら難しい。ドイツはそれをやってのけた。

うがった見方をすれば、ドイツにはヒトラーという「独裁者」圧倒的な「ワルモノ」がいたことで、反省を早期に促す、ある種の触媒になったのではないだろうか？

ヒトラーという、人類史上類を見ない独裁者に罪を被せることで、ドイツは贖罪をしやすい土壌がすでにあったのかもしれない……と僕は、勝手にそう思い込んでいた。

ところが、本作を鑑賞してびっくりした。

本作で描かれる1950~1960年代。当時の西ドイツでは、けっして国全体で戦争犯罪を見つめようとする姿勢は、まだなかったことが伺い知れるのである。

というのも、その頃まだナチスに加担した人は存命であり、その数、なんと数千人。ごく普通の「善良な市民」として、ドイツ国内に紛れ込んでいたのである。

本作は、新米の裁判所検事ヨハンが、かつての「ナチス」党員の、アウシュヴィッツでの犯罪を徹底的に追及してゆく、というストーリーである。これは事実に基づいたセミ・ドキュメンタリーだ。



主人公の若い検察官ヨハン。彼にまわってくる事件、案件は、せいぜい交通違反の罰金をいくらにするか？ などという小さな案件ばかりだ。

なにせ彼はまだ検察官になりたて、ペーペーの新人なのだ。お役所の中にあって、最も低いヒエラルキー、ポジションしか与えられていない。

ある日、ヨハンは新聞記者グルニカから、一つの情報を知らされる。

「元ナチの親衛隊員が教員をやってるんだ、こんなこと許されていていいのか？！ そいつは元、どこにいたと思う？ あの Ауシュヴィッツだぜ」

このとき1958年、戦後すでに13年が経ち、ドイツの人々は、あの忌まわしい戦争を忘れよう、と
していたのが、本作からうかがえる。

なんと当時、ドイツの若者の多くは「アウシュヴィッツ」という象徴的な「単語」さえ知らない者が多かったらしい。

グルニカからの有力情報は、お役所の中では誰も相手にされなかった。

しかし、ヨハンは若さゆえの正義感からだろうか、この新聞記者の告発を調べてみようと思いつく。

しかし、それはまさに決して開けてはならない「パンドラの箱」「迷宮」「地獄への入り口」に他ならなかった。

ヨハンはまったくそれに気がつかずに、そのドアを開けてしまったのである。

ナチス容疑者の内偵を密かに進める、主人公ヨハン達検察チーム。

かつてのナチ党員は、ある者は学校教師として勤め、ある者は街のパン屋さんとして実直に働いている。

ニコニコしながら美味しいパンを焼く職人さん。この好人物が、まさか元ナチス黨員とは誰も思わないだろう。

しかしアウシュヴィッツ強制収容所で、幼い子供を壁に何度もぶつけ、なぶり殺しにしたのは、今パンを運んでいる、まさにこの男なのだ。

また、大量のユダヤ人をガス室に送り込んでいた男が、いまや教師として平然と勤務していたりする。

やがて、この「アウシュヴィッツ」を巡る事件は、西ドイツに住む人々、ほぼすべての人が「ナチスに加担していた疑いがある」という問題に発展してゆく。ヨハンはやがて自分の父や母でさえ「ナチスの協力者」ではなかったか？

という壁にぶち当たる。

「しょうがないじゃない、そういう時代だったんだから！！」

誰もがそういう。ヨハンの恋人さえも。

だが、ヨハンには心強い味方がいた。

職場のトップ。首席検事バウアーである。

彼はユダヤ人だった。

「しっかりしろ、ヨハン。まず被害者と加害者を特定しろ。確実な証拠を掴むのだ。明らかな犯罪行為を立証するんだ！ 私がこの職にある間にな……」

この事件を引っ掻き回すことは、西ドイツ政府にとってもタブーであったのだ。首席検事バウアーは知っている。いつ自分が左遷されるかもしれないことを。

やがてヨハン達、検察チームは、十数人の容疑者の割り出しに成功。彼らを逮捕し、告訴に踏み切る。

こうして「アウシュヴィッツ裁判」が始まるのである。



しかし、ヨハン達が最も追及したかった男が捕まらない。

それは温厚な医師である。

彼は収容所で双子を選び出す。そして数多くの、おぞましい人体実験を行った。男の名前はヨーゼフ・メンゲレ。別名「死の天使」

1963年12月に始まったこの「アウシュヴィッツ裁判」によって、国家的な犯罪行為が明らかとなる。

本作の公式サイトでは、ドイツのメルケル首相が述べた、追悼式典でのコメントが紹介されている。

「私たちドイツ人は恥の気持ちでいっぱいです。何百万人もの人々を殺害した犯罪を見て見ぬふりをしたのは、ドイツ人自身だったからです。私たちドイツ人は過去を記憶しておく『責任』があります」

時に権力の地位にあるものは、都合の悪い過去を顧みようとしない。更には、「歴史など書き換えてしまえばいい」という、信じられないほど傲慢な態度をとる者もいる。一例を挙げれば、旧日本軍の731部隊については未だに謎の部分が多い。

本作で描かれる、裁判で告訴された被告達。彼らはある種の「みせしめ」に過ぎなかったのかもしれない。

「もっと悪い奴はいる」

おそらく被告達はそう思っていただろう。事実ヨゼフ・メンゲレは、まんまと逃げおおせ、一度も逮捕されることもなく天寿を全うした。死因は水泳中の心臓発作だった。

本作のタイトルは「顔のないヒトラー達」

実は、善良な一般市民、僕も含め人の心の中には当然、すくなくならず「悪」が存在し、残虐性や、攻撃性もある。

そしてなにより、それらは「凡庸な」「普通の」人々の、こころのなかに、そして日常生活の中に、こっそりと潜んでいる、ということである。

ガス室へ送られたのは普通の市民だった。

そしてガス室へ送ったのも、また、「普通の市民」だったのである。

人々の心の中に巣食う「小さな悪魔」をうまくあやつる「扇動者」が出現した時、小さな悪魔はその本性を剥き出しにする。

「巨悪」を平然と行う、「暴力装置」へと変貌するのだ。

その本質は、意思を持たない怪物、別名「群衆」なのである。

以前僕は「[ハンナ・アーレント](#)」という作品を鑑賞した。

ナチスの戦争犯罪者アイヒマンの裁判を傍聴した、哲学者ハンナ・アーレント女史の伝記映画である。ハンナ・アーレントは裁判を傍聴しながら気づく。アイヒマンは中身が空っぽの男なのだ、自分の意思というものがまるでないのだ。

被告席に座る男は、単なるヒトラーの「イエスマン」だったのだ。

裁判を傍聴する過程で彼女はやがてひとつの「確信」を得る。

「平凡な市民」の中に巣食う「悪」こそ着目すべきだ、ということ。

それは扇動者に利用されれば、恐るべき「浸透力」「伝染力」を持って「大衆」を瞬く間に支配するのだ。

ハンナ・アーレントは、これを「悪の凡庸さ」と名付けた。

ヒトラーは平凡な男だった、という。

そのあまりの平凡さが「悪のブラックホール」へと大衆を飲み込んでいったのかもしれない。その危険は今も続いている。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ジュリオ・リッチャレツリ

主演 アレクサンダー・フェーリング、フリーデリケ・ベヒト

製作 2014年 ドイツ

上映時間 123分

予告編映像はこちら

[「顔のないヒトラー達」予告編](#)

黄金のアデーレ 名画の帰還

黄金のアデーレ 名画の帰還

2015年12月14日 [OSシネマズミント神戸](#) にて鑑賞

素材はすべて超一級品なのだが

音楽の都、芸術の都といわれるオーストリア、ウィーン。モーツァルトやベートーヴェンが住んだ街であり、ここで開かれる音楽祭には世界各国から観客が押し寄せる、世界有数の観光都市。そこが故郷なんて、日本人からすると羨ましく思いますね。

だけど、その故郷に、二度と帰りたくない、と思う人物もいるのです。

華やかなウィーン。実は影の顔があります。ウィーンがあまり表に出したくない、忌まわしい過去。

かつてナチスドイツがウィーンを併合したとき。ウィーン市民たちは、あのヒトラーを大歓迎して出迎えました。

やがてウィーンでもユダヤ人の迫害が始まります。

迫害などという生易しいものではなかった実態が、本作でも描かれます。

それはナチスがユダヤ人を「狩りの獲物」のように執拗に追回し、狩っていたのです。

本作については、正直、やや期待しすぎました。

なにせ、主演はエリザベス女王を演じたキャリアを持つ、ヘレン・ミレンですよ！

僕はヘレン・ミレンが演じた「[クイーン](#)」を観ました。

そのとき僕は、精神状態が極めて敏感になっていた時期でした。

上映中、あまりにいたたまれず、途中退席した記憶があります。

それは作品が稚拙だったからではありません。その真逆です。

作品が素晴らしすぎたのです。

ヘレン・ミレン演じる、エリザベスのあまりの孤独、疎外感、その波長が、当時、僕が置かれていた境遇と、まさに振幅がぴったり合ってしまったのです。

小さな振動でも、ある周波数の波長が合うと「共振」という現象が起こります。それは巨大な橋梁でも破壊してしまう巨大な力となります。

僕の精神の中に、まさにその「共振」が起こったのでした。

ヘレン・ミレンの演技によって僕の心が破壊されそうになったのです。

それほどすごい作品であり、名演でした。

そして本作では、作品のモチーフとして、グスタフ・クリムトの傑作と名高い「黄金のアデーレ」という肖像画が登場します。



ナチスによって強奪された、この名画の返還を求めて、主人公マリア・アルトマンがオーストリア政府を相手に訴訟を起こし、ついに名画を取り戻すという、奇跡のような本当の話がベースになっているのです。

セミドキュメンタリー仕立てなのですね。

「事実は小説より奇なり」はまさに真理です。

頭でこねくり回したストーリーより、ドキュメンタリーの方が数百倍も面白い。興味深い。これだけの「美味しい」材料をギュッと映画作品に押し込んだのが本作。

面白くない訳がない！！

とあなたも、思うでしょう？ 僕もそう思ったから観に行きました。

ところが、実際は、残念ながらイマイチでした。

告白すると、前半はうかつにも寝てしまいました。

最大の問題は、編集でしょうね。

映画の後半などは、安物の紙芝居のようにポンポンとストーリーが展開してゆきます。

ヘレン・ミレンの重厚な演技を期待したいところでしたが、これが監督の趣味の問題なのか、意外にあっさりとした味付け。

むしろ素晴らしかったのは、回想シーンにおける、若い頃の主人公。それを演じた、日本ではほとんど知られていない女優さん、タチアナ・マズラニー。

この人は良かったねえ～。ちょっと大竹しのぶさんに似ていますよ。

ナチスの追っ手が迫ってくる。夫と共に、オーストリアからアメリカへ脱出を目指します。隠れては逃げ、隠れては逃げ、あと少しで飛行場までたどり着く、その緊迫感。

ナチは、逃げるユダヤ人相手には平気でピストルを向ける、発砲する。もう、相手を人間と思っていないのです。そういうナチスの手から逃避行をする緊迫のシーン。これはよかったですよお〜。

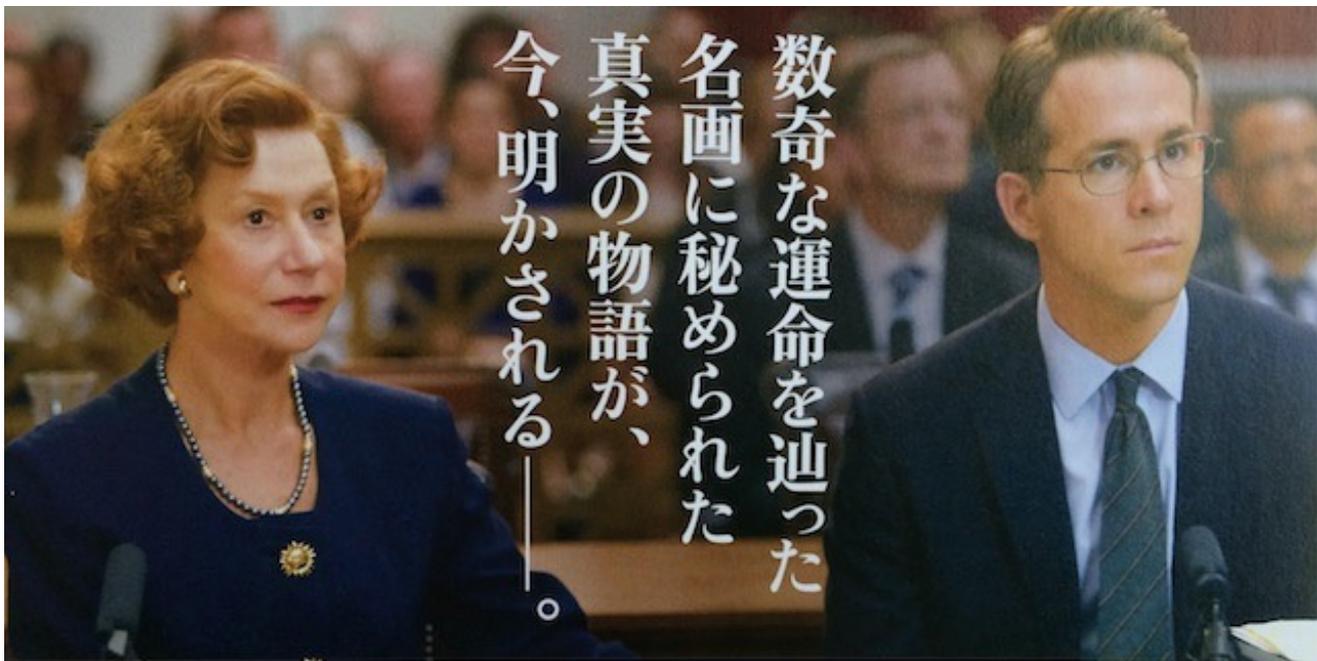
当時、ユダヤ系の人たちがどのような形で、国外へ逃れたのか？ 本当に命がけの逃避行であったことがわかります。

それから、本作において、ヘレン・ミレンが、あえて「ドイツ語訛り」の英語を話していることに、皆さん気づかれましたか？ その辺りはさすがですね。

それから、ウィーンの新聞記者役のダニエル・ブリュール。彼はもう、抜群でしたね。むしろ本作において真実味や、重厚さを与えたのは、彼の存在感が大きかった。彼のドイツ語でのセリフ回し、これが何より作品に緊迫感とリアルさを与えていて素晴らしかった。

彼の主演した [「コッホ先生と僕らの革命」](#) [「ラッシュ／プライドと友情」](#)

どちらも僕は鑑賞しました。素晴らしい俳優さんに成長していますね。



82歳の女性と駆け出し弁護士が国を訴えた!?

20世紀が終わる頃、ある裁判のニュースが世界を仰天させた。アメリカに暮らすマリア・アルトマン(82歳)が、オーストリア政府を訴えたのだ。「オーストリアのモナリザ」と称えられ、国の美術館に飾られてきたクリムトの名画(黄金のアデーレ)を、「私に返してほしい」という驚きの要求だった。伯母・アデーレの肖像画は、第二次世界大戦中、ナチスに略奪されたもので、正当な持ち主である自分のもとに戻して欲しいというのが、彼女の主張だった。共に立ち上がったのは、駆け出し弁護士のランディ。対するオーストリア政府は、真っ向から反



本作では、訴訟を起こすキーマンとなる、若いアメリカ人弁護士、この人は作曲家のシェーンベルグの子孫なんですね。ウィーン政府相手に大胆な訴訟を起こし、一度は挫折を味わうわけですが、その後、アメリカでも訴訟を起こせる、と思いつき、再度アメリカにおいて訴訟を起こします。この辺りの彼の複雑な心境、自分の出自、そして、もう一度訴訟を起こそうと決意する、そのあたりの心の揺れ動き、一つの国を相手に一個人が訴訟を起こすという、極めてレアなケースの訴訟を、「どうしてもやり抜くんだ」という決意。それが、どうして彼の心の中で生じたのか？ その動機をうまく表現できないもどかしさを感じてしまいました。このあたりがちょっと残念。さらには「黄金のアデーレ」という名画、とクリムトという絵画界の大スター、これを

もう少し掘り下げて描いても良かったのでは？ と美術ファンなら思うところなのです。その辺りに食い足りなさを感じてしまう作品でありました。

いやあ～、作品を構成する素材はすべて超一級品ばかりだったからこそ、それを生かしきれなかったのは、残念でなりませんでした。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 サイモン・カーチス

主演 ヘレン・ミレン、ライアン・レイノルズ

製作 2015年 アメリカ、イギリス合作

上映時間 109分

予告編映像はこちら

[「黄金のアデーレ 名画の帰還」予告編](#)

天皇と軍隊

2015年12月18日 [神戸アートビレッジセンター](#) にて鑑賞

身悶えしながら考える天皇制

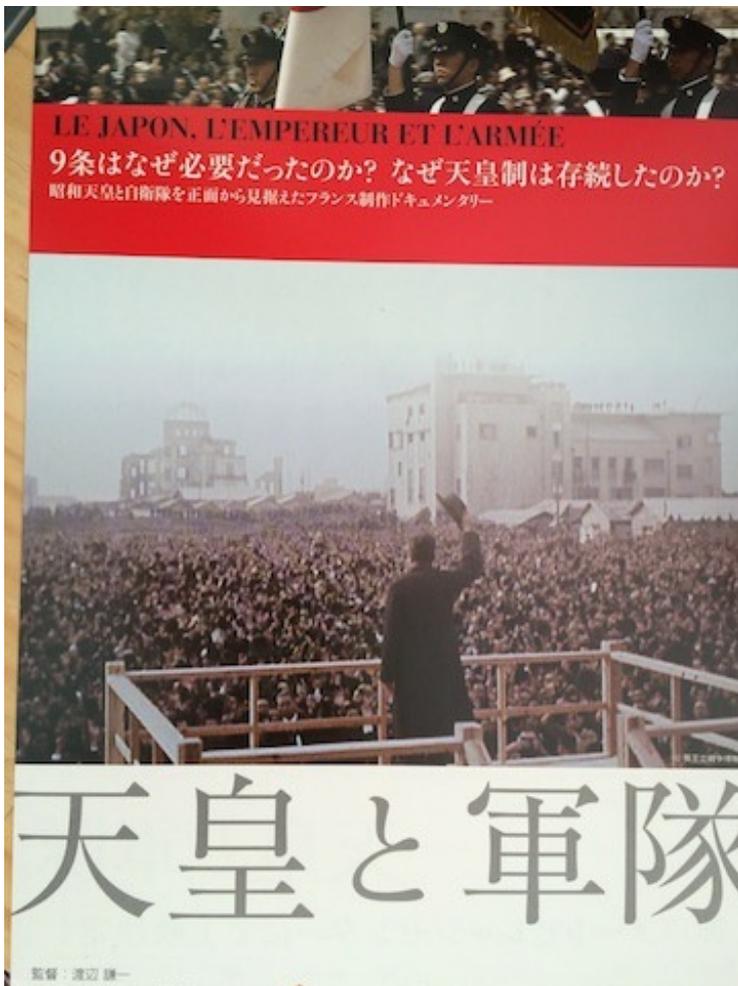
ご承知の通り、日本国憲法には表現の自由が謳われております。だからこそ、右翼も左翼も自由に好き勝手なことが言えるわけですし。そのお互いが放つ、言葉の持つ重みは「等価」つまりは、天秤秤にかけると釣り合うことが必要だと僕は考えます。

例えば左の天秤の皿に天皇についての「言論」をのせる。右に「エログロ、ナンセンスな言論」を乗っけてみる。これが釣り合う。それが表現の自由であろうと思います。「天皇」と「うんこ・おしっこ」「SEX」は同列に論じて構わないのであります。

本作はフランス制作と銘打っているわけです。

先の太平洋戦争で、直接、戦った国同士ではないので、そのあたり、第三国から客観的に天皇という存在をクローズアップできるのかな、と期待したのですが、監督は日本人でした。

やはりこれはフランス人など、外国人監督の視点で鋭く切り込んで欲しかった気がしています。本作は、太平洋戦争の終結。GHQによる占領、戦犯の逮捕、東京裁判、新憲法の成立。安保条約締結。高度経済成長へひた走る日本の姿、その中で天皇とは一体どんな存在であったのか？を描いたドキュメンタリーです。



90分の中にこれらの歴史上の重大事件を描くわけですから、それこそ教科書的にならざるをえないわけですね。一つ一つの出来事自体が、それこそ2時間あっても描き足りないぐらいの「歴史の重み」をもっております。

その歴史の真っ只中を生きた元特攻隊員でもある、田英夫氏の言葉。また、新憲法の草案を七日間で作れと厳命された、元GHQ職員の女性の証言。様々な立場にいた人たちにとって、自分が放つ証言は、自分がかつて属していた組織の考え方や、逆にそれに対する猛烈な反発、それらが今も亡霊のようにそばに寄り添っているわけですね。かっこいい言葉で言うと「バイアス」がかかった証言になりかねない。

本作では右翼の論客である鈴木邦男氏にもインタビューを行っております。

はっきりと自身を「右である」と前提して、国のあり方や、日本特有の「天皇制」を論じることができる、数少ない論客でしょう。

その最たる人、ある意味「右のアイドル」的存在が「三島由紀夫」という存在だったと思います。本作では海外でも評価の高い三島文学、その作者が、なぜ市ヶ谷駐屯地で「花と散る」行為を行ってしまったのか？ をサラリと描いております。

かつて日本はアメリカと、無謀な戦争をやりました。ノーベル賞を受賞した日本のある科学者は言いました。

「それこそ”げんこつ一個”でやられちゃった」

それほどの惨敗でした。国力の違いを見せつけられてしまったわけです。

敗戦後の日本は、どの方向へ舵を進めるべきか？ 日本を占領したアメリカGHQ、そしてマッカーサーが着目したのが「天皇制」でした。

日本人の心の拠り所。その天皇を絞首台に吊るすのは簡単でした。

しかし、あえて天皇の首を刎ねることなく、日本の人心をまとめる「シンボル」として「活用」「利用」する価値が大いにある、と占領側は判断します。

その結果、日本国憲法には「主権は国民」にあるが、天皇はその主権を持つところの「国民の象徴」とであるとされています。



なお、本作では触れていませんが、A級戦犯の処刑された日。これは12月23日の未明でした。この日は何の日かご存知ですか？

そう、現在の天皇誕生日です。昭和天皇は、自分の長男の誕生日が来るたびに恐れおののいたでしょう。昭和天皇の誕生日ではなく、あえて未来の世代である、皇太子の誕生日にA級戦犯を処刑したこと。

「いつでもお前を吊るせたのだぞ、未来永劫、この日を忘れるな」というGHQの無言の圧力であったとおもいます。ちなみにA級戦犯の起訴日は昭和天皇の誕生日でもあります。

これはあくまで私見ですが、GHQは天皇制を叩き潰す意図を持っていた、しかし、マッカーサーの強い意志で存続することになった。少なくとも後世に、天皇制はGHQの支配下にあった、という意思表示を示したかったのではないのでしょうか？

これについて右寄りの人々は「けしからん」と腹をたてるでしょうし、だからこそ、アメリカに押し付けられた憲法を今こそ改正すべきだ！ と気炎を上げるのでしょう。

では、改正をして何をなさりたいのでしょうか？

元の「大日本帝國憲法」のような「天皇大権」を復活させるべき、ということでしょうか？

ある人々の考えは、アメリカからのしがらみから、真の独立を果たしたい。

そのための必要条件として、いざとなれば、他国と戦争ができるように法整備しておきたい。
しかし、よく考えていただきたい。

日本は資源のない国です。

日本の自衛隊ご自慢のハイテク兵器も「油」がなければ、ただのオブジェです。

それこそ、戦前の軍部を指導した人たちが唱えた

「精神力こそ無限のエネルギーである」という子供騙しな空理空論を謳い上げたいのでしょうか？

今のままでは、どう考えてもアメリカとの主従関係は断ち切る事はできないでしょう。

だから、アメリカが日本も軍事協力してくれ、と言われれば断れない。

それがいやで、アメリカと縁を切るなら、戦前の軍部のように、再び東南アジアへ進出しますか？

エネルギーひとつの問題だけでも、もう身悶えして考えなくてはなりません。

戦後の日本と天皇制、アメリカとの関係などを考える時、この東洋の辺境にある島国は、実に際どいバランス感覚で、綱渡りを行ってきたと言えるでしょう。

戦後70年の節目、この島国は今まで順調に保ってきたバランス感覚、その際どい綱渡りを行ってきた、という認識自体を失っているように思います。

この日本特有の歴史とつじつま合わせをやってきた天皇制、ないアタマをひねくりまわして、考えて、考えて、考え抜く自分の姿。ある作家は「あいまいな日本」という言葉を使いました。訳が分からない「あいまいさ」「あいまいな国」のあり方を、身悶えししながら、考えることこそ、日本人に課せられた宿命なのかもしれません。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 渡辺謙一

主演 田英夫、ジョン・ダワー、樋口陽一、小森陽一

製作 2009年 フランス

上映時間 90分

予告編映像はこちら

[「天皇と軍隊」予告編](#)

繕い裁つ人

繕い裁つ人

2015年2月16日鑑賞

お仕立てしましょう「大人のファンタジー」

上質な大人のファンタジーと言える本作。

映画の冒頭に主人公、南市江（中谷美紀）が放つ、こんなセリフがある。

「生活感出してたまるもんですか！」

これは本作の全てを象徴するセリフと言っていい。この一言にすべてが集約されている。

主人公、市江は祖母が始めたオーダーメイドの店「南洋裁店」を引き継いでいる。彼女は洋服のデザインも手掛ける。着る人の個性に合わせた「世界にただ一つの洋服」がこの店で手作りされている。

物語は、この洋服店の服に注目したデパートのバイヤー、藤井（三浦貴大）が「南洋裁店」の服を「ブランド」として売り出そうと企画するところから始まる。バイヤー藤井と、主人公、市江のやり取りを軸に、市江の交友関係、南洋裁店と、その洋服を愛してやまない客などの人間模様を描いてゆく。

兵庫県(神戸市、西宮市、川西市)で映画を仕立てました。
みなさんで応援してください!

阪神・淡路大震災から20年目の2015年1月、元気になった街が映画「繕い裁つ人」に登場します。

応援5大ポイント

1. 地元・兵庫の街が舞台!
ファッションの街、神戸市や西宮市、川西市など、街の深い歴史が愛されます!
2. 兵庫県と縁のある監督!
「しあわせのパン」の三島有紀子監督は、学生時代を兵庫県で過ごし、阪神・淡路大震災も経験。
3. しあわせを紡ぐ感動作!
あびた小さな洋服店を舞台に、大切なものにこだわって生きる主人公と、顔によって笑がる人々の絆や思いを、優しく届く心あたたまる物語。
4. 家事俳優陣の競演!
「隣の女子の一生」の中谷美紀をはじめ、注目の若手から実力派のベテラン俳優たちが競演!
5. 大人気コミックの実写化!
原作は大人の女性から圧倒的支持を得ている池田美の大人気コミック「繕い裁つ人」。最新刊6巻は、2015年1月に発売予定。

2015年
1/31(土)
順次公開

中谷美紀 主演 繕い裁つ人

市江と顔なじみのお得意様は、皆この「南洋裁店」の洋服が、大のお気に入りなのだ。

「ここの服は何十年たっても着られるからね」
歳月を重ねて、自分の体型が変わったとしても心配はいらない。
その時は、この「南洋裁店」に自分の服を持って行けばいい。
すると、市江が客の体型に合わせ、その服を仕立て直してくれるのである。
決して目先の流行を追わない。
今日、ただいまの利潤を追求しない。
丁寧な手仕事。年代物の足踏みミシンを踏む主人公、市江の後ろ姿。
そこに差し込む陽の光の美しさ。
だけど、そんな仕立て直しを丹念に行う店は、もはや絶滅寸前だ。
おなじ仕立て直しをしている、親しい同業者（伊武雅刀）は
「この店は私限りです。もう閉めようと思っています」と寂しげだ。
本作のハイライトは「夜会」と呼ばれるシーン。これが良かったなあ～。
趣味の良い、おしゃれな服でドレスアップした、ご年配の方々が、シュトラウスの「アンネンポ
ルカ」に合わせてダンスをする。
会場に飾られた花々の美しさ。弦楽アンサンブルの、ゆったりとしたリズム。
この夜会にはドレスコードと参加資格がある。
それは「南洋裁店の服を着ること」
そして「30歳以上であること」
子供達は参加できない。これは「大人の童話の時間」を楽しむ会なのである。
本作で使われる音楽はとてもいい。
だけどエンドロールで唐突に流れる平井堅の歌は、やはり「とってつけた」感じは否めないのが
残念。
本作は全編、僕の住む街、神戸、並びに兵庫県下で撮影されている。
坂道が多い神戸の街並み。古くから外国人が住む、異国情緒あふれる街「KOBE」
映画の後半で登場する古い洋館は、神戸の塩屋に建つ「グッゲンハイム邸」である。



ここは今、音楽などのイベント会場として貸し出されている。もちろん、普段の日も見学可能だ。僕も何回か通ったことがある。

板張りの床はギシっという音とともに適度に「しなり」、歩き心地も良い。この異人館を使って本作では結婚式のシーンが撮影されている。



この映画には多くの説明はいらないだろう。

ストーリーを追ってゆくタイプの作品でもない。

この作品世界に描かれる風景を、絵画のように楽しむ心の余裕があれば、本作は十分に満足できるはずである。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 三島有紀子

主演 中谷美紀、三浦貴大、片桐はいり、黒木華、伊武雅刀

製作 2015年

上映時間 104分

予告編映像はこちら

マエストロ！

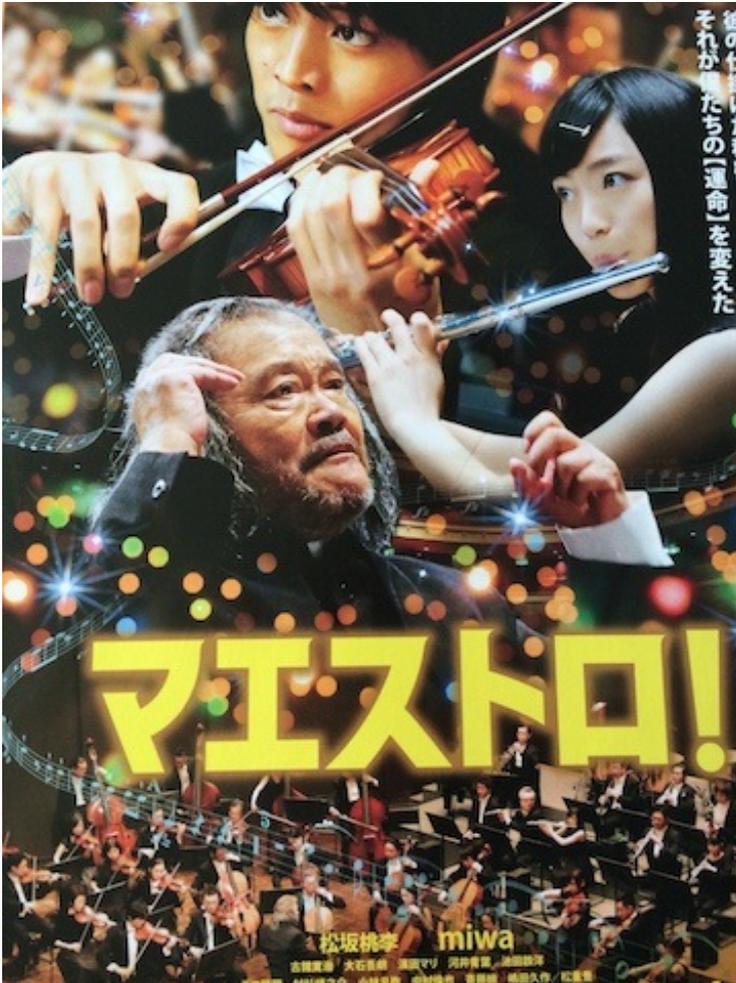
マエストロ！

2015年2月21日鑑賞

マエストロ、西田にブラヴォー

本作の見所はやはり「マエストロ」になり切った西田敏行さんの熱演でしょう。その「熱量」「エネルギー」は凄まじいものがあります。

音楽に対する情熱はだれよりも「アツい!」「しつこい!」「あきらめない!」やさぐれて、才能持て余し気味の、熱血指揮者を演じております。



本作の主人公は香坂真一（松坂桃李）彼は若くしてコンサートマスターを任されるほどの実力と才能に恵まれています。

彼にヴァイオリンと音楽の英才教育を施してくれた父はすでに他界しています。

彼の所属する中央交響楽団は資金難から解散してしまいました。

そこへ以前の仲間が集まってコンサートをしよう、と連絡が入ります。久々にかつての楽団員が集まり、練習を始めることになります。

だけどやっぱり金がない。オーケストラなんて運営しようとするば、人件費や練習場所の確保、コンサート会場の費用など、とにかくお金がかかるわけですね。

それでこの再結成された中央交響楽団の練習場所は、なんと古びた「工場」

とにかく曲がりなりに練習できる場所は確保できました。

だけど、肝心の指揮者が現れない。いぶかしむ楽団員の前に現れたのは、彼らの目の前で、さっきまでこの工場内で修理をやっていた、現場作業員のじいさん。

腰に巻いた道具入れには、大工道具のさしがねやハンマー、ドライバーなんかが入っている。

このじいさん、なにをおもったか腰の道具入れから「さしがね」を取り出し、いきなり

「ワシが天道鉄三郎や。今からお前らの指揮をする。ほな、はじめろ！！」

さしがねを指揮棒代わりに指揮を始めます。面食らう楽団員たち。

だけど、このじいさんが楽団員たちに指摘するところは、たしかにいちいち的を得ている。

「このじいさん、いったい何者なんだ？！」

楽団員は、ますます訳がわからなくなってくる。

練習を重ねるごとに、指揮者の天道じいさんの鋭い指摘と熱血指導に、反発を覚える楽団員たち

。彼らにも、プロとしての意地とプライドがあるわけですね。しかし天道じいさんは、音楽にのめり込むと、演奏者に対して一切の妥協をしない。容赦ない叱責が飛ぶ！

やがて楽団員たちの、天道じいさんへの怒りと対立は、頂点に達するのですが...

物語はやがて、この天道じいさんと、若きコンマス、香坂真一との意外な接点を紡ぎ出してゆきます。

僕はクラシック音楽を題材にした映画は大好きなので、本作も”それなりに”楽しめました。欲を言えば、もう少し説明台詞やナレーションを少なくしてもいいかもね。

また、キャストिंगにしても、松坂桃李やMiwaさんを起用した必然性は全くないと僕は思うのですが.....。

むしろ、脇を固める高齢のヴァイオリニストや、チェロ、コントラバス、それにホルンなどの金管楽器奏者たちの演技がとても印象に残りました。



映画終盤の見所、コンサート本番の音楽は、佐渡裕さん指揮のドイツ・ベルリン交響楽団が演奏しております。劇場のいい音響設備でフルオーケストラの演奏が聴けるのは嬉しいものです。さらにエンドロールに流れるピアノは辻井伸行さん。やっぱりピュアですね。

音楽を聴くのはやはり楽しいものです。

だけど、音楽という芸術を、いざ演奏する側になろうとした時、音楽という芸術はその牙を向くのです。

音楽を極めよう、プロになろう、一流の演奏をしよう、とするとき、そのあまりの壁の厚さ、高い障壁に、絶望感を抱くことさえあります。芸術はそれを志す者にとって、時に冷酷で、残酷でもあります。たった一つの音にどれだけ集中するのか？ どれだけ想いを込めるのか？

音楽を深く知りたい、もっと味わい尽くしたい、クラシック音楽の奥深さは計り知れませんね。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 小林聖太郎

主演 松坂桃李、Miwa、西田敏行

製作 2015年

上映時間 129分

[「マエストロ！」予告編](#)

深夜食堂

深夜食堂

2015年2月27日鑑賞

今夜も「めしや」で逢いましょう

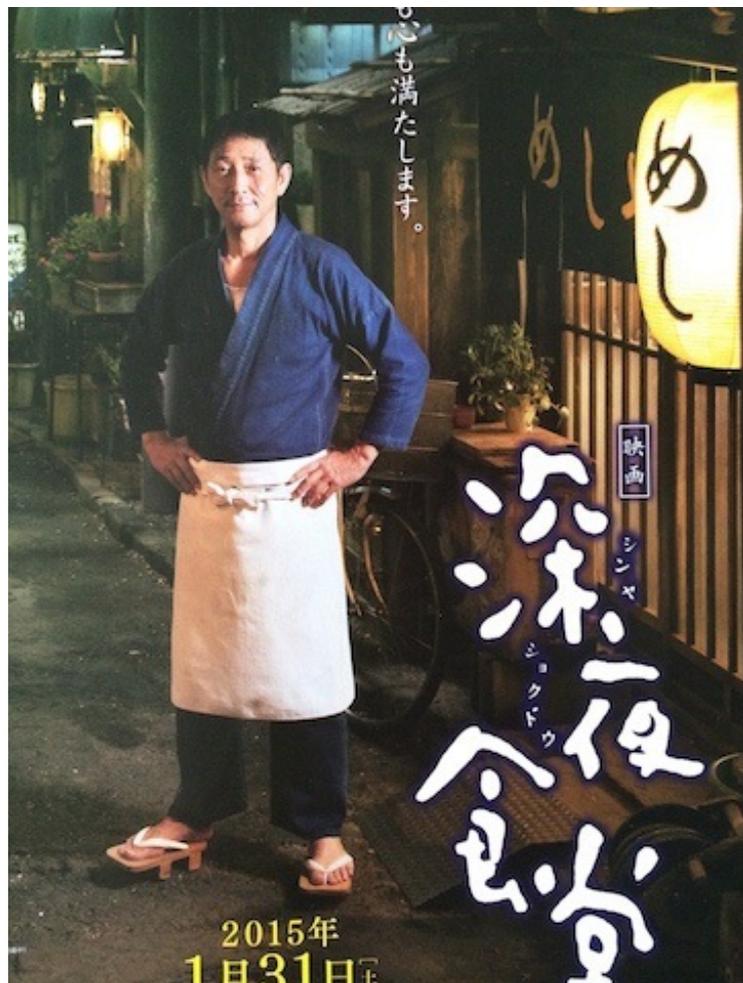
人々が家路につく夜の新宿、裏通り。なぜか人が集まる一軒の「めしや」がある、人はここを「深夜食堂」と呼ぶ。

この漫画を元ネタにしたドラマが、「深夜食堂」で”ひっそり”とテレビ放送を始めた時、なんとも嬉しかったのと同時に、「まあ、こんなマニアックな番組、ワンクールだけの放送だろう」と思い込んでいた。ところが、原作の人気とともに、テレビシリーズの人気も着実に増え、あれよ、あれよと言う間にテレビ版は第3シーズンに突入、ついに映画化まで行き着いた。

もともと「深夜食堂」は、漫画もテレビシリーズも一話完結の短編だ。映画となると2時間近くお話を紡がなくてはならない。一体どうするのか？ 本作、映画版の「深夜食堂」は決して奇をてらわなかった。

いつものように「深夜食堂」の「のれん」をくぐる感じで、ふらりと映画の世界に入って行けるよう、三つのエピソードをつなげて一つの映画としたのである。

その演出手法は、主人公である、口数の少ないマスター（小林薫）が「いつもの料理」を「いつものように」客に出すように、何の気負いもない。



食堂のカウンター越しに集まる「メンツ」も、あのおなじみのメンバーだ。

惚れっばい新宿のストリッパー、マリリン（安藤玉恵）と、その熱烈なファン、忠さん（不破万作） 地回りのヤクザ、竜さん（松重豊）とその男気に惚れ込んでいる、ゲイ歴48年のベテランおネエ、小寿々さん（綾田俊樹） いつも連れ立って、お茶漬を食べに来る「お茶漬シスターズ」の3人。それに刑事とその生意気な女性部下など、個性豊かな顔ぶれがそろろう。今回の映画化では、ここに高岡早紀、多部未華子、田中裕子、そして余貴美子が加わるという、実に豪華な顔ぶれとなった。

本作は「ナポリタン」「とろろご飯」「カレーライス」という三つのエピソードで成り立っている。それぞれ違う内容なのだが、それを繋ぐのが「深夜食堂」に客が置いていった、ある忘れ物だ。

マスターがその包みを解いてみると、それはなんと「骨壺」だった。

本作のハイライトは、パート2の「とろろご飯」だろう。

多部未華子演じる「みちる」という娘が「深夜食堂」で無銭飲食をした。大きなリュックを背負い、何日も風呂に入っていない様子。

マスターは黙って彼女に500円玉を差し出す。

「近くに銭湯があるから……、入って来なよ」

もちろん、マスターには、彼女が色々と訳ありなのは承知している。マスターは「野暮なことは言わない」男なのだ。

無愛想に見えるが、黙って、それとなく態度で気配りしてくれる。

そういうマスターの人柄が、この「めしや」に客が惹かれる理由の一つになっている。やがて「みちる」は深夜食堂に住み込みで働くようになる。そこへマスターの古い知人、塙千恵子（余貴美子）がふらりと現れる……

まさか、多部未華子と日本アカデミー賞女優の余貴美子が「深夜食堂」のカウンター越しに共演するというのは、なんとも贅沢だ。



シリーズ累計230万部発行
国民的「食」コミックの「深夜食堂」がTVドラマに続き、遂に映画化!
ワケありな客たちとマスターの味で紡ぐめしやの春夏秋冬——

ネオンきらめく繁華街の路地裏にある小さな食堂。夜も更けた頃に「めしや」と書かれた提灯に明かりが灯ることから、人は「深夜食堂」と呼ぶ。メニューは酒と豚汁定食だけだが、頼めば大抵の物なら作ってくれる。そんなマスターが出す懐かしい味を前に、客たちの悲喜こもごもな人生模様が交差する。「ビッグコミックオリジナル」(小学館)で連載中の安倍夜郎の大ヒット漫画を原作に深夜の放送ながら静かなブームを呼び、第3部まで続いている人気ドラマが待望の映画化。主演はドラマシリーズと同じく小林薫。客と絶妙な距離感を取る寡黙なマスター役を自然な佇まいで演じる。監督は映画「東京タワー オカンとボクと、時々、オトン」で日本アカデミー賞を受賞し、ドラマシリーズ「深夜食堂」も手がける松岡錠司。心も胃袋も



僕の個人的な趣味だが、この二人の演技をもっと見たかった。できればこの二人が絡むエピソードを膨らませて、一つの映画作品にして欲しかったという気がしている。

それにしても、この界隈の小さな交番の警官役、オダギリ・ジョーのすっとぼけたB級映画感覚はなんとも楽しい。

本作に登場する俳優たちは、それぞれ、大河ドラマ出演や、数々のキャリアと映画賞の受賞歴を持つ、そうそうたるメンバーと監督である。にもかかわらず、このレトロ感漂う、ちょっと怪しげな路地裏の「めしや」「深夜食堂」という物語に、面白がって集まってくるのは何故だろうか？

ここに入れば、なんのしがらみもない。

遠慮もいらぬ。重苦しい肩書きも外せる。

こういう店あったら、つい、ふらっと入っちゃうよなあ～。

「いらっしゃい、出来るもんなら、なんでも作るよ」

マスターの声を聞いただけで、もう何か物語が始まりそうな気がする。今日も深夜食堂には、いつもの無愛想なマスターが、いつもの料理を出してくれるのだ。どこにでもありそうな「めしや」だけど、どこにもない店。まさにオンリーワンの味と安らぎ。「深夜食堂」が人を惹きつけてやまない秘密と魅力がそこにある。

天見谷行人の独断と偏見による評価 (各項目☆5点満点です)

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 松岡錠司

主演 小林薫、高岡早紀、柄本時生、多部未華子

製作 2015年

上映時間 119分

[「深夜食堂」予告編](#)

くちびるに歌を

くちびるに歌を

2015年3月6日鑑賞

評価は自分でくださしょう。

え～、え～っ、なんと申しましょうか、え～っ、そのお～、見事にひっかかりました。「どハズレ」映画でした。はっきり言って時間と金の無駄でした。僕は映画を観に行く前に、予告編やYahoo映画レビュー、映画.com等での評価を確認してから観に行くようにしています。本作の「映画.com」での評価は5点満点中の4点、Yahoo映画レビューに至っては、レビュー数300以上、そのほとんどにおいて満点評価。総合得点は5点満点中、「4,45点」という「大絶賛」に近い評価でした。

予告編はまあ、そこそこだし、見に行ってみるか、という感じで観に行きました。

上映が始まると、僕のお尻はムズムズいたしました。

「はよ、帰った方がエエんとちゃうか？」

「自分の気持ちに素直になれや……」

「やっぱり途中下車が正解やで」

「こんなもん、映画とちゃうやろ」

上映時間132分のあいだ、いつ劇場を飛び出そうか？

そればかり考えておりました。

本作は長崎の五島列島の小さな高校の合唱部のお話。

合唱部の顧問の女性教師が出産のため産休に入ります。新たに赴任してきた音楽教師、柏木ユリ（新垣結衣）が新たに合唱部顧問となり、全国合唱コンクールを目指すというストーリー。



まずは疑問。

本作で描かれる高校生たちは絵に描いたような「良い子」ばかりです。

なんで、こんなにいい子ばかりなんだろう？ 気持ち悪くて「ヘド」が出るぐらいです。

いくら田舎の高校とはいえ、もうちょっとひねくれ者がいたっていい。

そもそもなんで「合唱部」はコンクールに出ようとするのか？

出る必要があるのか？

その動機が全く映画では描かれません。

だから練習を頑張る姿に、なんの感動も覚えない。

合唱に限らず、全国レベルのコンクールに出ようなんて、それこそ、青春のすべてを賭けるといって、並外れた精神力と熱意と努力が必要です。

その困難さにあえて立ち向かう、という無謀にさえ思える挑戦。その無謀さの中にこそ、「青春ドラマ」がうまれる土壌があるのですね。

であるからして、まずは高校生の全国レベルが、一体、どれだけのクオリティーの高さなのか？

そのハードルの高さを映画冒頭で提示しなくてはならない。

合唱部が乗り越えるべき障壁を設定してあげなくてはならない。

そのあまりのハードルの高さに躊躇したり、ビビったり、逃げたしたり、でもやっぱり音楽をやりたい、と思うかもしれない。そういう「悩む姿」に観るものは共感を覚えるわけですね。



もともと音楽映画はハードル高いです。本作にはそういう意識、緊張感がまるでありません。高校生と音楽を描いた作品では、矢口史靖監督の「[スウィングガールズ](#)」という格好のお手本があります。

全くやる気のない、ダメダメの落ちこぼれの高校生たちが、音楽をする楽しさにのめり込んで行き、女子高生のジャズバンドを結成してしまう、というお話。物語は終始コミカルに描かれます。どれほど、やる気のない連中か、どれほどダメな女子高生たちか？ 映画前半ではそれらが全く違和感なく描かれて行きます。最初は補修の授業がサボれるから、という理由で始めた吹奏楽部の助っ人。楽器なんて触ったことはもちろんない連中です。それでも練習するうち、ちょっとだけ吹けるようになってきた。間近に迫った野球部の試合応援で、デビュー演奏するぞおー、と盛り上がっていたら、突然、顧問のグータラ、天然女性教師から「アンタら、今まで、おつかれさん。あとは部員達に任せて」と告げられます。

集団食中毒から回復した吹奏楽部員たちが戻ってきたのです。

せっかく弾けるようになった楽器は、アッサリ取り上げられてしまいます。

主人公たち（ちなみに本作で大ブレイクした上野樹里、貫地谷しほり）は悔しくて大泣きします。

「畜生、せっかくここまで練習したのに！」

分かりますか、皆さん？

彼女らが「なぜバンドを結成しようとしたのか？」その「強烈な」動機がここで提示されるわけです。

彼女たちはやがて、仲間たちでビッグバンドを結成し、音楽にのめりこみます。

そして映画のクライマックス。矢口監督はここで彼女たちに演奏の場を与えています。しかしそれは「コンクール」ではなく「誰でも参加できる」音楽祭という場でした。

ここに矢口監督の重要なメッセージがあるのです。「スウィングガールズ」という映画は、音楽の「競技、競争、コンペティション」を目指すお話ではないのです。

「音楽の楽しさを知る」映画なのです。

だから彼女たちがラスト3曲を演奏する場は「音楽祭」なのです。

そこに点数はつきません。

ぼくはこの「スウィングガールズ」を劇場で14回も鑑賞しました。

ラスト3曲を劇場で最初に聴いた時、全身に鳥肌が立ちました。

「すごい！！」

ちなみに、本作「くちびるに歌を」では、何度も居眠りをし、あくびをし、「ああ〜」と深いため息をついて映画館を後にしました。

やはり、映画は自分の目で見て確かめた方が良さそうです。

ただ、ロケ地の風景の美しさだけが本作の救いでした。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆

配役 ☆☆☆

演出 ☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆

作品データ

監督 三木孝浩

主演 新垣結衣、木村文乃、桐谷健太

製作 2015年

上映時間 132分

予告編映像はこちら

[「くちびるに歌を」予告編](#)

仲代達矢「役者」を生きる

仲代達矢「役者」を生きる

2015年4月15日 元町映画館にて鑑賞

次の世代のために「今」を見せる

実に濃密な90分だった。日本を代表する名優、仲代達矢氏と、彼が主催する「無名塾」で、演劇を学ぶ若者たちを追った、ドキュメンタリーである。

本作は、仲代達矢氏が、セリフを覚える「作法」を映すところから始まる。仲代氏は筆ペンで台本を紙に書き写している。自分のセリフは濃い墨で描き、相手役のセリフは薄墨で描いてゆく。一言もおろそかにはしない。

黙々と筆ペンでセリフを描く。そうする事によって、自分の体に「セリフを入れてゆく」のである。

このシーン。私は涙が出そうになった。

仲代達矢氏ほどの名優が、セリフを覚えるために、コツコツと台本を書き写しているのである。

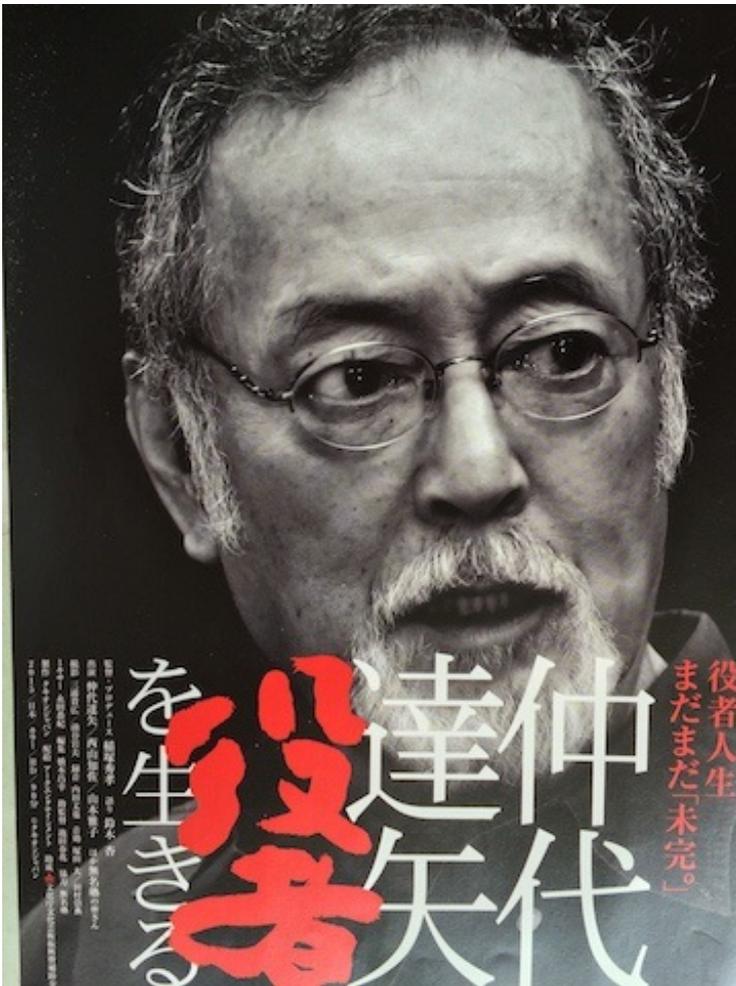
私は自分の生活を省みて、自分を恥じた。

このシーンを撮影する事を、よく許可したものだ、と感嘆した。

厳しい芸能、演劇、の世界で、役者の人生を歩んできた仲代達矢氏は、紛れもなくプロ中のプロなのだ。そんな人だからこそ、舞台に臨む準備の様子、舞台裏での影の努力は、決して見せたがらないだろう、と思っていた。

なぜなら、それは「言い訳」「弁解」に直結するからだ。

プロがプロたる所以は「結果を出す」という事に尽きる。



「結果が出せない」者はプロとは言えない。そこに「言い訳」「弁解」は許されない。野球選手ならば、結果とは、勝ち星、防御率、打率、ホームランなどという客観的な「数字」で現れる。

役者ならば、舞台を最後まで演じきるのは必要最低限のスキルだ。そのさらに上の次元。

「お金を払ってでも、この人の演技を見たい」と、客を呼んでくれる役者なのか？

下賤な言い方だが、「銭が取れてこそ」プロの役者なのである。

そこに言い訳は通用しない。舞台でしくじった、セリフを忘れた、体調不良、または怪我で公演に穴を空けたりしたら……。

「でも、私は私なりに頑張ったんです！！」という言葉が、もし、許されてしまうのならば、それは本人と観客が「しょせん、アマチュアだから」と認めてしまっていることに他ならない。（ちなみに、その最も顕著な例がAKBグループという、“ビジネスモデル”である。少女たちが”結果を出せなくても”頑張っている、そしてもがいている舞台裏、メイキングこそ、実に美味しい「商品価値」がある。それを見出した秋元康氏の先見の明には、その部分について頭がさがる）

仲代達矢氏は、本作において「頑張っている」舞台裏の自分、素の姿を、まさに晒け出した。

なぜ、それが映像化できたのだろうか？

そこには当然、本作の監督との、篤い信頼関係が築けたからだろう。

そして何より、

「自分は老いたのだ」

という重い現実を、仲代達矢氏は感じているのだ。

だから今まで、おおっぴらには見せなかった、舞台製作の裏側、その隅々まで、演劇人としての

魂を、後世に伝えたい、残しておきたい、そう思ったのだろう。

実際、仲代氏は持病の喘息があり、稽古中も酸素吸入のチューブをつけているのだ。

老いた自分に鞭打ってでも、次の世代、次の演劇人を育てていきたい、その切実な思いが伝わってくる。

本作は仲代達矢氏が惚れ込んでいる演劇作品「授業」。

その製作過程を丹念に記録してゆく。

役者 仲代達矢が
渾身の舞台「授業」を
演じきるまでを、
完全ドキュメント

役者 仲代達矢、俳優座から舞台に立ち続けてきた60年。1年の半分は舞台、残り半分は映像と決め、映画、テレビに出演してきた。1970年代、日本映画の黄金時代を生きた役者である。黒澤明(用心棒)、格三(天国と地獄)、影武者、乱、小林正樹(人間の條件、切腹)、市川崑、成瀬巳喜男、木下忠夫、勅使河原宏、岡本喜八、五社英雄、小林政広など、綺羅星のことが監督と向き合った映画150本に出演。今もなお舞台に立ち、演じ続けるエネルギーを発散する。役者 仲代達矢に迫った。

代達矢プロフィール
1932年東京生まれ。俳優座養成所卒業。俳優座に入り、「幽霊」(イブセ)で主役。29歳の時、「人間の條件」(小林正樹監督、全6部)に主演。世界大映演劇(カンヌ、ヴェネチア、ベルリン)で受賞。1975年妻恭子(やすこ)と3人子に、俳優養成のための私塾「無名塾」を立ちあげ、輩出した俳優は約200名。無名塾は10周年(2015年)を迎え、出演した映画150本、舞台の作品、行年文化功労者に選ばれた。

今こそ、
役者 仲代達矢の
真実と自己

取材開始 2012年9月
取材期間 1年3か月
収録時間 150時間

尾形水子監督プロフィール
自身と仲代氏との関わりを、尾形水子(水子)監督と共に行ったドキュメンタリー映画「授業」が、この映画の制作のきっかけとなった。

この「授業」という舞台は、仲代氏が奥様、宮崎恭子さんと共に、フランスで鑑賞し、大変感銘を受けた、思い入れのある作品であるようだ。

その奥様は1996年に亡くなられていた事は、うかつにも私は知らなかった。

もともと「無名塾」という、俳優養成の私塾を作ろう、と言い出したのは、奥様、恭子さんであったという。

本作の後半、この無名塾のオーディション映像が記録される。入塾を希望する若者たちを前に仲代氏は言う。

「ここに入ったら、三年間は演劇漬け、舞台漬けになってもらいます」

そして「プロの俳優」としてやってゆけるよう、俳優・役者の「技能・技術」を身につけてゆくのである。

仲代氏は「技」(わざ)という言葉にこだわる。それこそ、大工さんや料理人としての「職人技」を身につけるように、俳優も演技の「職人技」「テクニック」を身につける必要があると、仲代氏は考える。「無名塾」で演技の基礎、舞台芸術の基礎をしっかりと身につければ、世の中に一人で役者人生を漕ぎ出す折に、その後押しになるのではないか、そういう親心を感じるのである

。どんな「芸事」も、やはり「基礎・基本」がしっかりしているからこそ、応用が利くのである。世界的指揮者の小澤征爾氏がいい例である。小澤氏は師匠である斎藤秀雄氏から「お前は日本人として生まれたのだ。世界で日本人が勝負するのなら、まず、徹底的に基本を身につけろ」と言われ、音楽、指揮法の研鑽を重ねた。そしてヨーロッパに渡り、指揮者コンクールで優勝し、その突出した才能が、カラヤンやバーンスタインという、音楽界の「雲の上の人たち」から認められ、愛弟子となってゆくのである。

芸術の高みを目指すのであれば、相当な覚悟がいる。才能など持っていて当たり前だし、その上で、豊富な練習量と、向上意欲、さらには「運」も必要だ。

その道でスターとなる、脚光をあびる人間には「運」が欠かせないのだ。

これら総合的な「人間力」を磨く事によって現れてくるのが、世間一般の人が言う、いわゆる「オーラ」に他ならない。

仲代達矢氏は、舞台に登場する、ただそれだけで、観客から、どよめきと拍手が起きる。

紛れもない、その「オーラ」が生まれる秘密は、映画冒頭、丹念に、たんねんに、台本を書き写す、その努力の日々、一日、いちにち、にあるのだ、と気付かされるのである。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 稲塚秀孝

主演 仲代達矢、西山知佐、山本雅子、無名塾の皆さん

製作 2015年

上映時間 90分

予告編映像はこちら

[仲代達矢「役者」を生きる予告編](#)

無知の知

無知の知

2015年4月20日 [神戸アートヴィレッジセンター](#) にて鑑賞

自分で歩いて、自分で見つめる「原発」

本作を撮った石田朝也監督のスタンスがいい。

あんまり、肩肘張ってない感じ、でも好奇心は旺盛。ゲンパツとか、ホーシャノー、とかよくわかんない、でも、なんだかコワそうだし……。

そうだ、「分からないから」とにかく「分かる人」に訪ねて訊いて回ろう。てくてく自分の足で歩いてカメラ取材を続ける。

とっても謙虚なスタンス。

この人、スクリーンで自らインタビュアーとして登場するけど、本当に、ふつう～の、近所にいるお兄さん、という感じなのだ。

「問題意識を持って!!! 原発問題に!!! 鋭く!!! 切り込むのダァァ～!!!」などという気負いは全くない。だから、見ている観客も、とっても客観的に、僕ら自身が考える材料を、提供してくれている気がする。

そういえば、70年代に「アツく」「反戦だ!!」「安保反対だ!!」と叫び、機動隊と肉弾戦まで演じた、学生達のほとんどは、のちに企業戦士となって働いた。当時を語る、あるフォーク歌手は

「反戦ダァァ～!! なんて言ってりゃあ、カッコよかったからね」

ちなみに日米安全保障条約、その全文を僕は読んだ事がないし、今更、読む気もしない。

同じように、「原発」に関連する法律にどんなものがあるのか？僕は全く知らない。それを調べてわざわざ読む気も起こらない。

そんな僕が、原発に「反対」か、あるいは「賛成」か？

それを選べと言われても、思考停止に陥ってしまう。

そもそも、なぜ選択肢が二つしかないのか？

僕にはそれすらよくわからない。僕にはまるでわからない。

だから、僕はお金を払って、この映画を観てみよう、と思い立った。

それが僕の原発に関する、ささやかなスタンス、「立ち位置」である。

石田監督は何のケレン味もなく、福島の地元の人たちに話を聞く。

時には怒られ、拒絶され、それでも、黙々と映画を撮る。

福島のおばちゃんたちと話をする時も、菅直人元総理と話をする時も、相手に対する距離感是不変変わらない。それ自体が、本当に不思議な人だなあ～、と思う。

鳩山由紀夫、村山富市、細川護熙、といった、元総理大臣経験者、そうそうたる重鎮へ直接取材する。



やはり、3 : 11のまさにあの時、総理であった菅直人氏、官房長官であった枝野幸男氏へのインタビューは興味深い。

事故発生の直後、首相を補佐する、危機管理の対策室が立ち上がる。だが、その指揮に当たるトップは、経済畑の官僚であり、原発の知識は、ほぼゼロであったという。

「はあ?!」である。

そういう人選をすること自体、行政、官僚たちが危機意識を持っていなかったことを、さらけ出してしまった形だ。

当時の官邸、菅首相は、事故が起きた原発の、最前線の情報を求めている。当然の話だ。

だが、せいぜいテレビのニュースで、現状がうかがい知れる程度であったらしい。

“キレ菅”の異名を持つ菅首相は、まさに、キレて、福島の実地へ乗り込んだ。これがのちにマスコミのバッシングのネタになる。

福島原発の現場指揮所は、まさに大混乱していた。一分一秒ごとに、原子炉の状況は変化する。そこに内閣のトップが来るなんて事は、余計現場を混乱させる事は明らかである。しかし、現場のトップである吉田所長は、貴重な時間を割いて、首相に会い、現状を説明する。

東電の吉田所長から、直接説明を受けた菅総理は

「ああ、やっと、ちゃんと原発の話ができる人と会えた」とホッとしたという。

また、本作で驚かされるのは、東電の政府への対応である。

福島第一原発と東電本社には、実は、映像のホットラインがあり、リアルタイムで現場の責任者と、テレビ会議ができる体制が既に構築されていたのだ。ところが、そのテレビ会議ができるシステムが東電本社にある、という事実は、隠されていたのだ。

しかも、「もう、危ないから、原発ほったらかして、逃げます」と、東電は言い出すのである。これはのちに「何としてでも現場に残って欲しい」という政府の要請で、東電の現場スタッフは、ほとんど決死隊の覚悟で現場にとどまることになる。

さて、一旦事故が起きてしまうと、取り返しがつかない事態となる原発だが、それでも、原発を推進する人たちがいる。

石田監督はその人たちにも意見を求める。

さらには、そもそも、なんで原発を作ろうとしたのか？

歴史を巻き戻して、当時を知る政治家たちへもインタビューする。

そんななか、原発推進派の、ある人物は、福島に何度も足を運ぶ。現地で被害に遭われ、被曝をし、避難している人たちとも話をする。その人物が言うには

「実はね、原発を推進してる人も、これこそ、日本を救うんだ、日本のためになるんだって、信じてる。同じように原発を反対する人も、我こそは正義だ！ 我こそは日本のためだ、と信じてる。お互いが『日本のため』で対立してるんだよね」

誰もが、明日はもうちょっと、いい日本でありたいよね、と思う。

そのより良い暮らしをするためには、原発が必要なのか？ 要らないのか？ なぜ、「正義」同士は対立しあうのか？

この構図ってというのは、それこそ、キリスト教圏の「正義」とイスラムの「正義」が対立していることと、なんら根っこは変わらないんじゃないか？

どっちも自分こそ、「正しい」と信じ込んでいる。

僕には正義を振りかざす勇気は到底ない。

僕は、これまで平和な日本で、会社勤めをし、給料をもらい、社員旅行で海外旅行に行き、更には、一匹、五万円の鯉が泳ぐ、会員制ゴルフ倶楽部で、大名ゴルフをやったことさえある。それが経済的に可能だった要因の一つは「原子力」で作った電気を「僕自身が」使ってきたからだ。

僕たちはそういう電気、エネルギーを使ってきた。それで日本は繁栄してきた。

実は福島に住む人たちは、複雑な事情を抱えている。

福島原発は一大城下町を築き上げていた。

原子力発電のおかげで、雇用が生まれ、地域の経済は潤い、各家庭のお財布は豊かになった。

いまさら、「原発反対！！」なんて、大声出して言えた義理じゃないのだろう。地域に住む人たちは、紛れもなく、原発事故の被害者であるものの、しかし、今まで生活を支えてくれたのも、まぎれもなく「原発」だった。地域の繁栄は「原発」がもたらしてくれた。

ところで、僕が不思議に思うことがある。マスコミはなぜ、菅直人を叩いたのだろうか？ 叩くことによって、それで得をするのは誰なのか？

僕と違って「お利口さんな人たち」は、そんなこと、すぐ分かるはずだ。

お陰様で、自民党政権になり、アベノミクスのおかげで、いまや日経平均株価はついに2万円の大台（2015/4/23現在）に乗った。

もう、笑いが止まらないほど、儲かっちゃっている、一部の人たちがいるのだ。それはまさに

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」

という言葉思い出させる。

しかし、批難を続けている14万人の人たちは、今も、故郷に帰れないでいる。

地元のおっちゃん、おばちゃんたちが話しているその会話。

「シーベルト、ベクレル」という単語、単位が、当たり前のように話される。そして普通の家庭、家族だんらんのなか、「線量計」という道具が当たり前に使われる、現実の姿。

原発に関係した事で、僕には今でも忘れられない体験がある。

2012年6月23日、僕に、東京在住の知人から、一通のメールが送られてきた。

「いま、総理官邸で大変なことが起きてます。Youtubeで見てください！！」

僕は指定されたアドレスの映像をパソコンで見た。タクシーの車内から、素人が撮ったと思われるビデオだった。

タクシーは首相官邸を一周した。ビデオは一般市民たちが総理官邸をぐるりと取り囲んでいる様子を撮影していた。

手に手に、「原発反対」のプラカード。

僕はその日のテレビのニュースを片っ端から見た。翌日もニュースを見た。

しかし「首相官邸をデモ隊が取り囲んだ」という、驚くべきスクープは

「一秒も、そして一行も」

メディアで語られることはなかった。

大手マスコミが、この、市民が自発的に行ったデモを最初に報じたのは、僕がメールをもらってYoutubeを見た、その一週間後である。

どのテレビも、どの新聞も、この件については、一週間の間、固く、かたく、口を閉ざしたのだ。

僕はゾツとした。

「この国ではまだ”大本営発表”がつづいているんだ……」

政党などの組織的動員ではなく、子供を持つ、普通のお母さんや、お父さん、一般市民たちが、初めて自発的に、総理官邸をぐるりと取り囲んだ、あの驚愕の日。

なぜ、大手マスコミは一斉に口を閉じたのか？

石田監督に是非「記者クラブ」という「パンドラの箱」を開けて欲しいものだと思う。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 石田朝也

主演 枝野幸男、福山哲郎、菅直人

製作 2014年

上映時間 107分

予告編映像はこちら

[「無知の知」予告編](#)

モン」の、小手先で器用に世の中を渡って行く「ずる賢さ」とか「したたかさ」とかが、もう、ハナについてしょうがなかったのだろう。そういう若い連中に一丁、文句を言ってやろう、もっと真正面にぶつかってみる、というメッセージ性を僕は感じとってしまった。

ところで僕は以前、レンタカー屋さんで、車洗いのアルバイトをしていた時がある。店舗のスタッフは、店長を含め、皆若かった。春になると、店舗には新入社員が配属されてくる。その働きぶりを見ていたのが、入社数年目の、とある二十代女性スタッフ。休憩時間にタバコのけむりをプカァ〜とフカしながら、彼女が放った一言。

「近頃の若いモンは、全く……」

会社をリストラされた四十八歳、中年オヤジの僕は、その光景を「ふう〜む」と眺めた。

若いモンには「若いモン」同士で、世代間ギャップがあるのだ。言い出したらきりが無い。

まあ、この映画、一般受けはするんでしょうな、と僕は思う。

ただ「アウトレージ」をすでに観た人が「あれはヨかったな」とおもって本作を観ると、ちょっと肩透かしを食らうことは確かだ。

「アウトレージ」は北野武監督の映画作家としての感覚、センス、切れ味の良さ。それを感じさせてくれる作品だった。いわゆる「エッジの効いたヤクザ映画」である。

本作はそれとは全くの別ジャンル、と考えたほうがイイ。あくまで本作は「娯楽映画」であり「コメディ映画」なのである。



にもかかわらず、北野武監督は、本人も意識しないうちに、作品の中にメッセージを込めてしまう。それは映画作家としての性分というか、いわゆる「業」のようなものではないかな？ とおもってしまうのだ。

それは映画本編で描かれる、オレオレ詐欺集団の、手口のずる賢さなどに見て取れる。また、その若者たちが、どうしてそのような集団に組み込まれていったのか？ その過程は本作では描かれていない。つまり、北野武監督は、本作に登場する若者について「親近感を抱いていない」という立場を取っている。

僕が感じた北野監督の「イマドキの若いモン」への反発、というのはそういうことだ。

それに比べて、藤竜也演じる龍三や、近藤正臣、中尾彬、などのメンツが演じる、爺さんヤクザたちの生態、性分。その「義理と人情と仁義」を重んじる古いタイプのヤクザたちへの哀愁。

「昔は良かったよなあ〜」という北野監督の、ため息とつぶやきを映画の裏側に見てしまうのである。まあ、スカッと楽しめる映画ではあり、クセはなくて、万人向きです。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 北野武

主演 藤竜也、近藤正臣、中尾彬、ビートたけし

製作 2015年

上映時間 111分

予告編映像はこちら

[「龍三と七人の子分たち」予告編](#)

あん

あん

2015年5月30日 [イオンシネマ明石](#) にて鑑賞

「あ」・「ん」への飛躍と解放

シネコンで、河瀬直美監督作品を観るといのはどんなものだろう。不思議な感覚である。商業映画の対極にあるアート系、芸術作品に限りなく近い作品を作ってきた人である。シネコンの座り心地のよいシートに座って、あたりを眺めてみる。結構、おっちゃん、おばちゃんが多かった。このひとたち、きっと、本作の女流監督さんが「カンヌ国際映画祭」の審査員を務めたこともある人だなんて、きっと知らないだろうなあ～、などと思う。

いかんいかん、これも先入観だ。

いつも映画を観るときは予備知識なし。ニュートラル。

僕も、映画のことなど何もわからない、ど素人でいたい。そこらへんにいる、おっちゃんの一人として、作品そのものに接していたい。

僕はそういう風に映画を観ようと、いつも思っている。

どら焼き屋の雇われ店長、千太郎（永瀬正敏）は、ある事件から、この店のオーナー（浅田美代子）に莫大な借金がある。彼が一人で切り盛りしてきた、この小さな店舗は、ある種の「鳥かご」でもあり、彼はその中で飼い殺しにされてきた、鳴かない無愛想な鳥であるのかもしれない。

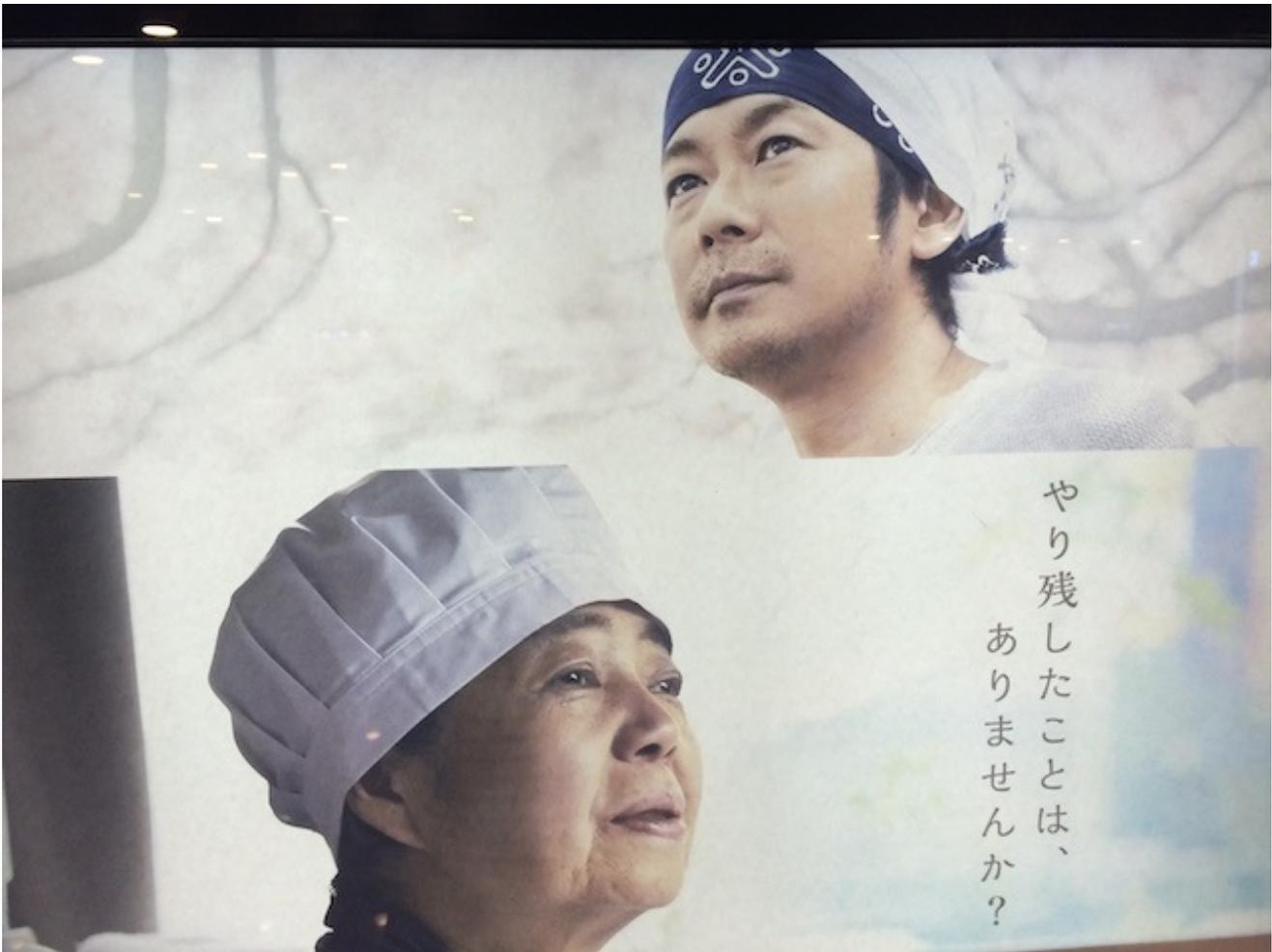
この、どら焼き屋に毎日のように立ち寄る、中学三年生のワカナ（内田伽羅）。彼女は一羽の鳥を飼っている。ワカナの母親は、この籠の鳥が狭い自宅の部屋で鳴くのをうっとおしい、とおもう。

「もう、この鳥、どうにかしなさいよ」と娘のワカナに文句を言う。

ワカナには父親がない。母親とは口もきかない。心を許せるのは、この籠の鳥だけだ。

ある日、千太郎のどら焼き屋に一人のおばあちゃん、徳江さん（樹木希林）がやってくる。

「アタシ、五十年、あんを炊いてきたの。ここで雇ってもらえないかしら」



徳江さんは、自分で炊いたあんこを千太郎に渡した。

千太郎は決してこの店を繁盛店にしようとか、行列のできる店にしてみせよう、という熱意はない。

千太郎はもともと甘党ではない。どら焼きが好きでもないんでもない。というより、そもそも彼は、どら焼きを一個まるまる食べたことすらないのだ。

店で使っている「あん」も一斗缶に入った「業務用」のあんを使っている。

千太郎と「どら焼き」との距離感については、情熱や愛情とは程遠いものがある。あくまで「雇われ店長」であり、「仕事」なのである。

オーナーに借金を返さなくては.....。

その義務感から、毎日もくもくと、女子中高生相手に、どら焼きをつくり続けているだけなのだ。

一度は徳江の申し出を断った千太郎。ただ、五十年あんこを焚き続けてきたおばあちゃん、ということがひっかかった。ためしに徳江が置いていった「あん」を指で一すくい、口の中に入れてみた。その味は、千太郎の舌に、体の奥底に、波紋のように広がる。衝撃の味わいだった。

千太郎は徳江を雇うことにした。やがて千太郎の店のどら焼きは評判を呼び、行列のできる「どら焼き専門店」となる。しかし、ある日、パタリと客足が止まった。

雇っている徳江が「ハンセン病患者」であることが、噂として広まったのだった.....。

徳江は「あん」を炊くときに小豆に向かって話しかける。

「がんばりなさいよ〜」

自分は、ずっとハンセン病患者として、隔離された専門病院で人生を過ごしてきた。外の世界と

は隔絶された空間。

そして彼女は、あんを炊くことを人生の楽しみとしてきた。

彼女にとって「あん」を炊くことは、材料である小豆との会話なのだ。

「あんたは生まれてきてよかったんだよ」

「美味しい”あん”になろうね」

徳江さんは小豆と自身へ語りかけている。

世の中から「消された存在」として生きて来たハンセン病患者、その自分の元へ、外の世界からやってきた小豆。目のまえの小豆は、誰に、どのように育てられ、どんなドラマを経て、何のいきさつで、隔離病棟にやってきたのだろうか？ そんな小豆を徳江さんは”愛おしい”と思うのだ。

「あん」という「言の葉」について。

「あ」と「ん」は日本語のひらがな表記の最初と最後の文字である。小豆を煮詰めた集合体である”あんこ”が「あん」という象徴的な二文字で表すことができる事。しかもそれが、ひらかなの最初と、最後の文字。いわば、たった二文字で、この世の全てを表現できる、という象徴的な意味。

原作者ドリアン助川氏が「あん」というタイトルを「発掘」した時の、感動と興奮はどれほどのものだっただろう？ と想像してみるのである。

ハンセン病棟で、かごの鳥のように生き続ける徳江。

どら焼き屋の小さな「鳥かごのような」店舗の中で生き続けている千太郎

そして、母子家庭という「カゴ」から、今まさに飛び立とうとする、ワカナ。

OFFICIAL SELECTION
UN CERTAIN REGARD
FESTIVAL DE CANNES

第68回カンヌ国際映画祭
「ある視点」部門
オープニングフィルム
主題歌「水彩の月」by 秦基博
5月30日全国公開

監督・脚本・河瀬直美
原作・ドリアン助川「あん」(ワカナ社刊)
日・仏・独合作
企画・制作：Cofinova Overseas
配給：Cofinova
助成：文化庁芸術振興費補助金
A FILM BY NAOMI KATO
MEDITERRANEA BOUTIQUE PRODUCTIONS / COFINOVA

永瀬正敏
内田伽羅
市原悦子

たくさん涙を越えて、
生きていく意味を問いかける――

an-movie.com

本作は「精神の解放」のお話ではないか、と感じた。

「徳江」という存在はあらゆる制約の象徴でもある。

その徳江さんの手によって、小さな、小さな粒の小豆は、この世の全てを煮詰めた物質「あ」「ん」へと高次元に飛翔するのである。その味わいは、人の心に飛躍と解放の勇気を与える。映画作りの作法について、感じたことを少し。

映画のタイトルからくる印象とは真逆と言っていい。

河瀬直美監督は観客に、あえて「甘ったるい」余韻を与えていない。

シークエンスの切り替えの潔さと厳しさが印象に残る。

こういうカット割りをする人は、きっと自分に対しても厳しいのだろう、と思う。お客さんに対してウケようとか、そんなこと全く考えていないように思えるのだ。

しかしながら本作は、紛れもなく商業映画としてのシステム、体裁をもって制作されている。河瀬監督としては珍しく原作があるし、キャスティングもプロの名だたる俳優たちを起用した。しかも、エンディングには秦基博の楽曲が使われるなど、いかにも一般の客受けを意識した印象が濃い。

公開直前には、主演の樹木希林や市原悦子までもが、珍しくテレビで番宣をおこなうなど、プロモーション活動も活発に行われている。

こういう、金のかかった商業映画は元が取れなきゃ、終わりである。

主人公の千太郎ではないが、莫大な借金を抱えて、身動き取れなくなる。

次の映画はもちろん撮れなくなるし、最悪、監督の家族は路頭に迷うことになる。

数字も取れて、内容も面白い、難しいことを易しく、そして味わい深く。そんな作品がなかなか生まれてこない。

「嗚呼……」と深いため息をつきつつも、なぜか僕は映画館に通う。「奇跡の一本」に出会えるかもしれない、という淡い期待を込めつつ。

本作はその「あん」という内容について、相当丹念に、手間暇かけて煮詰めた作品であることは、疑いようもなかった。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆
配役 ☆☆☆☆
演出 ☆☆☆☆
美術 ☆☆☆
音楽 ☆☆☆☆
総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 河瀬直美
主演 樹木希林、永瀬正敏、内田伽羅、市原悦子
製作 2015年 日本、フランス、ドイツ合作

上映時間 113分

予告編映像はこちら

[「あん」予告編](#)

トイレのピエタ

トイレのピエタ

2015年6月17日 [神戸国際松竹](#) にて鑑賞

希薄な生、濃密な死

もっと上映館が増えて欲しいと思う佳作である。

プールで泳ぐ金魚たち、そのオレンジがかった赤。一緒に泳ぐ高校生、真衣の姿。水の淡いブルー、水中撮影での残像がなんとも儚く美しい。

主人公は、ビルの窓ガラス清掃をしている青年、宏だ。アルバイトの身分だが、腕はすでにプロ級。

ぐらぐら揺れるゴンドラに乗り、高層ビルの窓ガラスを拭いてゆく。

高所恐怖症の人なら気が遠くなりそうだが

「まっ、落ちたら、死ぬだけだし……」と本人は割り切っている。

「社員になっちゃいなよ」と仕事仲間からは誘われている。

はにかんだように、「いいッスよ」と中途半端に返事する宏。

彼は美術学校の学生でもある。絵描き仲間でも、「えっ、こいつ意外に……」とおもわせる腕を持っている。だけど絵描きとして、世の中、生きて渡って行こう、という気概も覚悟もない。



宏はある日、職場で倒れた。病院で精密検査を受けてみる。

その結果を聞く日のこと。

医師からは家族と一緒に来るように言われていた。だが、郷里の父母を呼び寄せるほど、大げさなことかな、などと思ってしまったのだ。

そこで宏は、たまたま病院で居合わせた高校生、真衣に仮の妹になってくれるよう頼んだ。真衣と一緒に受けた診断結果は……

医師からは胃の悪性腫瘍と告げられる。即刻入院だ。

やがて、病気は進行し、転移する。医師からは延命治療をするのか？ それとも残りの時間を有意義に過ごすのか？ とまで言われる。彼はまだ28歳の若さなのだ。

真衣はシングルマザーの母と祖母の、三人で暮らしている。母は家事を気にかけていない。祖母は認知症だが、その世話を真衣に押し付けている。

介護が必要なおばあちゃん。彼女は嫌がるおばあちゃんをなだめては、シャワーを浴びさせる。時には「ざけんじゃねーよ、なんで女子高生のアタシが介護しなきゃなんねーんだよ！！」と暴発したくなる。でも怒りは、おばあちゃんには向けられない。

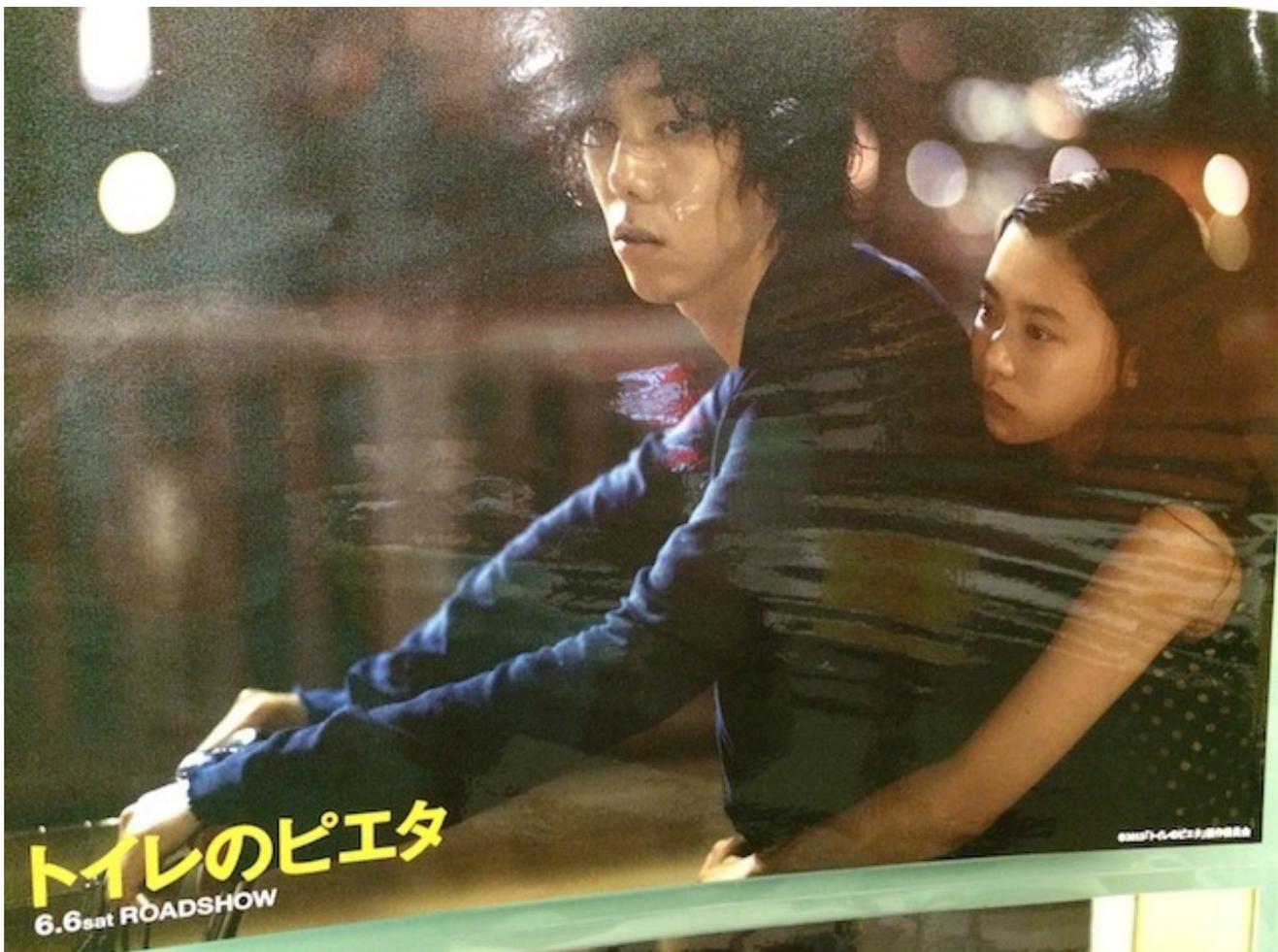
真衣はある日、夜店でたくさんの金魚を買い込み、深夜、学校のプールに放つ。水の中、群れになって泳ぐ金魚たち。そして、自分も一緒に泳ぐ真衣。溜め込んでいた様々な感情。

自由なんだよ。自分だって自由でいいんだ。真衣はそう思っているのかもしれない。

真衣は奔放であり、言いたいことをズケズケ言う。

余命いくばくもない宏に向かって「ねえ、どうやったら死ねるの？」と無邪気に尋ねる。

真衣は自分の「生」の手触りを探ろうとしているかのようだ。



本作で特筆すべきは、登場人物たちが次に何をやるのか？ 全く予想がつかないことである。

宏はやがて、病院を抜け出し、自分のアパートのトイレに壁画を描き始める。その様子をちょっとスケベな患者仲間、横田（リリー・フランキー）がビデオに撮る。

楽しそうだ。

実際、ビデオに撮られながら、宏は微笑んでいる。

ようやく「生」の手応えを感じたような宏の微笑み。

本作の元ネタはあの、手塚治虫氏の病床日記であったそう。手塚氏が自身、胃ガンで入院していた時に書き綴っていた遺稿らしい。

キャスティングも秀逸だ。つかみどころのない、今時の若者を象徴するかのような宏（野田洋一郎）。ちょっと過激でエキセントリックな行動をする真衣（杉咲花）。そして、映画に登場するだけで和んでしまうリリー・フランキーの存在感。小学生の息子を、ガンで亡くす母親を演じるのは、宮沢りえだ。しかし、その生真面目な演技は、むしろ本作の中で浮いてしまっているほどだ。

本作は料理に例えれば、「素材の良さ」にこだわり抜いた逸品であると言える。俳優という素材の存在感で、映画を”ほぼ”成立させてしまっている。

淡々としたカットが続く中、決してドラマチックに盛り上げてやろうという、監督の映画作家としての下心は微塵も感じられない。

本作に登場する人物は、それぞれ「自分の生」に対して「生きている」という実感を持ってない者達ばかりである。そういった人物像をあえて「いきいきと」演じない、ドラマチックには「描かない」ことで、映画作品を成立させる、というのは難しい事だろう。

今現在を「生きていない」と「感じられる」のは、その人が、実は生きていない、という風に「感じる」能力があるということだ。

豊かな感性を持ち合わせている裏返しでもあるのだ。

「自分はこのまま生き続けてもいいのか？」と、最近、私自身、問い続ける日々が続いていた。

そういう時期に、出会った本作のみずみずしさは、私の身体に染み入るように感じた。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 松永大司

主演 野田洋次郎、杉咲花、リリー・フランキー

製作 2015年

上映時間 120分

予告編映像はこちら

[「トイレのピエタ」予告編](#)

海街diary

2015年6月22日 [イオンシネマ明石](#)にて鑑賞

晴れ、時々、やっかいな、四姉妹

まるで小津映画を観ているんじゃないか？ と錯覚するほど、タッチが似ていますね。人物と室内、その時空間をスライスし、まるでスライドショーのように並べます。カットとカットのツナギには「動くこと」「アクション」の連続性が、敢えてないように、注意深く編集されています。

このあたり、黒澤映画なら、一つのアクションを受けて、次のアクションがあり、それがまた第三のアクションにつながってゆく、という一連のダイナミックな「うねり」、映画文法があるのですが、それとは対極にある作品、と言ってもいいと思います。だから、パッと見は、そっけない、盛り上がりがない作品とってしまうかもしれない。

また、やたらと、葬式のシーン、法事のシーンなど、辛気臭いシーンが多い作品でもあります。

このお話の舞台は鎌倉。海辺の街に暮らす姉妹のお話。

娘たちと別れ、再婚して、別の街に暮らしていた父親が亡くなります。その知らせを受けた三姉妹は、父親が移り住んだ山形へ向かいます。父親の葬儀の時、三姉妹は腹違いの妹、すず（広瀬すず）と出会いました。姉たちは、この末っ子が気に入りました。鎌倉の家で四姉妹として、一緒に暮らそうよ、ということになります。

ます。

新しく姉妹に加わった「すず」は、この海辺の家に来た時、長女、幸につぶやいたことがあります。

「ダメだよ、私のお母さん。奥さんがいる人を好きになるって……」

長女、幸は交際相手の椎名が住む部屋に通っています。実は彼には別居中の奥さんがいる。もうすぐ別れるのかなあ～。もうすでに自分が、事実上の奥さんであるかのように、振る舞ってしまう幸。そんな自分自身が、いいのか、悪いのか、よく分からない。

ダメだよ。結婚している人を好きになるなんて。

すずの漏らした言葉が胸を刺します。

やがて幸は終末ケアの部署へ行って見る気はないか、と上司から打診されます。

次女佳乃（長澤まさみ）は勤めている銀行の営業として、新たに外回りの仕事に配属されます。三女、千佳はマイペースで、姉妹の中で一番の変わり者。スポーツ洋品店に勤めています。父と別れたのは、彼女がまだ小さかった時。父との触れ合いを一番知らない千佳。ふと、末っ子のすずにたずねてみます。

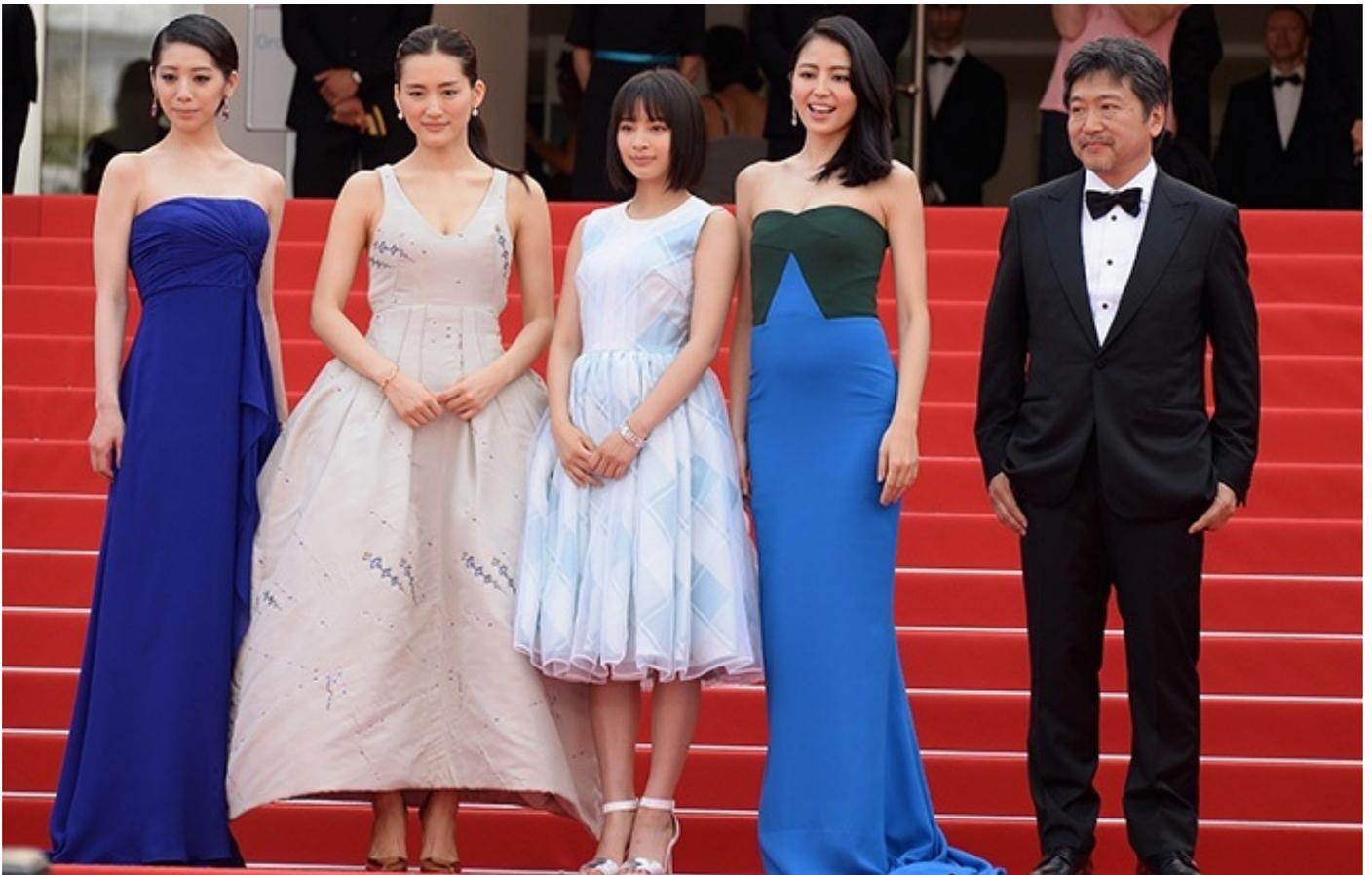
「おとうさんって、どんな人だった？」

鎌倉の姉妹が小さな頃から馴染みにしている定食屋さん「海猫食堂」、それを切り盛りする店主のおばちゃん（風吹ジュン）は、病気のため、店を畳むことになりました。ここの名物「鱈フライ」の美味しさは誰が引き継ぐのか？

丁寧に、何の関係もなく、ぱらり、ぱらりと、散りばめられてゆく、それぞれのエピソード。それらのなにげない伏線が、物語の終盤、全てが神の配剤のように結びついてきます。

そして、ここにも出没してきたか！と思わせる、リリー・フランキーの気負わない自然体の存在感。

今時、こんな小津映画を彷彿とさせる地味な演出手法。映画作品として、これは成り立つのかな？ と心配するほどですが、それを補うのがキャスティングですね。



是枝裕和監督作品では、これまで、監督にしか引き出せない、子役の自然な演技、演出術や、「そして父になる」では、福山雅治をキャスティングするなど、ある種、どの作品にも「飛び道具」あるいは「目玉商品」的な存在がありました。

本作では今までの是枝作品の中で、最高に華やかな「飛び道具」「目玉商品」を取り揃えたと言えるでしょう。

綾瀬はるか、長澤まさみ、夏帆、広瀬すず、という、豪華で贅沢な女優陣が、一見地味なストーリーを華やかなスクリーンに変えてくれます。

ラストシーン、海辺を歩く四姉妹。ワンシーンワンカットの美しいロングショットが印象的でありました。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 是枝裕和

主演 綾瀬はるか、長澤まさみ、夏帆、広瀬すず

製作 2015年

上映時間 126分

予告編映像はこちら

[「海街diary」予告編](#)

ゆずり葉の頃

ゆずり葉の頃

2015年7月28日 [元町映画館](#) にて鑑賞

何かが”いらっしゃる”佇まいと気配

ずう〜っと「観てみたい」と思っていた作品でした。八千草薫さんと、仲代達矢さんが共演する、それだけで十分、映画館でお金を払って見る価値あり、とおもってしまいます。誰もが同じことを思うようで、神戸で唯一上映している、「元町映画館」に行ってみると、客席は平日にもかかわらず、ほぼ満席。しかも中高年の方がほとんどでした。

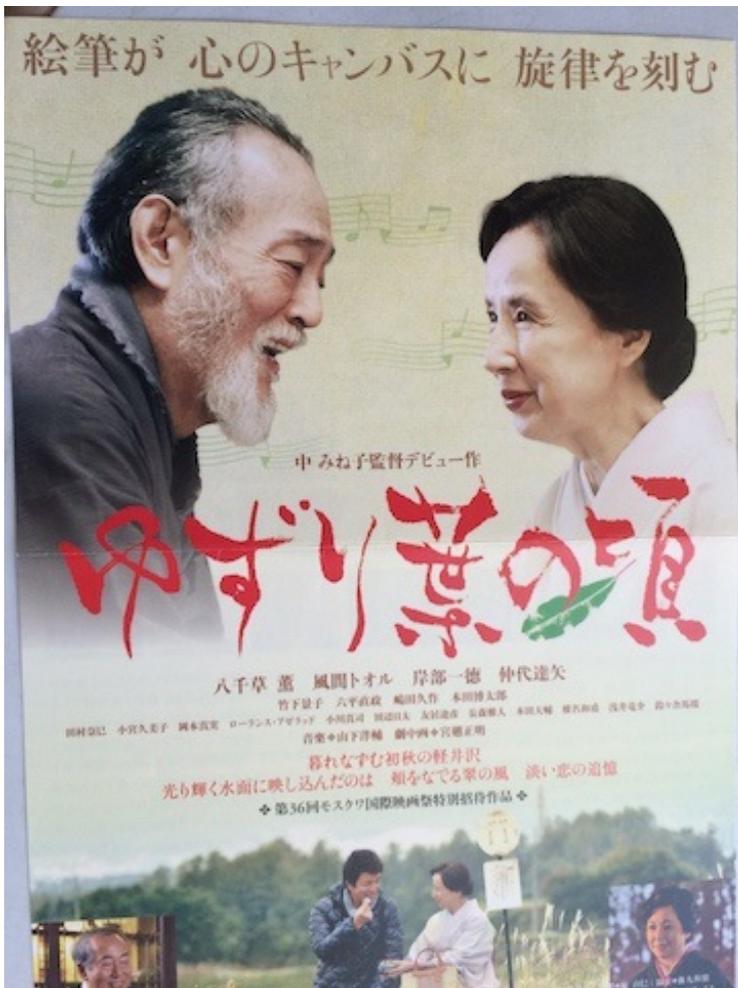
作品そのものとっても静謐。

佇まいがいいです。

軽井沢で、ある画家の個展が開かれました。画家は滅多に人前には姿を現さない。しかし、その絵に惹かれる人たちが数多い。いつしか、その存在自体が伝説的な画家になっていました。

主人公の市子（八千草薫）は、この画家、宮謙一郎の、ある一枚の絵がどうしても気にかかる。一度でいいからその原画を見たいと思ってきました。いい機会です。彼女は自分の住む街から、個展が開かれている軽井沢へ向かいます。しかし、自分がどうしても観たい作品は、個人所有となっており、原画をみる事はほぼ不可能に近いことを知ります。

やがて市子は、地元の喫茶店のマスターや、彼に紹介されたレストランオーナーの計らいで、なんと、宮謙一郎画伯、ご本人に会えることとなります。宮画伯のお宅に招かれた市子。そこで彼女が見たのは.....



本作では、何の説明も要らないでしょう。絵画鑑賞のように映画の世界観、その雰囲気の中に身をまかせると良いでしょう。

音楽は悪くない。それもそのはず、ジャズピアニストの山下洋輔さんが、ピアノを担当しています。そのメロディーや演奏はやっぱり素晴らしい。

僕が気になったのはその音楽の使い方でした。

このシーンでは、むしろ饒舌な音楽は必要ない、と思えるシーンにまで音楽を使ってしまっている。

実は「無音」という選択肢は、映画監督にとって実に勇気がいるのです。だから、どうしてもセリフのないシーン、人物の移動や、時間の移り変わりのシーンで、「必ず」「隙間なく」音楽を入れてしまおう、とする。その気持ちはわかります。本作では人物が動くシーンでの音楽が、やや饒舌すぎるくらいがありました。

まあ、これも趣味の問題なので、観る人がこれでいいと思えば、正解なんでしょう。

それからもう一点。一部のシーンで使われた、手持ちカメラの問題。

なんでブレブレの手持ちカメラを使ったのか？ ほとんど意味不明なシーンがありました。市子の主観映像が、それに当たりますが、これは如何なものか？ と首をひねりました。僕ならステディーカムを使って欲しいと思う。

いろいろと、文句を申しましたが、本作はそれを補って余りあるほど魅力的です。

やっぱり八千草薫さん、スクリーンで拝見するお姿はなんとも美しい。



海外で商社に勤める進が帰国した。着物の仕立てをしながら一人で暮らす、老境を迎えた母の市子は旅に出ていた。進は、理由も語らず一人旅に出た母を気かけ、軽井沢へと後を追う。市子がかつて疎開していた土地。市子には、やり残していたことがあった。今や世界的な画家となった、かつて心を寄せていた人が描いた一枚の絵——そこには幼い頃の自分が描かれていた。その絵を一目見たい。一途な旅路の行方には、思わぬ巡り合わせが待っていた…。清く澄んだ人々が織りなす、やさしい視点に満ちた心

この人は、老いて行くのではなく、本作のタイトルにある通り、その存在自体が「ゆずり葉」なのでしょう。

ゆずり葉は、若い葉が伸びてから、古い葉が落ち、次の世代に譲るのだそうです。

本作の見せ場は、なんといっても仲代達矢さんとの二人芝居でしょう。オルゴールの音に合わせて、八千草さんと仲代さんが、ダンスに興じるシーンがあります。

お二人が、子供の頃に戻ったかのように、無邪気に踊るシーンは印象的です。

ロケーションも本作の大きな魅力です。

「龍神の池」と呼ばれる池があります。清水が湧き出ています。常に新しく、命溢れる水。しんしんと湧き出てくる、その澄み切った水の透明感と生命力。この小さな池のほとりにたたずむ主人公、市子。

「ああ、ここにはなにか”いらっしゃる”」と思えます。

岸部一徳さんが演じる、マスターの喫茶店「珈琲歌劇」この雰囲気もいいですね。エンドロールを見ていると、この喫茶店、実在するようですね。

レンガと木組みで作られた古い喫茶店。中に入ると、年代を重ねたと思われる銘木で作られた、カウンターのどっしりとした重み。客は少なく、これで経営が成り立つのか？と思えるのですが、静かに味わい深い珈琲を、じっくりと楽しむにはぴったりの雰囲気です。店員の服装は、清潔感あふれる真っ白なシャツに黒のエプロン。言葉使いが丁寧です。接客はどこまでも超一流ホテル並みです。そんな喫茶店のカウンターの奥。マスターは珈琲をじっくり丁寧にドリッピングしている。画面から、程よく焙煎された、珈琲の香りが漂ってきそうです。マスターの友人が営むレストランも、これまた素敵です。

ここは2組だけですが、宿泊もできる。地元で採れた食材でフランス料理を出している。

市子はこのレストランで、宮画伯の絵に出会うのです。

本作では、おもわず「一度は行ってみたいなあ〜」と思わせる、魅力的なお店、画廊、数々の美しい風景が取り上げられております。

年齢を積み重ねてゆくことで得られる、ある種の気高さ。

「私もこんな風に歳を重ねて行きたい」

本作を見て、誰もがそんな風に思うのではないのでしょうか。

ゆずり葉のように、すくなくとも心持ちは「緑のままで」歳を重ねて行きたいものですね。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 中みね子

主演 八千草薫、仲代達矢、風間トオル、岸部一徳

製作 2015年

上映時間 102分

予告編映像はこちら

[「ゆずり葉の頃」予告編](#)

日本のいちばん長い日

日本のいちばん長い日

2015年8月10日鑑賞

始めてしまった戦争が.....終われない国

本作で描かれるのは、太平洋戦争最後の戦時内閣、鈴木首相就任から、終戦の詔書が放送される8月15日まで、を描くものです。もうすでに、勝てる見込みのなくなった戦争を指導していた人物たち、大本営や、内閣、そして天皇の言動に至るまでを克明に描こうとします。ただ、136分の中で、これらを描くには、どうしても駆け足でストーリーを追いかけてざるを得ないなあ〜、というのが率直な感想です。

できれば、事前に原作なり、あるいは太平洋戦争のドキュメンタリーなどで、今一度予習していったほうが理解は深まります。

本作でのキーパーソン、鈴木貫太郎首相は、連合艦隊司令長官も務めた、バリバリの海軍軍人出身の政治家です。その後、天皇のお世話をする侍従長を務めます。ところが二・二六事件の夜、自宅に押し入ってきた青年将校たちから、5発の銃弾を撃ち込まれるんですね。このとき奥さんが「お願いですから、トドメは刺さないでください」と懇願します。青年将校たちも「いずれ鈴木は死ぬ。とどめは残酷だから止せ！」

この奥さんのとっさの機転で、鈴木貫太郎は奇跡的に一命を取り留めます。

過激な軍人から命を狙われた、その鈴木貫太郎は、昭和天皇のお気に入りでもあったようです。



終戦間際、実質、戦争を終わらせるための内閣が組まれます。そのとき、わざわざ昭和天皇が指名したのが鈴木貫太郎でした。

鈴木はいったんは丁寧に断ります。

それはそうでしょう。77歳という高齢。おまけに、かつて5発の銃弾を受けた、ボロボロの体です。体力的にも不安がある。そんな鈴木に昭和天皇は「頼むから、どうか、曲げて承知してもらいたい」と言葉をかけました。

昭和天皇、直々の強い要請に、鈴木は覚悟を決めたのでしょうか。

軍人出身とはいえ、映画を見る限りでは、鈴木貫太郎は、大本営や、陸軍、海軍、の硬直した思考パターンに辟易していたようです。

あるシーンで彼が受話器を持って放ったセリフ

「軍とはこういうところなのです！！」

彼はいったん軍を離れ侍従長として、外から客観的に軍を見る目を持っていたようです。

映画では、硬直した思考パターンしか持たない、大本営の参謀たちの暴走が描かれてゆきます。特に陸軍はその歴史に非常な誇りを持っていたようです。

「栄光ある陸軍が行くところ、すべて勝ち戦さである！！」

ほとんど妄想としか言いようのない「陸軍常勝神話」に彼ら自身が自家中毒に陥っていたようです。

ですから、彼らにとって、「無条件降伏」などもってのほか。

大日本帝国の臣民は、皆が天皇の子供達なのですから、天皇のために死んでこそ本望、いざ、本土決戦、一億玉砕ダァァ～！！とやたらと威勢がいい。

女学生たちが竹槍訓練をする風景も映されますが、まさに精神力があればB29など、恐るるに足らず、竹槍で一撃必殺のかまえです。

ここまできると、もう、この連中、精神病院へ放り込んだほうがいい、と僕なんかは思ってしまうんですが、実際、戦争終結直前まで、陸軍や大本営はこの調子なんですね。

とくにやっかいなのが、飾緒（しょくちょ）と呼ばれるモールを吊り下げた軍人たち。参謀です。

このひとたち、机の上で戦争をやっているのです。机上の作戦が失敗したと現場から報告が入ると、兵を引くときに「撤退」は軍の名誉に関わるから、「転進」などという、都合のいい言葉を発明したりします。

かつて司馬遼太郎氏は「戦時中、日本国は、日本軍に”占領”されていた」と語りました。本作の原作者、半藤一利氏は、永きにわたって、その司馬遼太郎氏の編集者でありました。そのニュアンスは半藤氏に受け継がれていると思います。

さて、そういったやたらと威勢のいい、血気盛んな陸軍内部。その代表、陸軍大臣として、鈴木内閣に入ったのが阿南惟幾（あなみこれちか）陸軍大将なのですね。彼は表向きは「徹底抗戦派」を装っております。しかし、内実は「日本に勝てる見込みなどない」ということは承知しています。この戦さをいかに「より良い条件で」終戦させるか、軟着陸させるか、それを模索していたようです。彼もまた、一時、侍従武官として、天皇陛下の近くで御仕えしていた時期があります。そのときの侍従長が鈴木貫太郎氏でありました。彼は鈴木氏の人柄に大変尊敬の念を抱いていたようです。ただ、陸軍内部のエネルギーはいつ暴発を起こすかわからない。しかし、天皇を思い、国を思えば、何としてでも軍内部を自分が説き伏せ、鈴木内閣を命がけで支えなければならない。

苦渋の板挟み状態です。

本作において、この実に難しい役どころを、名優、役所広司氏が熱演しております。こんな難しい役どころはおそらく、役所さんでなければ務まらないでしょう。

歴史の歯車は刻々と進みます。

玉音放送は実は事前に録音されたレコード盤であったこと。

それを放送させてなるかと、宮城を占拠した軍部のクーデター事件があったこと。

日本人でも意外に知られていないこれらの事実が、淡々と時系列を追って描かれてゆきます。

最後に昭和天皇を演じた本木雅弘氏が、役の存在感に押しつぶされずに、神々しく演じきったことに感嘆いたしました。

なお参考までに、この戦争末期の天皇や軍部を描いた作品として、イッセー尾形氏が、生き写しのように昭和天皇を演じきった傑作、アレクサンドル・ソクーロフ監督の「太陽」、また、「終戦のエンペラー」もあわせて鑑賞してみたいかがでしょうか。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 原田真人

主演 役所広司、本木雅弘、松阪桃李、山崎務

製作 2015年

上映時間 136分

予告編映像はこちら

[「日本のいちばん長い日」予告編](#)

ロマンス

ロマンス

2015年9月10日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

「私を待ってる人はどこ？」

予想していた以上に大変「上質な」仕上がりの作品だった。

落語の「下げ」のような「オチ」、ラストシーンにも好感が持てた。

以前鑑賞したタナダユキ監督作品、蒼井優主演の「百万円と苦虫女」よりも、僕はこっちの方が好きだ。

主人公の北條鉢子（大島優子）は小田急電鉄の特急「ロマンスカー」のアテンダント、車内販売員である。列車の中でワゴンを押し、乗客にお弁当や飲み物を販売する。丁寧な接客と、今日は何が売れるのか？を敏感に感じ取るセンスの持ち主。売り上げの成績は会社内でもトップを争う。

。

私生活では、アパートメントで、ヒモのようなだらしない男と同居中だ。ある日、鉢子が仕事に出かける時、郵便ポストに手紙が入っていた。別れて久しい母親からだった。母は父と離婚後、男漁りを始めた。

当時、小学生だった鉢子の世話もおざなりにし、部屋に男を連れ込んでいた。そんな暮らしに嫌気がさした鉢子は、早くに家を出て自活を始めていたのだ。

鉢子は手紙をバッグに入れ、仕事に向かう。



その日のこと、ロマンスカー車内で鉢子は、ワゴンから物品を万引きした男、桜庭（大倉孝二）を捕まえた。

事情を聞くと桜庭は、映画プロデューサーだという。

鉢子は偶然この桜庭に、母からの手紙を盗み読まれてしまう。

手紙の内容からは、鉢子の母が自殺しかねないような雰囲気が読み取れる。

「これ、まずいよ、アンタのお母さん探しに行こう」と桜庭はさっさとレンタカーを借りてしまう。これで思い出の場所を巡って母親を探そう、というのだ。しかたなく鉢子も、この怪しい映画プロデューサーと、母親探しの旅に出かけることになってしまう。

本作はいわゆるロードムービーの形式をとる。

タナダユキ監督は、以前も「百万円と苦虫女」において「女の一人旅」を描いた。今回は男女カップルでの旅。そこで起きる出来事を書いてゆく。

本作を見ながら、「女は、嘘の二つや三つは、アクセサリーのように身につけているのだなあ～」と妙に感心してしまった。この辺りが、女が女を観察する、女流監督ならではの視点であると思った。

また、キャスティングがこれまた絶妙だ。ひょろりと背の高い、怪しい映画プロデューサーに大倉孝二。そして背の低い大島優子。二人が並ぶシルエットは大人と子供ぐらいの差がある。まさに凸凹コンビなのだ。



そんな大島優子演じる北條鉢子は、映画プロデューサー桜庭を「おっさん」と呼ぶ。当の「おっさん」実は本物の映画プロデューサーであった。出資者を募り、製作した映画が大コケ。多額の借金を抱えている。「金返せ！！」と怒鳴り込んでくる出資者から逃げ回っている境遇である。こういう人、きっと実際にいるんだろうなあ～。

かつて大きな映画賞を取る作品を作りながら、倒産してしまった映画会社もある。映画界に生きるタナダユキ監督なら、そんな話ゴマンと聞いていることだろう。

さて、大島優子という人は、もちろん誰もが知るところの、AKB48というアイドルグループ出身。僕が思うに彼女は天才肌ではなく、大変な努力家なのだろう。

AKBの生みの親、秋元康氏は彼女を評して、

「あれだけ努力していると、普通の人では手が届かない、透明な天井、や壁に手が届いてしまうんです。それが何かは見えない。だけど手にコツコツ当たって、次の場所へ行くのを阻んでいるのがわかる。それを感じて彼女はもがいているんです」

大島優子は子役出身のアイドルとして成功を収めた。彼女には、アイドルに欠かせない、あるセンサーのようなものを身につけている。

同じアイドルとして「嵐」の二宮和也が語った言葉を、僕は印象強く覚えている。

「今、自分に何が求められているか、一瞬で空気、読めるんですよ、アイドルって」

その二宮くんの言葉通りの瞬間を、僕はあるテレビ番組で目撃したことがある。それはアイドルグループAKB48が、まだそんなに売れていなかった頃のこと。メンバーが、いろんな職業にチャレンジする、というバラエティ企画番組だった。

僕が目撃したのは、大島優子と数人のAKB48メンバーが、ラーメン屋さんの店員さんとして働くという企画だった。

普段は劇場で歌ったり踊ったりしているメンバーである。それがいきなりラーメン屋さんの店員になってこい、という無茶振り企画なのである。

「なんで、アイドルが、こんなことやんなきゃいけないの？」とばかりに、メンバーは店の中で、何をして良いのやら、まごまごしていた。

店はすでに営業を始めている。お客さんもちらほら入ってくる。

テレビロケのカメラはすでに回っている。

その時である。

大島優子は突然、伝票とボールペンをもって、お客さんの方へ駆け寄り、笑顔で接客を始めたのだ。

「いらっしゃいませー！！、ご注文は？ ハイ、**ラーメンですね、店長！**ラーメン一丁、おねがいしまーす！！」

もう、ラーメン屋の店員を何年もやっているかのような、手慣れたテキパキとした対応だった。そんな優子を、他のメンバーたちは、しばし呆然と見つめ、やがて各々、ようやく自分が何をしたら良いのか、ラーメン屋さんの店内で行動を始めるのだった。

こういう臨機応変の対応が取れる大島優子。AKB48では、何をやらせても優等生だったらしい。そういう人を女優さんとして使うか？ また使えるか？ というのは、実は意外に難しいところなのだ。彼女は、本作だけではなく、テレビドラマなどでも懸命に「演技しよう」「役になりきろう」と努力する。しかし、あえてそれを求めない監督さんも多いのである。

その俳優さんが持つ「欠点」や「弱点」さらには「毒」の部分もひっくるめて、作品世界で俳優の人間性や存在感をさらけ出してほしい、と監督は思うのだ。

映画やドラマのキャスティングは、「この役ならこの俳優がいい」という役の「近似値」を狙う。それがいざ撮影が始まると、脚本に描かれた人物像と俳優の化学反応が起きる場合がある。それは脚本で描かれた人物像を超えた、ある種、奇跡の存在となる。近年では李相日監督の「悪人」における妻夫木聡のような場合である。

本作で印象的だったのは、大島優子の相手役、怪しい映画プロデューサー役の大倉孝二である。この人の「間」の取り方がいいのである。

ときおり、セリフを噛んじゃったのでは？ と思える部分でさえ、それ自体が味になっている。タナダユキ監督はそれを面白い、とおもって、そのシーンを使うのだ。

そして必死で演技しようとする大島優子の「演技していない」素の部分を実に丁寧に探し出して、作品の中に取り込んでいる。

主人公の鉢子がときおり口ずさむ歌。行方知れずになったお母さんが好きだった曲。谷村新司、作詞作曲、山口百恵の「いい日旅立ち」

♪～ああ、日本のどこかに、私を待ってる人がいる～♪

偶然と必然がないまぜになったかのように、鉢子と、さまざまな乗客の人生を乗せて、きょうもロマンスカーは発車する。乗客にはそれぞれに目的地があって、ロマンスカーに乗るのだ。

鉢子に目的地は見つかるのだろうか？

今日の日が、また良い旅立ちの日でありますように。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 タナダユキ

主演 大島優子、大倉孝二、西牟田恵

製作 2015年

上映時間 97分

予告編映像はこちら

[「ロマンス予告編」](#)

天空の蜂

天空の蜂

2015年9月27日 [イオンシネマ明石](#) にて鑑賞

蜂のひと刺しに、群衆は目を覚ますか？

主人公の木原（江口洋介）は、自衛隊最新鋭ヘリコプター「ビッグB」の設計者。彼は仕事に没頭するあまり、妻と息子二人との、ふれあいの時間を犠牲にしてきました。

でも、もうじき、ひと区切りつくだろう、と思っています。なぜなら心血注いで作りあげた、まるで「我が子」のように愛おしい「ビッグB」が今日、自衛隊に納入されるからです。

彼は妻と息子二人を連れて、引き渡し記念式典へ向かいます。会場は自衛隊基地。子供達にとって、そこは珍しいものばかり。二人の息子は巨大な格納庫に潜り込み好奇心から、つい「ビッグB」機内へ入り込んでしまいます。その時、突然、ヘリコプターのローターがゆっくりと回り始めるのです。

回転は、みるみる早くなる。操縦席には誰もいない。だけど動いている！　なんで？！

やがて最新鋭ヘリコプター「ビッグB」は、二人の子供を乗せたまま、地面からじわりと、その巨体を持ち上げます。

異変に気付いた木原は、とっさに次男を助け出します。

あとは長男の高彦くん（田口翔太）だけ。

「タカヒコ！！　飛び降りろ、飛び降りるんだ！！」

懸命に叫ぶ木原を地面に残し、高彦くんを乗せた無人ヘリ「ビッグB」は無情にも遠ざかってゆくのです。

やがてヘリコプターを乗っ取った犯人（綾野剛）からメッセージが届きます。

「日本に存在する、全ての原発を即時停止させろ。さもなくばビッグBを、福井の高速増殖炉「新陽」の真上に墜落させる」

犯人は自らを「天空の蜂」と名乗り、遠隔操作でヘリコプターを操っていました。

現地では、原子力プラントの設計者、三島（木本雅弘）を中心に対策本部を設置。ビッグB設計者の木原も加わります。

警察は犯人の割り出しを進めます。やがて捜査線上に一人の女（仲間由紀恵）が関わっていることが判明。

一方テレビでは、高速増殖炉「新陽」の上空で、ビッグBが今まさにホバリングしている姿が映しだされます。

もし、燃料切れとなれば、あのビッグBは、少年を乗せたまま、炉心めがけて猛烈な勢いで墜落してしまう。

燃料切れまで、あと8時間。

さあ、政府および原子力機関は、突然降りかかった、この国家存亡の一大事に、どう立ち向かう

のか？

そして高彦くんの運命は？ 破滅までのカウントダウンは、刻一刻と、容赦なく迫ってくるのです.....。

とまあ、こんなぐあいで、もうハラハラドキドキなんですね。



堤幸彦監督らしく、こういう作品撮らせたなら、やっぱり「いい仕事してきますねえ～」と唸りたくなる出来です。

堤監督の秀でた点は、ちゃんとヒューマンドラマが描ける、ということ。

ちなみに僕の堤監督作品のなかでイチオシは、貫地谷しほり、竹中直人共演の「[くちづけ](#)」なんです。こういう作品も撮れる監督さんなんだ、とびっくりしますよ。

さて、高彦くんは仕事一辺倒の父親、木原に、反抗のそぶりを見せてます。

式典会場の待合室。つま先でコツコツと、執拗に床を叩く高彦くん。

引き渡し式で神経質になっている父親、木原。

「高彦、うるさい、それやめろ！！」ときつくあたります。

このつま先の「コツコツ」実は父親である木原が、高彦くんに、自ら教えていたモールス信号だったのです。

「ボ・ク・ハ・コ・コ・ニ・イ・ル」コツ、コツ、コツ.....。

高彦くんは、そのつま先で、密かに父親宛に、屈折した心の叫びを発信し続けていたんですね。このシーンで、僕のような、いい年した中高年オヤジの涙腺は爆発炎上。それこそ原子炉格納容器などより、いともたやすく破壊されてしまったのです。

さて、電力を作るための方法として、原子力を選んでしまったのは、果たして良い選択であった

のか？ という素朴な疑問や「本当に大丈夫なのか？」という懸念を、本作が表明しているのは明らかですね。

原作はヒット作を連発する東野圭吾氏が1995年に発表。あの阪神大震災があった年です。

すでに原子力発電への、深い問題意識や、危機意識をもちあわせていた事に敬意を表したいと思います。

阪神大震災時、被害の大きかった神戸市東部の海岸地域、あそこは工業地帯なんですが、もし仮にですよ、そこに原発が建設されていて、稼働中であつたなら……。今、神戸市に住んでいる身としては、考えただけでもゾッとします。

東野氏は、その手腕を発揮して「エンターテインメントとしての小説作品」として本作を発表しました。市民運動として声高に「原発反対」を叫ぶ手法も、当然ありでしょう。東野氏は小説家としての立場と手段で、世に問いかけることを試みました。

小説や映画などの表現方法は、例え話をするならば、薬を飲みやすく包む「オブラート」の一面があるのです。

苦くて飲みにくい粉薬や、舌や喉にへばりつく錠剤。あれはなかなか飲みにくいですよ。僕も苦手です。

同様に、思想信条や、科学技術、原子力利用の是非、更には複雑怪奇な力学が絡む、政治問題という名の「粉薬や錠剤」は、僕のようなボンクラな頭では、なかなか吸収に時間がかかります。しかし、これらを「小説」というオブラートに包んで、ポイと口に入れ、水で流し込めば、その薬効成分は、やがて体内の隅々まで効能が広がってゆくのです。

それは自然と生命が、何億年もかかって作り上げた、生命維持の巧妙なシステムによってです。しかし……。

その何億年という生命の営みの象徴である、DNAをいともたやすく傷つける方法があります。放射能です。

日本のほぼ真ん中に位置する原子力発電施設が、万が一、木っ端微塵に破壊されたらどうなるか？

東は東京から、西は中部地方や四国まで、日本列島の主要都市は、ほぼすべて立ち入る事すら出来無くなる、と本作では想定しております。しかも、燃料のプルトニウム239というヤツは、強い放射線を放つそうです。

その放射能の半減期は約二万四千年に及ぶといわれています。日本列島が邪馬台国と呼ばれ、卑弥呼のいた時代から現代に至るよりも、はるかに長い悠久の時間、住むことはおろか、近づくことさえできないのであります。はあああ～、と気が遠くなりますな。



さて、この映画の最大のキーワードがあります。

それが「沈黙する群衆」です。

無関心で、黙って見過ごしていた、その些細なことの積み重ね。

それが日本人の中で積み重なって、いわば「無言のピラミッド社会」が形作られてしまったの
でしょう。しかし、一旦大きな自然災害などで、それがガラガラと崩れてしまった時、結局「沈
黙は金」なんかじゃなかったんだ、「やっぱり声を上げるべきだったんだ」と日本人は悟ったの
ではないでしょうか。

あまりにも巨大な代償を払って……。

僕個人の主観として、本作は「BRAVE HEARTS 海猿」以来、久々の傑作アクション大作だと思
いました。

見るものをハラハラさせ、時に涙を誘い、観客を感動に誘うのです。そして、観終わった後、
ふと考えさせてくれます。今のままでいいのだろうか？ 僕たちが明日からできる事はないだろ
うか？

映画を見終わり、劇場を出た後、僕を含め多くの人たちが行う「ひとつの儀式」がありますよね
。

そう、携帯電話の電源をオンにすることです。

ここで、ちょっと想いを馳せてほしいのです。

「そもそもこの、ケータイの電気は、どこから来たの？」

「もしかして原子力で作った電気？」

あるいは、つい、この間までは危ないとされて、今は危なくないらしい、ナントカ海峡とやらを

通り、タンカーで運ばれてきた原油を、大量に燃やして作った電気なのか？

ほんの少し、心の片隅に、小さな小さな「？」を抱えてほしいものです。などと、エラソーにキーボードを叩いていますと、パソコンが電池切れなので、この辺でおしまい。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆☆

作品データ

監督 堤幸彦

主演 江口洋介、木本雅弘、仲間由紀恵、綾野剛

製作 2015年

上映時間 138分

予告編映像はこちら

[「天空の蜂」予告編](#)

ピース オブ ケイク

ピース オブ ケイク

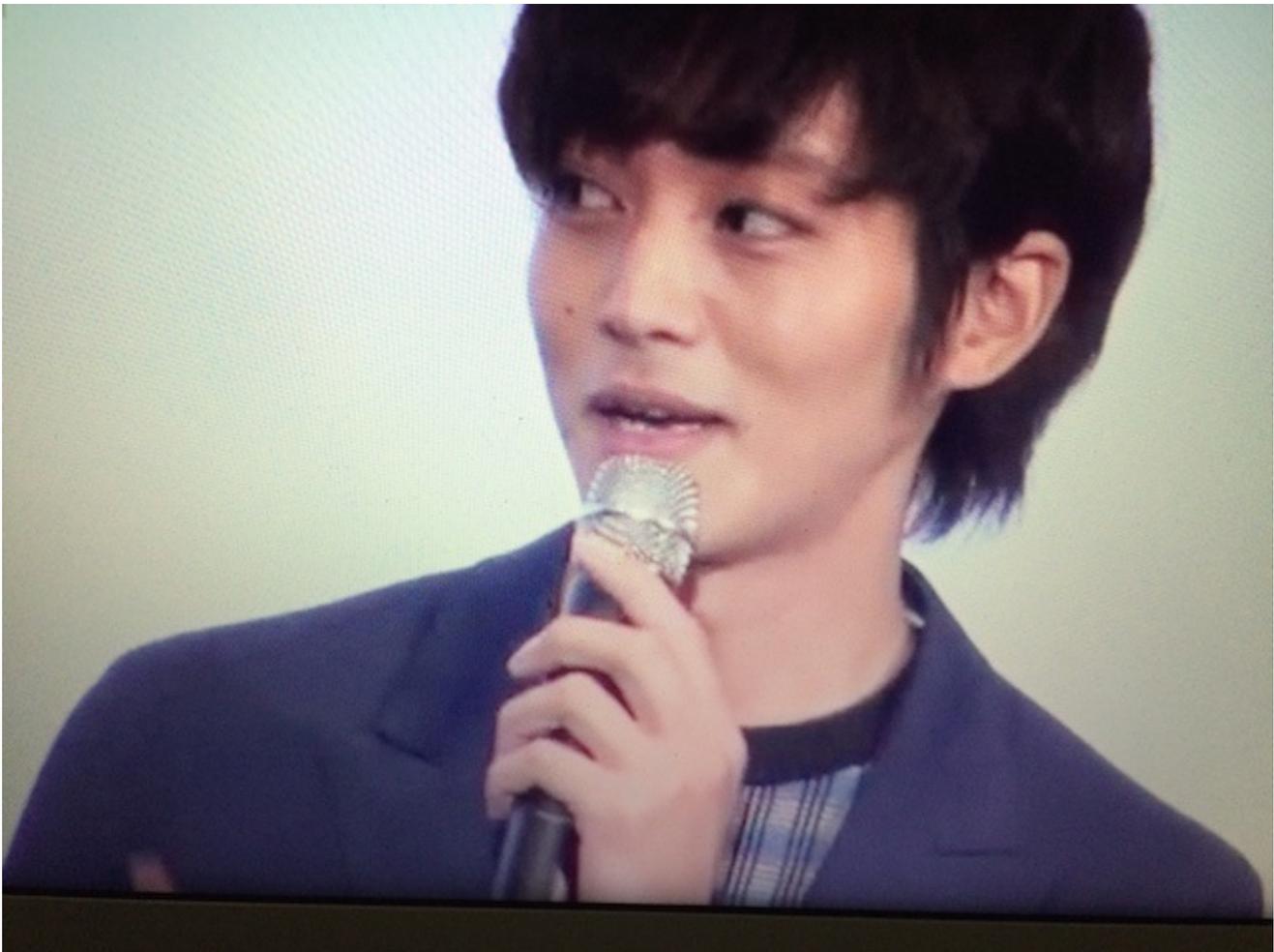
2015年9月30日 [ミント神戸](#) にて鑑賞

多部ちゃん、次は「18禁」挑戦してみる？

田口トモロヲさんが監督さんでしょ？ 多部未華子ちゃんと、麗しの綾野剛様が共演でしょ？
もう、アタシみたいな「おかま」としては放っとけないわよ！ この映画。

ってわけで観てきたのよお～。

よかったじゃなあ～い、松坂桃李くん「オカマの天ちゃん」役。ハマってたわよねえ～。やっぱり、元々、そういうお店の子だったのよ、あの子！！



元AKBの光宗薫ちゃん、綺麗だったわよねえ～。さすが神戸コレクションのグランプリ獲っただけのことはあるわよ。今回は綾野剛さまの、同棲相手で、元カノっていう設定なの。うらやましいわ、ホントに。

それ以上にうらやましいのは、多部未華子ちゃんよ！

綾野剛様とベッドで、あ～んなことや、こ～んなことまでやって、挙句によお～、お風呂まで一緒に入っちゃうんだからア～。どう思うう～、アンタ達？

デビュー作の「[HINOKIO](#)」で、多部ちゃんがランドセル背負ってる時から見てるアタシとしてはさあ～、アンタもそういうことやる、お年頃になったってことね。いろんな経験がいい女を磨

く道具なのよ、きっと。

多部ちゃん、アンタはどんどん磨かれてる。

そんな、多部未華子ちゃん演じる梅宮志乃は、いろんな男と付き合ってきたけれど、恋というには、どれも本気になれない、中途半端な付き合いばかり。結局男と別れて、仕事も辞めて、庭のついた安アパートの一階に引っ越してきたの。



仕事も恋も、ここからやりなおそう、なあ～んて思いながら、彼女、縁側でぼーっと庭を眺めるわけ。

んで、ここがミソなんだけど、この縁側、隣の部屋と繋がってる。

その隣の縁側にいたのが、綾野剛様演じる京志郎だったのよお～。

この時、志乃に物凄い圧力の風が吹くのね。「ヒトメボレ」という逆らえない風が吹くのを志乃は感じるのよ。

でも、京志郎には同棲相手の成田あかり（光宗薫）っていう女がいたのよ。いい男はやっぱり早いもん勝ちなんだからね、志乃ちゃん。

んで、ちょっとがっかりした志乃ちゃんは、友達のオカマの天ちゃん（松坂桃李）の紹介で、レンタルビデオ屋さんで働くことになったわけ。んでさあ～、まあ、ありがちな展開なんだけどお～、そこの店長がなんと、志乃ちゃんの隣に住んでる京志郎さま、ってわけよ。

さあ、こんなとき、アンタ達ならどうするのよお～？

せっかくレンタルビデオ屋さんだしさあ～、京志郎さま、時折レンタルしちやったりする？ なあ～んてね。でもその先に待ち受けているのは.....。

分かるわよねえ～、フフフ。そのとおり。

愛と欲望渦巻く、三つ巴の修羅場なのよ～！！

ってわけで、この作品、全編にわたって、惚れたハレタ、ラブラブシーンのオンパレード。監督さんの田口トモロヲさんは、あのNHK「プロジェクトX」のナレーションで一躍、大メジャーな人になっちゃったわよね。

でもこの人、それだけじゃない、実はパンクバンドもやってるのよ。

せっかくだから、この映画にもちょっと「パンクっぽい」ところも見せて欲しいわよねえ～、なんて思ってたなら、さすが田口監督、良く分かってらっしゃるじゃない。

アングラ劇団の芝居のシーンがあるんだけど、これがもう、支離滅裂で、思いっきりパンクしちゃってるわけ。

そんで、そんで、もうひとつ。

このアングラ劇団の、座長役をやってるのが峯田和伸さんなのよ。アタシこの人大好き！！

主演した映画「[ボーイズ・オン・ザ・ラン](#)」の大ファンなの。

本作の主題歌も加藤ミリヤさんと一緒に、激しく愛を歌ってるわ。

ちなみに音楽は大友良英さんが担当。

みんな知ってるでしょ？ あのヒット作「あまちゃん」の曲を作った人なのよ。「あまちゃん」つながりでいうと、あの「クドカン」こと宮藤官九郎さんも、後半ちょろっと友情出演してるから、見逃しちゃダメよ。

おかまの天ちゃん、今度一緒に飲みましょうよ。ちなみにアタシもアッチの方は「ネコ」なんだけどね。残念ねえ～。まあ、こんな話、わかる人だけわかりゃいいのよお～。せこくPG-12指定してるしさあ～。なんなら18禁にする？ 多部ちゃんオッケー？ やっぱ事務所NGかしらん。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 田口トモロヲ

主演 多部未華子、綾野剛、松坂桃李、光宗薫

製作 2015年

上映時間 121分 映倫PG-12

予告編映像はこちら

[「ピース オブ ケイク」予告編](#)

バクマン。

バクマン

2015年10月16日 [イオンシネマ明石](#) にて鑑賞

これが大根監督の「大バクチ」だぜ！！

最初はね、観に行く予定もなかったんです。でも、監督が大根仁さん、と聞いてちょっとビビッと来たんですね。

あの「[モテキ](#)」の監督さんですよ。これ、「オモロいかも」という感じで見に行きました。

結果。大満足！！

もしかして、これって、今年観た映画の中でベスト5に入っちゃうかもしれないです。

やっぱり、映画ってねえ、何をどう撮ったっていいんですよ。基本、表現は自由なんですから。どうしても、ちょっと映画をかじると、プロっぽくやろう、とか、あの大監督さんの作風でやってみたいと思うわけですよ。

例えば小津映画の様式美は素晴らしい。洋画のアンゲロブロス監督のスケール感は例えようもない。ヴィスコンティ監督の美意識は酔いしれますよね。じゃあ、自分はどんな映画を撮るのか？ 映画監督を志す若者たちは、ぜひ、独りよがりでもいい、自分にしかできない表現を模索してほしいんです。

大根監督はそれを商業映画の中で、どれだけの可能性が示せるのか？ 果敢にチャレンジしている監督さんの一人だと、僕は確信します。

映画の中に、書店のポップアップ広告、マンガの吹き出しみたいなのを入れてもいいじゃない！（たぶんこれを最初にやったのは、中島哲也監督の「下妻物語」だと思う）

本作は、漫画家を志す二人の高校生が主人公。

高木君（神木隆之介）は文章、ストーリーを書くのが得意。同じクラスにいる真城君（佐藤健）は絵を描くのが得意。そこで高木君から提案あり。

「俺、ストーリー書くからさァ、オマエ、画を描いてくんない！？」

そして二人でマンガを作って、デビューしようぜ！！というのです。



最初はあまり乗り気ではなかった真城君。さて、クラスには真城君の憧れの女の子がいます。それが亜豆美保（小松菜奈）さん。圧倒的な美貌とスタイルの良さ。まさしくアイドルです。そんな彼女、実はアニメの声優を目指していることを知った真城君。

「もし、俺が漫画家デビューして、それで、それで、もしだよ、アニメになったら、その時はヒロイン役やってくれる?！」

彼女の答えは.....

「Yes」でした。

「よっしゃあああああ〜!!」

おれは漫画家になってやるぞおおお〜!!」

真城君は高木君と組んで一心不乱にマンガを描き始めます。

「マンガやるなら、頂点めざそうぜ!!」

二人はマンガ界の巨人と呼ばれる「少年ジャンプ」編集部で、やっとの事で描き上げたマンガを持ち込むのです.....

漫画を創作する、彼らの頭の中、どんなアイデア、どんなストーリー、どんな表現をやろうか?

表現者であれば、誰もが経験する、自分一人にしかわからない、実に曖昧模糊とした、ある種の「ゾーン」

それをプロジェクトマッピングという新しい手法で、本作は描いてみせます。彼ら二人の心象風景を、大根監督は、スクリーンで観客に提示することに、見事成功しました。その演出は決して独りよがりではない、と僕は思います。

また、その手法は、のちに二人がタイマン勝負することになる、天才漫画家との熾烈な競争のシ

ーンでも、実に効果的に使われます。

この天才漫画家を演じるのが染谷翔太君。

彼、いいねえ〜。

ここまでちゃんと役作りしてくるとは思ってもみませんでした。

以前見た矢口史靖監督の「[WOOD JOB!](#)」では、まだまだ、新人臭さが抜けていない感がありました。

でも本作では、明らかに役者として成長している姿が見られます。

天才にありがちな、ひとりよがり、わがまま、傲慢、クセとアクの強さ。

普段からかなり猫背な姿で、フラフラと歩く若き天才漫画家を、実に巧みに演じました。

それを演出した大根監督。やっぱ、エッジが立ってるわぁ〜、っていう感じですね、

矛盾した言い方かもしれないけど、アマチュアなら、大いに独りよがりだと思います。

しかし、必死の思いで努力して、ようやくプロになった。

マンガを描いてお金をもらう。当然、「読者が面白い!」と思ってもらえるものを描かねばならないわけです。

もう、独りよがりでは通用しない世界なんですね、プロってというのは。



原作 **大場つぐみ**
小畑 健
「DEATH NOTE」

監督 **大根 仁**
「モテキ」

音楽 **サカナクション**

INTRODUCTION

原作・大場つぐみ、漫画・小畑健の「DEATH NOTE」コンビが手がけ、全20巻で累計1500万部を超える大ヒットを記録した漫画「バクマン。」が遂に映画化。監督は映画『モテキ』で日本映画の新たな地平を切り開いた鬼才・大根仁。そして、音楽と主題歌を担当するのは気鋭のロックバンド・サカナクション。いま最も熱い才能たちが結集し、少年達の「成長」「戦い」「友情」そして「恋愛」を描いた、爽快感と躍動感あふれる、斬新で王道の青春映画が、ここに誕生!!

STORY

「俺たち二人で漫画家になって、ジャンプで一番目指そうぜ」

さらに、映画の場合もっとアブナイ……。作品に関わる人が格段に多くなるんですね。

映画に出資してくれる支援者は、まだ、完成品が見れないわけです。

「これからつくる」映画作品に大きなバクチを打つわけです。

それは売れる作品なのか？ はたまた、大衆がそっぽを向くのか？ もし、そんなことになったら、もう大赤字。最悪の場合は、監督、プロデューサーは首を吊らねばなりません。売れ

なきや、おしまい「the end」です。

そういう意味で、最近では、大ヒットマンガの映画化が進んでいるのは、出資者への、ある種の「保険」がかかった作品作りとも言えますね。

ところで皆さん、映画のエンドロールって最後まで見ますか？

僕は本作については、最後までちゃんと見ました。

なんで？

だって、エンドロールまでも面白いんだもん。

こんなに素晴らしいサービスしてくれてるエンドロールなんて、今まで見たことがないです。

1960年代までの映画は、エンドロールなんて、ほんとあっさりしてました。

あるいは、オープニングロールで、先に出演者やスタッフ紹介がありました。

それも、実に短い時間です。

ところが、映画が巨大産業になるにつれ、関わるスタッフの数が、半端なく多くなってきました。とうぜん、エンドロールも長くなる。

「しょうがねえじゃん」

それが業界でまかり通ってきました。

また、一部の「映画評論家」「映画通」「映画マニア」と称する連中が、この「糞面白くもない」エンドロールを、最後まで見るのが「エチケット」なのだと、いう風潮を作ってしまった。

エンドロールを最後まで見るのが「本当の映画ファン」なあ～んだって！！

笑わせるな！！

だから誰も映画館に行かなくなったんだ！

映画を作る側も、最後の最後まで観客をどう釘付けにしようか、という創意工夫を何にもやっつてこなかった。はっきり言って明らかにサボってた。

「エンドロールは長くて当然じゃん」

それが業界の常識。

でも観客の立場からは、まったくの非常識。

こんなつまらん、背景真っ黒、知らない人の名前だけ、延々五分以上見せ続けられるなんて、たまったもんじゃない。こっちはお金払ってるんだからね。

我慢大会やってるんじゃないんだよね。

大根仁監督という人は、本当にサービス精神旺盛な人で、観客をどうやって楽しませようか。あっと言わせようか、ニヤッとさせてやろうか、そんな楽しいことしか考えていない、ちょっとイタリアンな感じの人じゃなからうか。

僕は本作のエンドロールを見ていて、そんな風に感じました。

映画は確かに大バクチです。

でも僕は、あの偉大なスティーブ・ジョブズの言葉を借りて言いたい。

「そりゃあ、失敗する可能性は高いよ、でも僕は一生のうち、一回でも映画を作ったことがあると言えるんだ。それだけで誇りだよ」

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 大根仁

主演 佐藤健、神木隆之介、小松菜奈、リリーフランキー

製作 2015年

上映時間 120分

予告編映像はこちら

[「バクマン」予告編](#)

岸辺の旅

岸辺の旅

2015年10月18日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

あの世とこの世の境にて

ところで皆さん、お墓参りって最近行ってますか？

僕は今55歳なんだけど、ふと、思いついた時とか、ちょっと気分を落ち着かせたい時など、お墓参りをするようになりました。



今までの人生をふりかえって、「あの時、よく、死ななかったな」と思うような瞬間がいくつもありました。50歳を超えた折に、三回、全身麻酔で手術を受けたことも影響していると思います。

全身麻酔を経験した方なら分かると思うけれど、あれ、麻酔液が注射針を通して（僕の場合はそういうタイプの麻酔でした）体に入ってくるのが分かるんですよ。麻酔液って、ジュワ~とした感覚で「痛い」のですよ。

おいおい、これ麻酔なのになんで痛いんだよ！と、思った次の瞬間

一暗転ー

全く意識を失います。

気がついた時はベッドの上。酸素吸入。左腕には点滴。指先には心拍数を測る器具。一番違和感

を覚えるのは、尿道に細く滑らかなガラス管が差し込まれていること。その先を辿って行くと……、まあ、ヤボな話ですね。

そういう体験を僕は3回やってます。

三回目の手術が決まった時、「ああ、そろそろ、あっちへ行く準備しとくべきかな」などと思い、入院前に部屋の整理をしておきました。

手術の当日、僕が一番嫌だったのは、尿道に管を差し込まれることではなく、あの麻酔液が体に入ってきて、ジュワ〜、と痛くなり、その後「昇天」するような一連の工程、あの感覚を、体と意識が覚えていることでした。

つまりは、人工的に「臨死体験」を無理やりさせられるわけです。

もちろん、病院、医師、看護師など、「切る側」から言わせれば「全身麻酔」の危険性など屁でもない、なのでしょう。でも”まな板の上の鯉”状態の「斬られる側」としては、かなり厳粛な気持ちになるのです。

人工的に意識を失う「その瞬間」

その後、万が一ということがあって、もう自分は「こっちの世界」には帰ってこれないかもしれない。そんな風に思ってしまうわけですね。

そんな訳で、自分と、あの世の世界が、随分と身近に感じられるのです。すぐ隣の席に「死」という相棒が佇んでいる。そんな雰囲気を感じることもあるのです。僕が時折墓参りをするようになったのは、そんな体験があつてからのこと。墓石を水で清め、花を手向け、お線香を焚いて、「もしかしたら、そっちへいくかもしれませんので、その時はよろしく」と手を合わせます。なんだか、ふうう〜っと、心の波が穏やかになってゆくのを覚える、その瞬間が僕は好きです。さて、映画の話でしたね。

本作は夫を亡くした奥さん、瑞稀（深津絵里）が、ひょっこり、あの世からトリップしてきた旦那さん、優介（浅野忠信）と、思い出の場所と人を訪ねて旅する話。

こういう手のお話は、ミステリーにも描けるし、それこそ妖怪にも描ける。いろんな手法があります。

本作では、旦那さんを演じる浅野忠信さん。この人の役者としての「素材の良さ」を黒沢清監督がまるで三ツ星シェフのように、料理するんですね。

それは深津絵里さんという女優さんも、一緒。いい素材をいい腕の料理人が、適切なレシピにそって作れば、極上の料理が出来上がる。

当たり前なこと、下ごしらえをおろそかにしない。実はそれが一番難しいんだけど、黒沢清監督はやっぱり、いい仕事してますねえ〜。



映画のタッチが初めから終わりまで、全く変わらない。このお話はファンタジーであるのだけれど、変な特殊効果に頼ろうとはしない。あくまで実写。そして実に巧みな編集で、亡くなった優介が、時には現れ、時にはフッと瑞稀の前から姿を消すのです。

この辺りうまいなあ～。

ストーリーは大変穏やかで、観た後、幸福感や、ちょっとした切なさが残る作品です。ただ、観客の心を鷲掴みにするような、ウムを言わせぬような「迫力」に繋がっていないのが、やや残念。でも、浅野忠信さん、深津絵里さんのファンでしたら、もう、間違いなく本作は「三ツ星」ですよ！

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 黒沢清

主演 浅野忠信、深津絵里、小松政夫、村岡希美

製作 2015年 日本、フランス合作

上映時間 128分

予告編映像はこちら

[「岸辺の旅」予告編](#)

FOUJITA

2015年11月24日 [神戸国際松竹](#) にて鑑賞

「フーフー」と、キツネの贖罪

小栗康平監督がレオナルド・フジタの映画を完成させた、と聴いて、ちょっと胸騒ぎがした。

「早く観にいきたい」という気持ちと、「もしかして……」という一抹の不安、相反する気持ちがあったのだ。

僕は小栗康平監督の「埋もれ木」という作品を、名古屋のミニシアターで鑑賞した。2005年のことだったと思う。

そのあまりの抽象性に「さっぱり訳がわからん」とひどく落胆した、嫌な思い出があったのだ。

レオナルド・フジタ（藤田嗣治）は映画の題材として、あまりに魅力的だ。

しかもフジタを演じるのは、オダギリジョーだという。

いやはや、この作品は魅力的すぎる！！

こんな美味しいニンジンをつぶら下げられたら、もう映画好き、美術好きとしては劇場に向かって走る以外ないだろう。

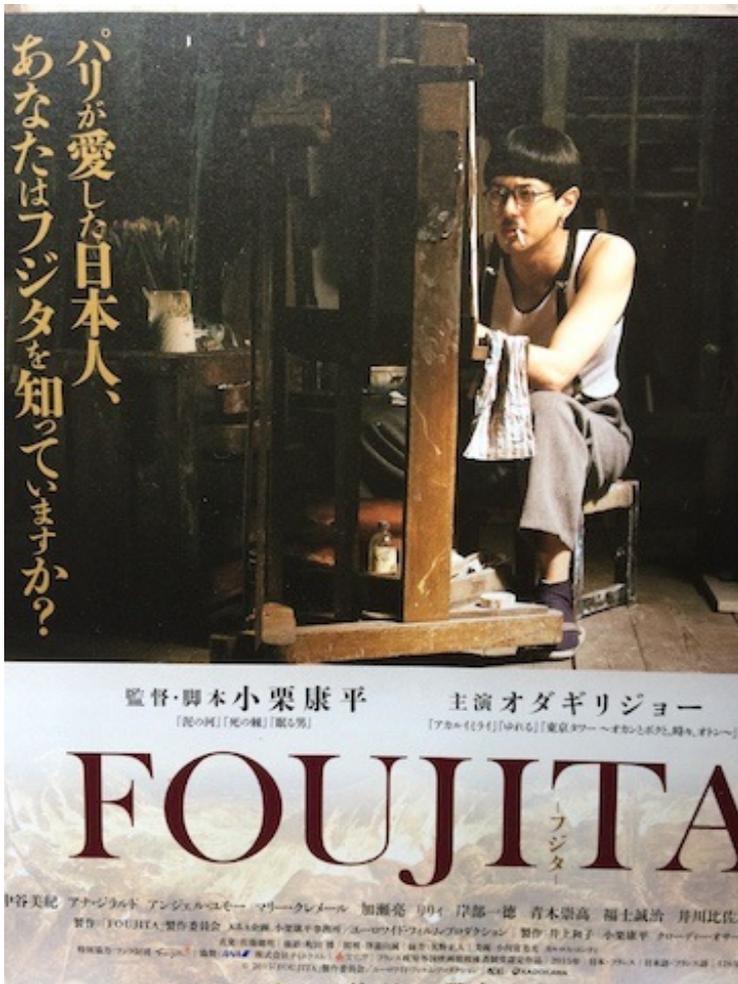
しかしである。

もし、ここで、小栗監督お得意の抽象性で描かれたら、もう本作は、それこそ太平洋戦争末期の日本軍さながらに、映画興行として「玉砕」してしまうのだ。

そんな不安を抱えながら僕は劇場にいそいそと向かった。

上映が始まると、僕の不安は安堵に変わった。

小栗監督は所々でやはり、抽象性を挟みつつも、実に丁寧に抑制された演出で、淡々と藤田嗣治と女たち、そして彼が生きた時代を描いて見せるのである。



映画前半、エコール・ド・パリでの「フジタ」

彼の描く乳白色の裸婦像は、パリっ子たちにとって「東洋の神秘」

「誰も真似できない」として絶賛されまくる。

夜の街に繰り出せば、誰もが彼を「フーフー」という愛称で呼ぶ（ちなみに、これは「お調子者」という意味らしい）

彼はパリのアーティストたちの、まさに中心人物として担ぎ上げられる。

束の間の平和、日ごと、夜ごとの乱痴気騒ぎ。

「フジタ」はパリで最も有名な日本人として、時代の「波」に乗った。

芸術家たちにとって、なんと幸せな時期であっただろう。

しかし、すぐ暗黒の時代がやってくる。

映画の後半は、まさに作品をバツサリと真っ二つに切ったかのようだ。

舞台は戦時下の大日本帝国。

そこにはもう乱痴気騒ぎはない。

あるのは疎開先での質素な田舎暮らし。

そして軍から集落に強要される、定期的な「金属の供出」である。

フジタはフランス帰りの洋画の大家として、日本軍に迎えられる。

戦意高揚のため、戦争絵画を描くように軍から要請されるのだ。

彼は軍から請われるまま、アツツ島玉砕の大作を描く。

フジタは、その玉砕を美化した、日本軍の協力者として、戦後に激しいバッシングを受けることになる。彼は故郷ニッポンの地を二度と踏むことなく、スイスのアトリエでその一生を終える...

...

本作は彼の戦後については、あえて描いてはいない。

疎開先でのフジタは、ある日、知人からキツネに「化けかされる」話を聞いた。

「そんな迷信を……」とフジタは笑う。

しかし、残酷な戦争は、フジタ自身をキツネにしてしまったのかもしれない。

彼は日本軍から「少将待遇」という、とんでもない高い位を与えられる。

その象徴として、将軍が羽織る、マントをもらっていたのだ。

そのマントを羽織って、下駄を履いて、田舎の里山を散策するフジタ。

これがエコール・ド・パリで一斉を風靡した、同じ人間なのか……



化かされたのは誰か？ 化かしたのはだれか？

滑稽なまでのマント姿のフジタ。

それを淡々と演じるオダギリジョー。

時代に弄ばれたフジタの姿はあまりに痛々しい。

なお、本作では描かれていないが、フジタは生涯の終わりに、教会の壁画を手がける。自身手がけたことのないフレスコ画への挑戦だった。

フランスに帰化し、カトリックの洗礼を受けたレオナルド・フジタ。

自分が犯した罪と罰。

それをどう裁くのかは「神様」が決めてくれるだろう。

絵描きは絵描きとしての責任を全うすべきなのだ、という、フジタなりの決着のつけ方ではなかったか？

本作のエンドロールで映される、その小さな教会を眺めながら、僕はそんなふうに思った。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 小栗康平

主演 オダギリジョー、中谷美紀、アナ・ジラルド

製作 2015年 日本・フランス合作

上映時間 126分

予告編映像はこちら

[「FOUJITA」予告編](#)

ガールズ&パンツァー 劇場版

2015年11月30日 [OSシネマズ神戸ハーバーランド](#) にて鑑賞

世界平和のために「パンツァー、フォー！」

え～、何と申しましょうか。ミリタリーオタクとまではいきませんが、ミリタリー好きなアマミヤでございます。本作は完全に戦車マニア・ミリオタ向けです。よって、一般の方のご批判は、その分ちょっと割引いていただいて……

なんぞと思っていたのですが。

テレビシリーズでファンになった僕から見ても、本作は明らかに

「つまらんぞお～！！」と言いたくなる出来でしたねぇ。

「ガールズ&パンツァー」をご存じない方に、ちょっと解説です。

このお話は、「茶道」や「華道」などと同じように「大和撫子の嗜み」として「戦車道」があるという設定になっています。また「お茶」の裏千家、表千家、武者小路千家のような「流派」まであるんですね。

戦車道がある高校は「学園艦」という、巨大な航空母艦のような船が母校なのです。そこは一つの街になっておりまして、高校生達の家族が一緒に住んでいます。

さて、主人公の”西住みほ”は「戦車道西住流」家元の次女です。実は彼女、戦車道の試合で、あるトラウマを抱えておりまして、親元から離れて、戦車道のない「県立大洗女子学園」に転校してきました。そこで友人もでき、ホッとしたのもつかの間。

なんと転校してきたばかりの母校が廃校の危機に。それを救う条件がありました。「戦車道全国大会」で優勝すれば文科省から廃校を免れる、というのです。そこで西住みほは、生徒会のゴリ押しもあって戦車道の隊長に就任。

伝統ある西住流戦車道のDNAなののでしょうか。大洗女子学園は見事全国大会優勝を勝ち取ります。しかし、廃校の危機は去った訳ではなかったのです……



やっぱりねえ「ガルパン」も、いわゆる萌え系、女子高生系列の路線に乗かって出てきた、作品だと思うわけです。

ただ、女子高生が「戦車」に乗って戦う、というありえない「ぶっ飛んだ」インパクトが強烈だったんですね。

それが視聴者の度肝を抜き、アニメファンが文字通り「食いついた」訳です。

フツの女子高生を「リアルに」「ふつう」に描いた作品としては、廃部寸前の軽音楽部に入部した、女子高生達を描いた「けいおん！」がたいへんなブームになりましたね。彼女達は[「涼宮ハルヒシリーズ」](#) や[「中二病でも恋がしたい」](#) などの作品のように、自意識過剰のあまり、宇宙空間へワープしたりするようなことはありません。

また、その真逆もアリなのがアニメの魅力でして[「時をかける少女」](#) や[「サマーウォーズ」](#) のような、異次元空間を扱ったようなSF作品も人気があります。

これらの作品に共通するのは、

「魂は細部に宿る」

というセオリーを守っていることです。

そしてなにより

「子供達に対して子供扱いしない」ということ。

それをきちんと分っていらっしゃるのが、あの巨匠、宮崎駿監督であることは、僕が言うまでもないでしょう。

実は男子という生き物は、たとえ五十や六十になっても、やんちゃで、変なことにこだわったりする、愚かしい「子供」の部分があるのです。

(ちなみに男のアホさ加減「いくつになっても子供」であることを、端的に表現したのが、宮崎駿監督の『[紅の豚](#)』という作品ですね。ぼくはこれ大好きなんです。名作だと思ってます) そんな子供みたいなオッサン達を、優しく母のように包み込んでくれるのが、女性にしかない「母性」というものであります。

「オトコ」を戦車のようにうまく操縦するには、世の女性の皆さん、ここら辺りの「男のアホさ加減」をよお〜くご理解の上、ご配慮くださいますよう、よろしく願い申し上げます次第です。

はて、僕は何を書いているんでしたっけね。

そうそう「ガールズ&パンツァー」のことですよ。

本作も細部はちゃんと描けてます。

戦車のメカニズム、ディティールの表現そのものには、ちゃんと魂入ってます。しかしながら、僕が本作で一番、不満だったのは

「子供扱いされたこと」だったのです。

戦車ファンが観客だろうから、戦車どうしの闘いを、たくさん描けばいいだろう、というのは、いかにも安直すぎやしませんか？

これ、観客として、明らかに見くびられているぞ、と思う訳です。

先にあげた「けいおん！」や「サマーウォーズ」などは違いますね。

どこが違うか？

登場人物達が「ちゃんと生きてる」感じがします。彼女達、彼らは失敗もするし、葛藤し「ちゃんと悩む」んですね。

漫画界の巨人である手塚治虫氏は、はっきりと「勸善懲悪モノは描かない」と述べられていました。その典型が、無免許ながら、天才的な外科医の腕を持ち、途方もない報酬をふんだくる男「ブラック・ジャック」です。

彼もまた「命とは何か？」に悩む一人の医師でもあります。

かつて鉄腕アトムをアニメ化するときにも、手塚氏は言いました。

「アトムはもっと悩むんです。ハムレットのように」

そして手塚氏は子供達に「一流の」作品を届けようと思いました。

子供達だからこそ「一流」に触れておくべきだ、という信念があったのでしょう。

「ガルパン」テレビシリーズでは、ちゃんと登場人物達が生きてた感じがします。彼女達はそれぞれ、若さゆえの悩みや、葛藤、家庭の事情を抱え、彼女らなりに「大和撫子の嗜み」とされる「戦車道」に打ち込みます。

そこに彼女達の、未完成ではあるけれど、一所懸命頑張っている姿、不器用で、傷つきながらも成長する姿に、見るものは親近感を抱き、惹きつけられるんですね。

本作では、すでにテレビシリーズをご覧になった方、もう「ガルパン」のキャラクターは知り尽くしているよ、というファンの方なら、それなりに満足感は得られると思います。



お子様向けアニメ作品であろうが、映画は世相を反映してもいいし、また、紛れもなく時代の表層に乗っかるものでもあります。いま日本では、安保関連法案が成立し、集団的自衛権とか、自衛隊の海外でのドンパチも間近なのか？ など、軍事面での動きがクローズアップされております。

その中でなぜいま「戦車のアニメ」なのか？

本作は「戦意高揚」「プロパガンダ」ではないのか？ といった具合に勘繰られてもしたかない部分さえあります。

であるならば、その批判を逆手に取り、もっと志を高く持って、世界の平和のために、この「ガルパン」を活用してみてもどうか？ と僕は思う訳です。

本作は女子高生と「戦車」という「ぶっ飛んだ」組み合わせです。

これだけぶっ飛んだ企画なのに、なぜチマチマと「大洗」の市街地だけを舞台にするのか？

[「けいおん！」劇場版](#) ではイギリスに卒業旅行しましたね。

ならば「ガルパン」も世界に打って出るというのはどうでしょう。

例えば、国連主催の平和イベントとして、世界戦車道選手権大会みたいなのが開かれる。そこで日本の片隅の地方都市、大洗の街からやってきた、西住みほ達五人が、世界中の高校生達、そして多様な戦車とその戦い方を通して、そのお国柄、文化にふれあう、交流する。

ロシア人や、中国人はこんな風に考えているのかあ〜とか、フランス人は時に死んだふりをしてやり過ごす、とか、さらには中東、[イスラエルの戦車](#) だってメカニズムは素晴らしいものがあります。

その国の文化、考え方、技術力、国力、すべてが実に分かりやすく反映されるのが、意外にも「

戦車」を含めた「武器」に他なりません。

たかが戦車ですが、されど「戦車」でもあるのです。

僕を含め戦車に夢中になっている「男の子」たち。その「子供心」

その一端でもちょっとお知りいただければ幸いです。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 水島努

声の出演 漕上舞、茅野愛衣、尾崎真実、中上育実、井口裕香

製作 2015年

上映時間 119分

予告編映像はこちら

[「ガールズ&パンツァー劇場版」予告編](#)

母と暮せば

母と暮せば

2015年12月29日 [イオンシネマ明石](#) にて鑑賞

失った人、失った時間

劇場で鑑賞してから、本作のHPを見てみました。

ああ、なるほど、と「微妙に納得」

井上ひさし氏には「[父と暮せば](#)」という作品があります。

宮沢りえさん主演で映画作品にもなりました。舞台は原爆が落とされた広島。ならば、二発目の原爆が落とされた長崎を舞台に、作品を作らねば……。

それが「原爆」という、人類史上類を見ない虐殺兵器を、作品のモチーフとして扱ってしまった作家の義務である、と井上氏は強く思ったことでしょう。未完のままで自分は死ねないのだ、広島を描いておいて、長崎に生きた人々を描かないことは、創作者として、けっして許されないのだ、という強い思いがあったのだと思います。

その井上氏の尊い遺志を引き継いだ形で、山田洋次監督自らオリジナル脚本を書き上げたようです。これは山田洋次監督としても、大変なチャレンジでしょう。

井上ひさし氏、お得意の戯曲形式。舞台劇を強く意識した体裁で、本作「母と暮せば」は制作されております。

映画を見慣れた方なら、お分かりになると思います。

本作の特徴は、なんといっても

「長セリフ」

に尽きると思います。

山田洋次監督は、日本映画界の巨匠です。映画の、ど素人である私が言うまでもなく、映画という芸術作品をどのように構築して行けばいいか？ そんなイロハは、もう「映画職人として」体に染みついているはず。

たとえば「ここは観客の皆さん、泣いてくださいよ」と「わざとらしく」センチメンタルに演出する。そういうことはしない人だろうと思ってきました。

ところが本作では、あきらかに「セリフによって」「泣かせよう」という意図が見え見えの演技があるのです。もうそれが「臭いぐらい」分かっちゃうわけです。

もう一点、長セリフに関連して

「説明セリフ」

の多用が本作では特徴的です。

作品を見ていて、まさか「あの」山田洋次監督がこんな稚拙な手を使ってくるとは?! と当初僕は仰天しました。

普通、映画の主人公が、作中の相手や私たち観客に思い出などを語る時、冒頭のセリフをきっ

かけにして、あとは映像として引き継ぎますよね。

たとえば「あのとき私は……」と主人公が語り始める。

そのあと回想シーンが始まる。

当時の風景。客船であろうが、鉄道の駅であろうが、映画ならなんでも登場させられる。

そこに生きた当時の人々の息づかい。その時代の衣装、服装。

その中でクローズアップされてゆく、劇中の登場人物。カメラはそこに寄って行きます。さあ、

どんなドラマが始まるのか……と、まあ、こういうのが典型的な回想シーンのやり方。

映画の魅力と、映画のもつ最大の説得力とは何か？

それは「時間と空間を切り取った”映像”を自由自在に編集できる」ことに尽きると思います。

どの時代の、どの背景の、どの人物の映像なのか、それを編集という映画特有のマジックにより、

一瞬で時空間を飛び越えることができます。

しかし、驚くべきことに、本作において山田洋次監督は、その映画文法そのものを、かなぐり捨て

ることに挑戦したのだ、と私は解釈しました。



本作の主人公は吉永小百合さん演じる福原伸子。長崎の原爆で医大生の息子、浩二を亡くし、悲嘆にくれる毎日です。

そこに、ある日あの世から、息子の浩二の幻が現れます。許嫁の佐田町子（黒木華）は今も無事であること。そして、母、伸子は、日々の暮らしでの想いを、浩二の幻を相手に語ってゆくのです。

本作において山田洋次監督は、前作「[小さいうち](#)」に引き続き、黒木華さんを抜擢しました。

僕は「小さいうち」を劇場で鑑賞しました。黒木華さんの、昭和初期の古風で丁寧な言葉使い

、イントネーションで話される「長セリフ」

これは実に魅力的でした。

彼女はこの作品で、第64回ベルリン国際映画祭最優秀女優賞を獲得します。

本作「母と暮せば」を構想するにあたり、山田洋次監督の頭の中には「黒木華」という女優の長セリフの気持ちよさ、佇まいのよさ、というのが大きな前提としてあったのではないかと僕は推測するのです。

長セリフをやめて、従来通り、映像で語る手法をとるのは「安全策」です。

映画製作50年以上のキャリアを持つ山田洋次監督にとっては、実にたやすいことであつたでしょう。

しかし、山田監督はあえて新たな冒険を試みています。

説明セリフでどれだけ映画作品が成立するか？

巨匠と呼ばれる映画監督が、未だに新しいことに挑み続ける、その姿勢こそ、本作の最大の見所なのかもしれません。

また、商売上手のちょっと怪しいおじさんを演じた、加藤健一氏の名演に拍手を送りたいと思います。

本作においては吉永小百合さん演じる福原伸子、また、黒木華さん演じる佐田町子の登場シーンにおいて、ほぼ回想シーンがないのです。全ての時間はもう、二度と過去に戻らないのです。歴史上起こった事件、戦争は、もう引き返せない。時間は一方通行なのだ、という当たり前だけど、大切なことを思い知らされるのです。

現実とは残酷なものです。

将来の残酷な結果を見たくなければ、時代の流れ、時代の節目に、しっかり立ち止まって考える勇気を持っていたいものです。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 山田洋次

主演 吉永小百合、二宮和也、黒木華、浅野忠信、加藤健一

製作 2015年

上映時間 130分

予告編映像はこちら

2015 映画ベスト5

2015年映画年間ベスト5

毎年恒例企画となりました、私「天見谷行人」が独断と偏見で選ぶ「映画年間ベスト5」

その選考基準です。

- ①劇場でもう一度鑑賞したい作品であること
- ②DVDをコレクションしたい作品であること。
- ③上記2項目を両方満たす作品であること。

以上です。

では、早速発表に参りましょう。

洋画部門

第1位 [バードマン](#)

同1位 [セッション](#)

第2位 [シンデレラ](#)

第3位 [Mommy/マミー](#)

第4位 [おみおくりの作法](#)

第5位 [アメリカン・スナイパー](#)

次点 [イミテーション・ゲーム](#)

邦画部門

第1位 該当作なし

第2位 [バクマン。](#)

同2位 [深夜食堂](#)

第3位 [天空の蜂](#)

第4位 [FOUJITA](#)

同4位 [あん](#)

第5位 [海街diary](#)

同5位 [『仲代達矢「役者」を生きる』](#)

次点 [繕い裁つ人](#)

次点 [トイレのピエタ](#)

以上です。

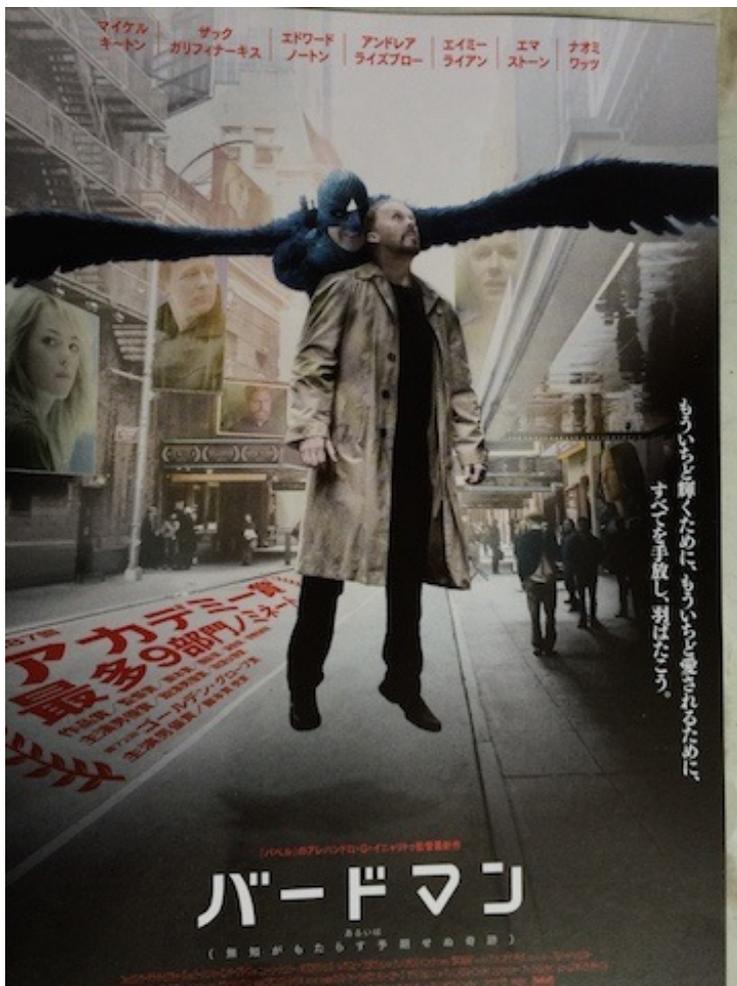
講評

講評

洋画部門

2015年度の洋画を一言で言い表すなら「インパクト！！」でしょう。

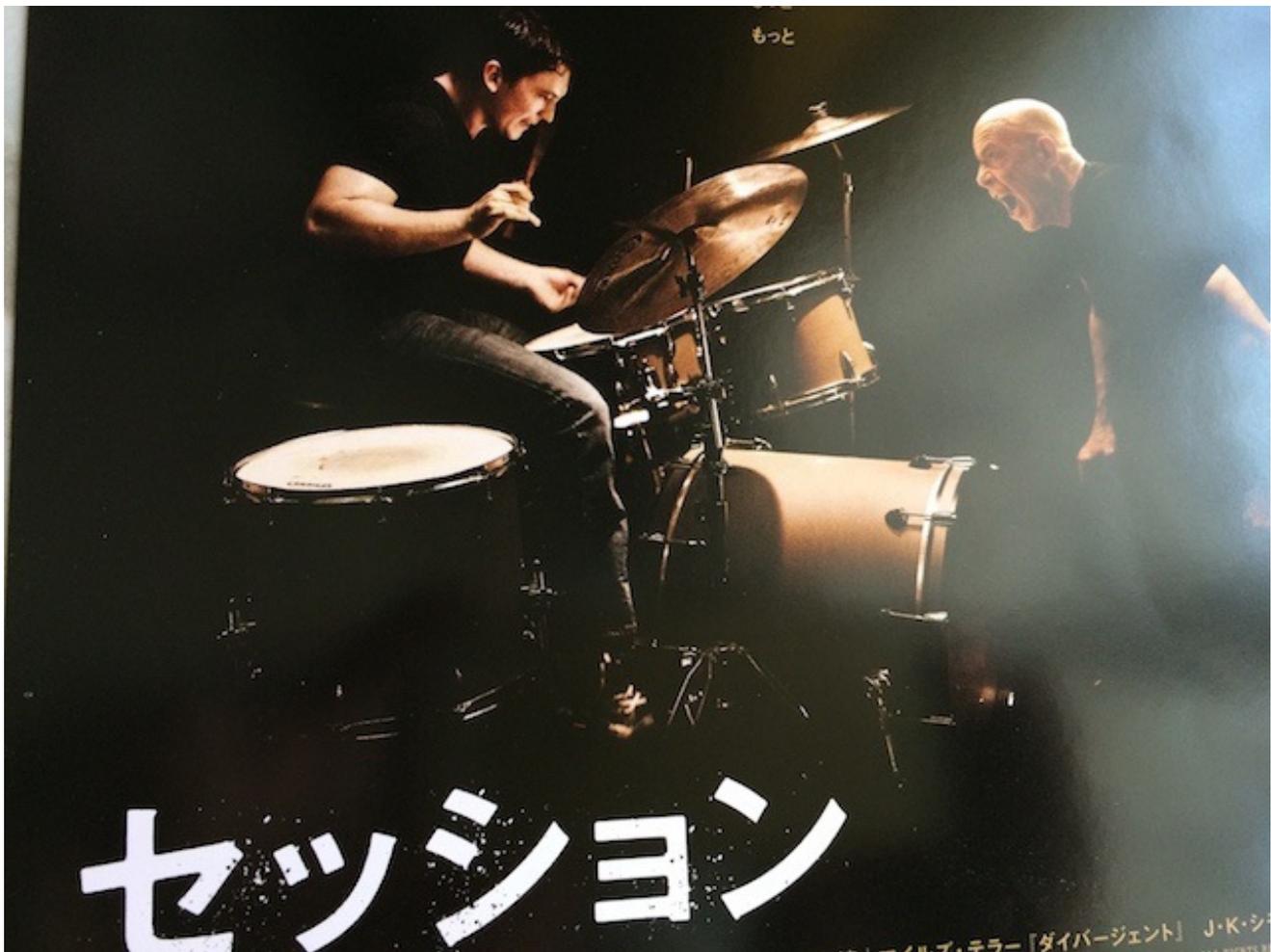
第1位は2作品とさせていただきました。



「バードマン」「セッション」
これぞ、「インパクト」です！！

強烈です！！

スクリーンで鑑賞の後、圧倒されて、ふらふらしながら劇場を後にしたのを、昨日のように思い出します。



第2位は「シンデレラ」を選びました。

世の中は辛いことだらけです。でも、映画を見ている間だけは、夢見る世界に入り込んでもいいじゃないですか。まさに非日常体験。それこそ、映画の大きな魅力でしょう。大人げない、女々しい、などと言われようが、僕は本作品を支持いたします。

第3位の「Mommy/マミー」

コアな映画ファンからは絶大な支持を集める、グザヴィエ・ドラン監督作品です。人にうらやまれるような、溢れんばかりの才能をもち、その上、俳優としても活躍。ルックスは抜群！！ 天や神様は、一人の人間に対して、なんでこうもあらゆる才能を与えてしまうのでしょうか。

しかし、その代わりに、グザヴィエ・ドラン監督自身が背負った宿命は、ある意味、皮肉な代償なのかもしれません。

いずれにせよ、今後も目が離せない、若手イチオシの監督であることは間違いありません。

第4位の「お見送りの作法」

これは、映画好き、映画マニアにとっては、絶対外せない作品ですね。おもわずニヤリとさせる演出が見事です。淡々とした語り口の映画なのですが、ラストシーンがすばらしい。この監督の人間への愛おしみ、優しさがあふれ出すようなエンディングでした。

第5位は「アメリカン・スナイパー」

巨匠、クリント・イーストウッド監督作品です。今や、この人の作品に、ほぼ「ハズレ」はありません。

どんなに戦争がハイテクになろうが、ゲーム感覚になろうが、戦争は人の心に取り返しつかない、深い傷を背負わせる、ということ。これがクリーンな戦争などと言われる「現代の戦い」

の紛れもない事実なのです。いくら権力者が美辞麗句をのべて、戦争を正当化しようとしても「正義の戦争」など結局は存在しないのだ、ということを本作は教えてくれます。

なお、次点は「イミテーション・ゲーム」とさせていただきました。天才と呼ばれた数学者が、ドイツ軍のエニグマ暗号機の解読に挑む物語です。脚本よし、キャスティングよし、がっちりした骨格の見応えのある作品です。

邦画部門

今年の邦画部門は、「飛び抜けて」「突き抜けるように」素晴らしい！ と言える作品が少なかったのが、個人的な印象です。

そのため第1位は、あえて「該当作なし」とさせていただきました

その代わりに言うてはなんですが、第2位は、2作品を選びました。

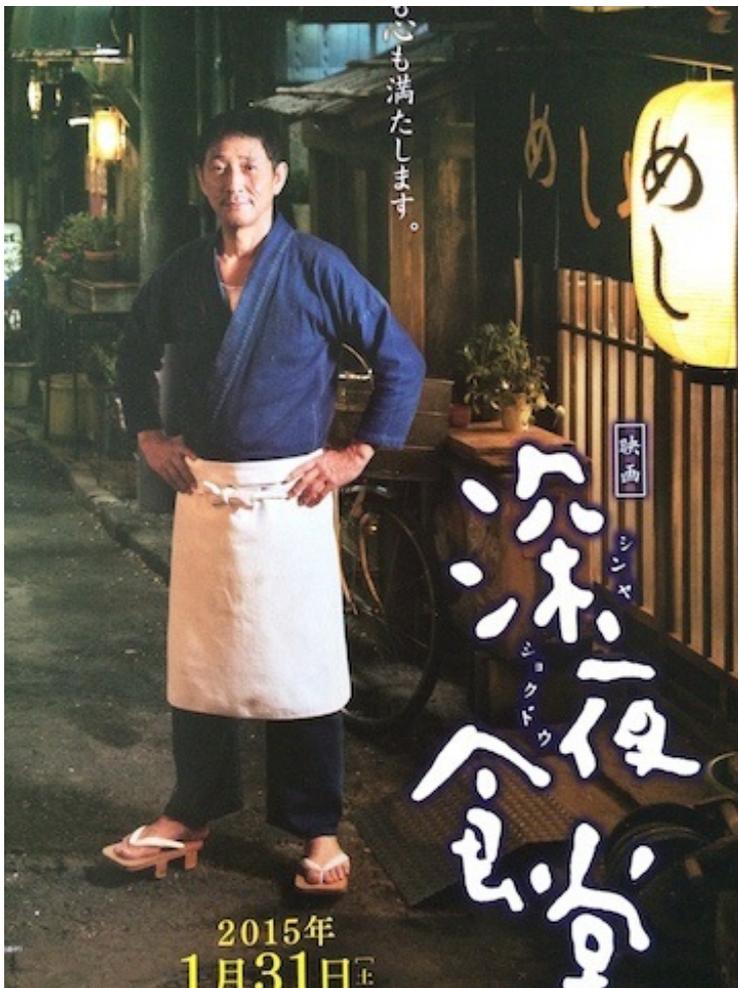
「バクマン。」は大根仁監督の攻め込んだ映像感覚が際立った作品です。



脚本も良く出来てました。

もう一つの第2位は、「深夜食堂」

僕はこのコミックのファンですし、テレビシリーズも欠かさず見ておりましたので、かなりエコヒイキいたしました。



本作は、エピソードをいくつか集めたオムニバス形式なのですが、できれば多部未華子さんのエピソードを、もっとふくらませて、単発作品として観てみたいなあ～、と思いました。

第3位は「天空の蜂」を選びました。

アクション・スペクタクル巨編というのは、あまり観ないのですが、本作は評価してあげないと可哀想なぐらい、よくできている作品です。

大体において「アクション大作」というのは、中身スカスカで「魂が細部に宿らない」という作品が多いんですが、本作は、劇場映画作品として、大胆かつ繊細に気を配って作り上げられています。

レンタルビデオでご鑑賞いただいても、ハズレなし、という仕上がりになっています。

今年のベスト5を選ぶ際に、実に悩んだのが、第4位と第5位でした。

これだけは「どうしても外せない」という作品がありました。

それが第4位の「FOUJITA」です。

僕は美術を扱った映画作品が大好きなのです。伝説的な画家、藤田嗣治。演じるのは「オダギリジョー」

こんな魅力的な「オ・イ・シ・イ」組み合わせはありません。アート系がお好きな方にはオススメの作品です。

「海街diary」と「あん」は、もういいでしょう。わざわざ僕がコメントするまでもありません。国内外からも高い評価を得ている作品です。見て損はありませんよ。

それよりも、僕がお勧めしたいのが

第5位にランクインした『仲代達矢「役者」を生きる』というドキュメンタリー映画です。

仲代達矢さんの舞台演劇への熱情。その舞台裏と日常生活を追った作品です。

日本を代表する役者である仲代さん。プロ中のプロほど、舞台の裏側、メイキングは見せたがらないものです。

しかし、歳を重ね、老いが迫る自分の姿。いまのうちに「仲代達矢」という役者の人生、そのリアルな姿を残しておきたい、と思われたのでしょうか。

後に続く、役者を目指す若い人たちに、ぜひ見ていただきたい貴重な映像遺産だとおもいます。なお、次点の2作品も僕にとっては、愛おしくなるような、大好きな作品です。

「トイレのピエタ」

これはみずみずしい映像感覚が抜群でした。元ネタは手塚治虫氏の病床日記にあるとされています。

「繕い裁つ人」

この作品はまさに大人のためのファンタジー。静かで端正、薰り立つような品の良さを持っています。

僕の地元、兵庫県、神戸市でロケーションが行われているのも嬉しい作品です。

さて、2016年はどんな映画に出会えるのでしょうか？

来年もこの企画続けていきたいと思っています。

天見谷行人

2015・映画に宛てたラブレター総集編

<http://p.booklog.jp/book/101856>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/101856>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/101856>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ